

---

# おさなくあるもの

シロクロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おさなくあるもの

### 【Nコード】

N5027C

### 【作者名】

シロクロ

### 【あらすじ】

ハクオロが少年だった場合を妄想した小説です。決してとれない仮面をつけた少年が怪我をして拾われた。記憶喪失でハクオロと名前をもらった少年がその村に住みだすことから物語は始まります。

## 僕はハクオロ（前書き）

これは《うたわれるもの》の二次創作小説です。

テキストに書いてたりするので「イメージが壊れた」や「こんなの

じゃない！」などの精神被害を訴えられても責任は持てません。  
自己責任でお読みください。

## 僕はハクオロ

「…んん？」

青年、というより少年にあたる男が目を開けると、少女がいた。誰だろう？というかここ何処？

「大丈夫ですか？」

「…ここ、は…痛！？」

起き上がろうとすると体中が軋むように痛んだ。少年は思わずまた布団に倒れて唸り声をあげた。

「あぐう〜」

「ま、まだ寝てなきゃ駄目ですよ。酷い怪我で倒れてたんですから。大丈夫ですから、寝てください。」

少女は優しい手つきで少年に布団をかけ微笑んだ。

なんだろう。凄く、体が重い。

「あ…りがとう…」

瞼も…重…い。

少年は目を閉じて眠りについた。

「ん…んん…」

「！」

再び少年が目を開けると今度はさっきより幼い少女が酷く驚いた顔でいた。

「…君は…？」

声をかけたがすぐに何処かへ走って行ってしまった。何だったんだろう？

「あ…。」

また眠気が…お休みなさい…

、。

そして少年はまた眠りにつくのだった。

「…あ？」

「あ、目が覚めたんですね。怪我の具合はどうですか？」

少年は起き上がり腕を回してからんーと伸びをした。

うん、まだちよつと痛い気もするけどばつちりだ。

「大分、良くなったよ。ところで、なんで僕がここにいるの？怪我  
つて？」

「覚えてないんですか？」

「うん。」

「地震があつた日に、森であなたは凄い怪我で倒れていたんですよ。」

全然ピンと来ないけど、体中包帯だらけだし本当なんだろうな。

「じゃあ、君は命の恩人だね。ありがとう。看病までもらっちゃって悪いね」

少年がにつこり笑つて言うと少女はどこか慌てたように手をふり否定する。

「い、いえ…当たり前のことをしてだけです。手当ても…私はおばあちゃんの手伝いをしてだけですから。」

「そう？でも、やつぱり助けてくれたのには変わらないから、ありがとう。助かったよ。」

「そんな…。えっと、私はエルルウです。あなたの名前は？」

「んー…？あれ？僕は……んん？あれ？」

何か全然わかんないというか、名前どころか…僕って何？人間？男？女？

「分からない」

「え？じゃあその変な仮面のことも？」

「え？仮面…？」

言われて少年が顔に手をあてると、確かに固いものがあるのが確認できた。エルルウがすかさず鏡を持ってきた。

鏡を覗くと映っているのは顔の上半分を隠す鬼のような角のある白い仮面をつけた少年だ。

仮面により顔の造りや年齢はあやふやだが、背格好から少年が成人していないのが分かる。性別は先ほどからあるように男だ。

…ていうか僕は本当、何歳？子供？大人？

「ねえエルルウ、僕は何歳に見える？」

「えつと…16、7歳？私とそんなに変わらなく見えます。身長も私よりちよつと高いし。」

「そうなんだ？でも僕…自分で言うのアレだけどなんか幼く見えな  
い？」

「……はい。運ばれて寝ている時は普通に16、7と思ってたんですが…今はもつと下に感じます。仮面してるのに、何ででしょう？  
雰囲気？」

とりあえず外そうしてと少年は手をかけるが

「ぐっ！？」

引いた瞬間、頭が割れるような激痛に思わず手を放した。落ち着いて今度は優しく外そうと試みるが…。

「ぐざぎざいい！」

無理に外そうとすると頭がかきまわされるように、引き千切れるように痛んだ。少年は諦めて手を放す

「っ、はあっ…」

「もしかして、外れないんですか？」

「うん」

「じゃあ、ずっとそのままなんですか？」

考えたくないことをさりとて言われて少年はあはたと空気をだし  
てみる。

「ま、まあね。でもほら、つけたままでも生活に問題はないし…ん  
？」

少年はエルルウの耳に違和感を感じて視線を送る。

凄いい今更だけど、エルルウ、動物の耳みたいなのつけてる。アクセサリーかな？

エルルウは立ち上がって何か食べる物を持って来ますと反転して部屋を出た。そして少年はそのお尻から生えてるものに仰天した。尻尾もある！？揺れてるのは…歩いてるからだよね？

5分くらいたつとエルルウは戻ってきた。

「お待たせしました。ちよつと冷ましますね。」

エルルウは少年の寝ている布団の隣に座り、お粥みたいな白いものをすくってふーふーと息をふきかける。少年はちらりと尻尾を見る。

「あ…ありがとうございます。」

動いてる…確実に動いてるよ！

「はい、どうぞ。」

エルルウはスプーンを差し出す。病人とは言え甘えてると思いつつ少年はこの際なので甘えることにする。

「ん、美味しい。エルルウがつくったの？」

「はい。」

「エルルウは料理上手いんだね。手当てもできて…才色兼備？」

「そんな…大したことじゃありませんよ。」

うお！尻尾が！尻尾がめっちゃめっちゃ振れてる！？

エルルウが頬を染め、そしてそれに呼応するように勢いよく振れだした尻尾に、少年の目は釘付けた。

「もう…次、いきますよ。」

エルルウはまたお粥をすくいふーふーと息をふきかけだした。しかし少年にはこれ以上、好奇心を抑えられない。

「エルルウ、ちよつといい？」

「え」

少年はエルルウの尻尾を優しく握ってみた。

あつたかくて柔らかい。…って本物！？

「はにゃあ！？…あ」

「え」

エルルウの声に少年が顔をあげると、お粥の器が宙を舞っていた。というか、少年の顔に向かって飛んできていた。

「あぎゃああああああ！！」

避ける間もなく少年は頭からお粥をかぶった。

「すすすみませんすみません！で、でも女の子の尻尾を勝手に触っちゃ駄目ですよ！！」

マジで、もうしないから許してくださいエルルウさん。

「…ふう、酷い目にあつた。」

「な…だ、だから尻尾を触るからです。失礼でしょう。」

「ごめんなさい。…まだ顔がヒリヒリするよ。ていうかその尻尾本物？」

「尻尾に本物も偽物もあります！もう！」

「ずいぶん元気な声じゃったが、具合はもうええんかえ？」

ぷりぷり怒るエルルウをどうなだめようかと少年が考えていると老女がやってきた。そして老女にも耳と尻尾はある。

やつぱり僕が感覚がおかしいのかな？記憶ないし。

「あ、もしかしてエルルウの言つてたおばあ」

「トウスクルさんと呼びな。」

「…はあ、えっと、助けていただきありがとうございます。」

「礼なら二人に言いな。献身的に世話をしとったからのお。」

「二人？」

言われて入口をみると昨日かどうかは少年の記憶では分からないが見覚えのある少女がいた。

「アルルウ、ちゃんとご挨拶なさい。」

「……」

やはりと言うか少女は何も言わずに逃げてしまった。



嫌われてるのかなあ… ってそりゃいきなり家にあがりこまれていい気はしないよね。

「ご、ごめんなさい。今のは私の妹のアルルウです。人見知りが激しくて…。」

「いや、気にしないで。アルルウー！ありがとねー！」

聞こえてるかは分からないが少年は叫んだ。伝わっていないならあとでまた言えればいい話だ

「ほんで、お前さんの名前は？」

「分からないんです」

「そうなの、この人記憶がないみたいで…おばあちゃんの薬で何とかならないの？」

驚いた顔をしたトウスクールにエルルウがそう問うが、トウスクールは首を横に振る

「失った記憶を戻す薬なんてないんじゃないよ。時がたつのを待つしかないのさ。なあに、そう悲観的にならんでも、そのうちひょっこり思い出すじやろうて」

「はあ」

別に悲観的にはなっていないけどね。為せば成る為さねば成らぬ何事も。ま、成るように成るさ。てか知識はあるんだよね

「まあ名前がないなら…ハクオ口。記憶が戻るまでハクオ口と名乗るとええ」

「え…？」

エルルウは驚いたようにトウスクールを見たが少年　ハクオ口は気づかずに頷いた

「分かりました」

「それと、そんな裸同然で動きまわるわけにもいかんじやろ。エルルウ、服を用意しておあげ」

「うん」

ハクオ口、ハクオ口ね。まあいいか。にしても世話になりっぱなしで悪いなあ

「息子の服じゃ。少し大きいがうちには男物はそれしかないからの。我慢せえ。」

アルルウに手伝ってもらい着た服は多少色々とだばついていたが、ひきずるほどでもない

「我慢なんてそんな…足元を折り返せばいい話です。ありがとうございます。」

その時、物音がして振り向くとアルルウがいた。ハクオ口は声をかけようと口を開いたが

「違う。」

とだけ言つとアルルウはまた逃げてしまった。

…何が？

「ふふ、きつとハクオ口さんがお父さんの服を来てたから驚いたんです。身長は違いますけどアルルウから見たらそう変わらないだろうし、きつと後ろ姿が似て見えたんじゃないでしょうか。」

「ふうん…ところで君の両親は見ないけど？」

「お父さんは亡くなりました。お母さんもアルルウを産んですぐに…。」

「ごめん。悪いこと聞いちゃったかな？」

「いいんです。昔の話ですから。……実は、ハクオ口、ってお父さんの名前なんです。」

「そうなんだ。」

「はい…あ、何だかしんみりしちゃってすみません。怪我也大分良くなつたみたいですし、少し外を歩いてみませんか？」

「うん。お願いしようかな。」

ハクオ口は元気に笑うエルルウの頭を何となく撫でてやる。理由はなかった。ただ漠然と頑張ってるなあ、いい子だなあと思って、何となく撫でてみたのだ。

「な、何ですか？」

エルルウは顔を赤くしながら戸惑いの声をあげるがハクオロは気にせずにつこり笑う。

「別に。行こっか。」

「…はい！」

トウスクルさんが横でニヤリと笑っていたが、二人は気づかなかった。

## 村に住もう（前書き）

二次創作でかつ文才もなくテキトーなノリで書きます。  
苦情は承れません。

それでもいいと言っ方のみどうぞ。

## 村に住もう

「ようエルル」

村を散策しだしてすぐに、大柄ないかにもオヤジな顔の男がエルルウに挨拶をしようとして、ハクオロを見ると固まった。

「エルルウ、誰だこの妙な仮面男は？」

仮面男って…もしかして僕？

「あ、テオロさん。誰ってほら、この間の時の」

「……ああ、村長んトコに担ぎこまれた。…ふうん、仮面なんかつけて怪しげだが…大丈夫なのか？」

無遠慮にハクオロをテオロは見る。ハクオロとしては仮面は事実なので何とも言いようがない。

「もう、初対面でそんな言い方失礼じゃないですか。大丈夫ですよ。こう見えて意外と……えと、とにかく大丈夫です。」

「こう見えても？意外と？…で今の間は何？」

「そうか、いや悪かったな。俺あテオロってんだ。お前さんは？」

親しげに笑うテオロ。

「あ、ハクオロだよ。」

トウスクールには何となく敬語を使ったハクオロだったが基本的に敬語はなしでいくつもりだ。というか相手がフランクな雰囲気なので尚更だった。

「ハクオロなあ？」

急に胡散臭い者を見る目で見られたがエルルウが急いで説明する。

「あ、おばあちゃんがつけたの。この人記憶がないみたいで…。」

まあ、エルルウのお父さんと同じ名前ってすぐ分かるよね。エルルウとも親しいならそのお父さんとも親しいだろうし。エルルウの説明を聞くとテオロは急にぶつと吹き出し豪快に笑いだした。

「だーっはっはっはっ！」

「？」

「いや、災難だつてのに笑っちゃいかな。でも記憶がなくなっちゃうことがあるんだなあ。それじゃ、俺と同じ、オロがつく名前ってことは兄弟だな。よろしくなアンちゃん！」

がっしり肩を組まれハクオロは困惑しながらも相槌をうつ。

「う…うん。」

『アンちゃん』って…兄だよな？どーみても僕のが年下だし。あ、でも若い人を総じて言ったりもするから問題ないのかな。

「俺のことはみんなと同じようにオヤジと呼んでくれや。親父のように強く、たくましく、頼りになる、ってな。」

いちいちポーズをとるテオロの背後からやってきた人物が肘でテオロをつついた。

「何言つてんだい。親父のように老け顔だからじゃないかい。」

「ぐっ…カアちゃん。」

やってきたのはハクオロと同じくらいの背の女性だ。

「うちの宿六が騒がしくてすまないねえ。どれ…あんたが…男前、かどうか仮面をつけてちゃ分からないねえ。エルルウと同じ年かい？」

「17歳だよ。」

と言うことにしておこう。子供に見られるのもなんか癪だし。

「そうかい。身長はいまいちだけどまあ17ならまだ背は伸びるだろうね。ま、とにかくエルルウ、この珍妙な…ちんこまえそうだね、珍男前に

あたしのことも紹介しておくれよ。」

ちんこ…誉められてるのかバカにされてるのか分からないや。

「はい、この人はソポク姉さん。テオロさんの奥さんです。」

「姉さんということは…」

「あ、血は繋がってませんよ。年上の人には大抵兄さんとか姉さんとか言っんです。」

「村の人はみんな家族みたいなもんだからね。」

「だがよ、俺は一度も兄さんと呼ばれたことねえんだけどな。」  
頭をかいて言うテオロをソポクが肘でつついた。

「いったいお前さんのどこを取れば兄さんになるのさ。」

「ング」

「あはは、まあとにかく、二人ともよろしくね。」

「ところで、家のほうはもう治ったの？」

「ま…あと少しってとこだ。まったく、突然揺れたと思ったら容赦なくヒトン家を倒していきやがって。」

「だから建てる時に真面目にやれと言ったじゃないか。それをあんなときたら、面白がって変に組み立てたりして…うちだけだよ。あんな見事に倒れたのは。」

「わ、悪かったよ。」

「あはは。でもあんな地震は久しぶりだったね。」

「エルルウたちは大丈夫だったかい？その時アルルウと苔や石ころを採ってたんでしょ？」

「うん。びつくりしたけど、出口の傍ですぐに逃げたから。それよりソポク姉さん、『苔や石ころ』じゃなくてお薬の材料だってば。その言い方だと、まるで苔や石ころを拾うのが好きみたいじゃない。」

「あはは。何言ってるの。色々草や石を採るの好きなんだろう？その時のエルルウは目の輝きが違うじゃないか。」

「う…」

「どうしたんだい？今まで気にしなかったのに。」

「そう言いながらソポクはハクオ口に視線を向けると何かを納得したような、少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ははあん。」

「な、何なの姉さん。」

「奥手だと心配してたけど…いらなかったみたいだね。」

「ね、姉さんっ。」

何の話だろ？

ソポクはにやにやとハクオ口を見てくる。

「何？」

「でも、この手は苦勞するよ。鈍そうなのはウチのとどこいだね。」

「姉さんてば！」

「はいはい。」

「さて、そろそろ始めるか。それじゃアンちゃん、今度歓迎会するから楽しみにしてくれ」

テオロが嬉しそうにそう言うと言わくが呆れたように肩をすくめた。

「あんたが飲みたいだけだろう？」

「ング」

「全くこの宿六は…」

「あははは」

陽気でいい人たちみたいだな

それから何人とも挨拶まわりのようなことをしていい加減くたくたになってしまふのが普通なのだが、ハクオロは昨日まで寝込んでたと思えない元気さだった。

気が付けば人は遠くにしかいなくて土が露になっていて寂しいような場所にまで来ていた。

「……もしかしてこの辺で畑にしようとした？」

「え、はい。でもどうして？」

「掘り返したあとがあるからさ…んー。」

ハクオロは畑（仮）に入っていくと屈んで土を握って何かを確かめ始めた。

ずいぶん痩せてるなあ。これじゃあ水もすぐ吸うだろうし…でもこれくらいなら、何とかなるんじゃないかな

「エルルウ、もう開拓はやめちゃったの？」

「諦めたくはないんですけど…何度やつても駄目で…」

「やろうよ。大丈夫。僕が何とかするから。きっと大地だって、そ



うして欲しいと思ってるよ。」

ハクオロは立ち上がって、につこり笑った。エルルウはキョトンと  
していたが、やがて言葉の意味を飲み込んで頷いた。

「分かりました。じゃあ、みなさんに言わなくちゃいけませんね。  
でも、どうするんですか？今まで本当に駄目だったんですよ？」

「うん、それで用意して欲しいものがあるんだけど。」

「ハクオロ、お前さん、あの畑を何とかするつもりだそうだね。」  
自分の、と勝手に言ったがハクオロが担ぎこまれて寝ていた部屋で  
机に向かってしていると、トウスクールがやって来た。

「あ、はい。それでお願いがあるんですけど。」

ものつ淒い図々しいというか言いづらいんだけど…

「うん？なんじゃ？」

「じ」

「おばあちゃん、ハクオロさん、ご飯が出来ましたよ。」

タイミング悪くと言うかエルルウが居間から室内に顔をだしてそう  
言ったのでトウスクールは踵を返した。

「ああ、今行くえ。飯の席でもええかね？」

「はい。むしろ二人にも聞いてもらいたいですから。」

ハクオロも立ち上がり居間に行く。いい匂いが食欲をそそる。そう  
言えばハクオロはこの村に来てからお粥を食べただけだ。思い出す  
と急にお腹が減った。

「ほほお奮発したのあ。」

「今日はハクオロさんの回復祝いだもの。」

アルルウもエルルウと揃って囲炉裏の回りに器を並べていた。

逃げられてばかりだからようやくアルルウの顔をはつきり見た気がするよ。

座布団が4つあるので空いている場所に座ると、みんなが揃って手

を合わせたのでハクオロは訳が分からないがとりあえず手を合わせた。

「それではいただきますかね。」

「森の神さま（ヤーナウン・カミ）、いつも恵みをありがとうございます。大神ウィツアルネミテアに感謝を。」

ヤーナウン？ウィ…何だろ？

唄うように唱える3人に全く分からないがとりあえずハクオロも

「か、感謝…」

と言った。

「いただきます」

あ、この芋みたいなのをタレにつけたりおかずと食べるんだ。確かモロロ芋、だっけ

もの凄い勢いで食べ始めるアルルウにハクオロはさっきまで思いきり食べてやろうと思っていたが、ゆっくり食べることにした。

「アルルウ！もっと落ち着いてしっかり噛んで食べなさい！あ、ハクオロさん、おかわりはいっぱいありますからちゃんと食べてくださいね。」

「ありがとう。美味しいよ。エルルウが作ったの？」

「はい。ありがとうございます。ってアルルウ、食べ過ぎよ」

「まだある」

「それはハクオロさんの分よ」

「一個だけ」

「駄目よ」

「半分…」

「駄目ったら」

「う…」

唸るアルルウが少し可哀想になりハクオロは

「僕ならいいよ。」

と言いながらアルルウにおかずを差し出した。

「駄目です。病み上がりなんだからちゃんと食べてください」

「食べてるよ。エルルウのご飯は美味しいからね。でも、これだけで十分だから。はい、アルルウ。」

「……」

「あの」

「ん？…っ！」

ハクオロが一瞬エルルウに気をとられた隙に、アルルウはハクオロからおかずを奪って食べた。

「アル！すみませんハクオロさん。えっと、私のをどうぞ。」

ぐう。と小さな音がエルルウのお腹からした。エルルウは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「あはは。いいよ。僕はいいからエルルウが食べなよ。」

「さて、話が落ち着いたようじゃがハクオロ、さっき言っておった願い、とはなんじゃ？」

「あ、はい。実は…僕をこの家に置いて欲しいんです！勿論、家ができるまででいいんです。その、この村以外に行くところもないし、みんなとも知り合ったし。」

ハクオロは頭を下げるがトウスクールはひょうしぬけしたように頭をあげと言った。

「なんじゃそんなことか。ええよ。家なんか作らんでええよ。何か思い出すまでこの村に、この家におればええ。」

「でも…さすがにそれは迷惑でしょう？」

「構わんよ。困った時はお互い様じゃ。生きていくだけの糧は森の神さまが恵んでくださる。一人二人増えたところで変わらんから、気にすることはないて。」

「そうですよ。」

「アルルウも、それでええな？」

「ん。」

ガツガツガツ。アルルウは殆ど上の空のように食べながら返事をしたが、エルルウに聞いたかぎりでは嫌われていないようなので実際に構わないのだろう。構わないのだろうが、ハクオロはちょっぴり

傷ついた。しかしそれよりトウスクールたちの優しさが嬉しくて、ハクオロは満面に笑みを浮かべた。

「ありがとうございます！この恩は忘れません！」

「ええんじゃよ。この辺境の地はお世辞にも豊かとは言えん。だからこそ、みんなが助け合わねば生きていけん。そうそう、ワシはここで村長と呼ばれとる。何かあつたら遠慮なく言つとええ。」

言われて何人かが「村長の家に」などと言っていたのをハクオロは思い出す。

「よろしくお願いします！」

ハクオロは深々と頭を下げた。

## 仲良くなりたい

「よいつしよっ…ふう。」

自分で言い出したとは言え…畑仕事って重労働だなあ。

鍬を地面に突き刺して腰に手をあててハクオロが一息ついていると、エルルウが寄ってきてタオルを差し出した。

「大丈夫ですかハクオロさん、病み上がりなんですから無理しないでくださいよ。」

「え、いや…」

それはもう全然問題ないんだけど…。

タオルを受け取りながらも体力不足ですとは言えずに困っていると、テオロがきた。

「アンちゃん、無茶すんなって。俺たちに任せとけよ。」

「あー…うん、じゃあ休憩させてもらおうかなあ。」

餅は餅屋って言うし…。いやホラ僕病み上がりだからゲホゲホ。

「あ、あと石は砕いてもうちょっと深く掘ってね。念入りをお願い。」

「キツイことさらつと言ってくれなせ。」

「あ、その…ごめん。」

「なあに気にすんな。そうしないとモロ口芋もできねーんだろ？よし！休憩終わりだ！みんな気合いいれろお！」

テオロが叫ぶと同じく畑作業に従事していた男たちからブーイングが起こる。

「全く、人使いがあらいな。」

「年寄りには労らんか…」

「あの！み、みんなごめん！僕が言い出したから…」

ハクオロが申し訳なさそうに身を縮こませ言つと、ブーイングは収まり口々にフォローをしてくれた。

「いいんじゃないよ。ちよつと愚痴っただけじゃ。」

「そうそう、みんなやらなきゃとは思ってたからな。ハクオロは俺たちに指示してくれればさ。」

「…ありがとう。」

僕って幸せだなあ。記憶がなくなっただって、こんないい村の住人になれたんだから。

ハクオロが外にを歩いていると木陰でアルルウがうとうと眠りそうになっているのを見つけた。

アルルウ…かあ。エルルウは嫌われてるわけじゃないって言うってたけど、未だに顔を合わせただけで逃げちゃうんだよね。ようし。

ハクオロはそつとアルルウに向けて一歩踏み出す。

「…ん。」

アルルウはピクリと耳を振るわせた。

「！」

「……」

またうとうとし始めるアルルウにハクオロはほつと息をつく。

鋭いな。よし、もつと気配を殺して…一歩、二歩……。

ゆっくりゆっくり近寄り、何とか手を伸ばせば届く距離にきたハクオロは、アルルウの顔をじっくり見た。

可愛いなあ。無垢ってこういうのを言うのかな。僕も妹が欲しいなあ。何というか和む。

ハクオロはアルルウの前にしゃがむとそーっと手をのばし、頭を撫でた。

「ん…。」

よし！気づいてない！

アルルウは目を覚まさないどころかハクオロにとっては嬉しいことに甘えるように手に頭を押し付けてくる。

「ん、んふ…。」

くーっ、寝ぼけてるとはいえあの逃げてたアルルウが甘えてくるなんて…感無量だよ。

耳と尻尾をパタパタ振りながらアルルウは

「んにゅー。」

と可愛らしく甘えた声をだす。

やっぱり尻尾とかつてあるのが当たり前なんだよね。記憶喪失って物事の認識までおかしくなるのかな？

「…あ。」

ついに尻尾はパタパタを越えてばっさばっさと勢いよく振れ、ハクオロの顔に当たりだす。

「あ…っ…。」

く、くしゃみが出そう…っ！

「は。」

「んふー。」

「はつくしよーんっ！」

「っ…!!?」

アルルウは飛び起きると脱兎の如く逃げてしまった。

「……残念。」

本当に、非常に、残念だ。いつか、いつか起きてても僕に甘えるくらい仲良くなつてやる！

「おばあちゃん、行ってきます。」

「ん。」

「あ、アルルウも行く？」

「うん。」

聞こえてきた会話になんだろうとハクオロが顔を出すとトウスクールが見つけて手招きをする。

「そうそうハクオロ、よければお前さんも一緒に行ってくれんか。」

「良いけど…何処に？」

家族、ということなので何となく迫力があるトウスクールに敬語を使っていたハクオロだが今はもうやめている

「フォッホッホ、エルルウに聞きな。頼んだえ。それじゃ3人とも、気をつけてな。」

「行つてきます。」

「わかつとると思うがくれぐれも『奥』へは行かんようにな。」

「うん大丈夫。」

家からだとエルルウは鎌や鍬のはいつたずいぶん大きな籠を背負った。

「持とうか？」

「え？あ、いえ、持つてもらうほど重くないですから。」

「ならいいけど、エルルウと身長はそんなに変わらないけど、僕は男なんだからちよつとくらい頼つてもいいんだよ。」

ていうか逆に寂しいし。

エルルウは目を見ひらいてからはちくりと瞬きをして、頬を赤くして微笑んだ。

「ありがとうございます。じゃあ、その時はよろしくお願いしますね。」

「うん。ところで何処に行くのかな？」

「麓の森まで薬草摘みに。行こつアルルウ。」

「ん。」

集落を出て岩肌がのぞく道をゆっくり降りて行く。半刻ほど歩くと斜面はなだらかになり、辺りの景色は緑になる。そして突然、見上げるばかりの巨木たちが3人の前に立ちふさがった。

凄い…こんな麓近くにこんな広大な森があったんだ……ん？そういや僕、森で発見されたんだよね。ここかな？でも…全然覚えてないや。……………まあ、いつか、別に生活に困ったりしてないし。

「つて、ん？」

ハクオロが我にかえると二人が何やら小さな祠に向かって何事かを



唱えていたが、やはりハクオロにはよく分からない言葉だらけだった。

「何してたの？」

祈りが終わったらしい立ち上がった二人に尋ねる

「森の神さまに祈りを捧げてたんです」

「ふうん？」

あまりピンとこないので恐らく以前のハクオロは信仰と無縁の生活だったのだろう

「ところでトウスクールは何で奥に行くなって言ってたの？」

「……」

「エルルウ？」

「あ、すみません。まだおばあちゃんが呼び捨てにされるのに慣れなくて」

「えつと、やつぱり尊敬する家長を呼び捨てにされると気分悪いかな？ アルルウはどう？」

「……」

アルルウはエルルウの後ろに隠れてしまった。

はは、泣いてなんかないさ。

「ごめんなさい。もうアルルウったら。でも慣れてないだけですわ。おばあちゃんがいいって言ってたしいんじゃないんですか？ まあ珍しいですけど」

「そう？ まあいいや、で、何で駄目なの？」

「奥には『主』<sup>△ティカバ</sup>様がいます。勝手に入ると襲われちゃいますよ。」

両手をあげてガオーと真剣に獣の真似をするエルルウが微笑ましくてハクオロはくすくす笑う。

「な、何がおかしいんですか。」

「え？ いや…そんな言い伝えがあるんだね」

むっとしてジト目で見てくるエルルウにハクオロは目をそらす

「え？ 言い伝えじゃありませんよ。本当に主様はいますよ」

ぱつと真顔になりエルルウは言い、ハクオ口も視線を合わせる。  
ほ…本気の目だ

「…マジ？」

「はい。私はあったことないんですけど噂では」

「おねーちゃん。」

「え？」

アルルウの呼びかけにエルルウは話を止めて振り向く

「まだ？」

「あ、ごめんね。行こっか。」

「ん」

「ちよつ、エルルウ噂って」

「アルルウ、早くー」

「……ん」

アルルウは一瞬ハクオ口を見たがすぐにエルルウを追い掛けた  
噂って何ー！？

「あ、あつた目印。じゃあこの辺でしようか。」  
「ん。」

エルルウが籠を降ろすと二人はそれぞれ、ハクオ口には雑草にしか  
見えないものを選びすぐんでは籠に入れていく。

「エルルウ、僕に出来ることない？」

「……えつと、二人で大丈夫ですから休んでいいですよ。」

戦力外通知！？でも僕負けない！…我ながらキモイかも

「ちよいとエルルウさんや。」

「はい？何ですか？」

「それは何の薬？」

「これは煎じて解毒薬に、こっちはお腹痛に効きます」

「へえ、エルルウって博識なんだね。」

「そ、そんなことありませんよ。私はただおばあちゃんの作業を毎日見てたからで……。」

エルルウは頬を赤くして否定するがハクオ口はうつんと首を横に振る。

門前の小僧ならぬ薬師の孫、なんてね。

「でも凄いや。それは誇っていいことだと思う。」

「あ……ありがとうございます。」

にしても……僕には全然分かんないや。よし、言われた通り休憩しとこハクオ口は適当な木にもたれて目を閉じた

ハクオ口は目を覚ますときゅっと目を閉じて思いきり腕を空に向けて伸びをする

「んーっ！はわわあ、エルルウ、今何時ー？……あれ？」

欠伸ながらにした問いには返事がなく、一瞬、置き去りかと慌てたが籠があるので違うかと落ち着いた。

するとこらー！と何とも元気な声が聞こえてきた。

「ん、あつちか」

ハクオ口が声の元に行くとエルルウが木の上に向かって叫んでいた。つられて見上げるとアルルウが呑気に果実を食べていた。

「こらー！早く降りてきなさい！お姉ちゃんの言うことが聞けないのー！ー！」

元気だなあ

「エルルウ」

「……え？あ、その、これは」

ハクオ口が声をかけるとエルルウは恥ずかしそうに言い訳をしようとしたが、それより先にハクオ口がアルルウを見上げる

「あんまり急かして落ちても危ないし、のんびり待とうよ」

「あ……で、でもあの子、あんまり高いと登れても降りれないんです。」

「え…あ、アルルウー!?」

「…うゝ。」

アルルウは木の幹に抱きつきながらオロオロと下を見ている。  
君は子猫か!! まあ仕方ない。

「僕が迎えに行くよ。」

「でも怪」

「怪我なんてとつくに全快だよ。かるうく救出してくるよ。」

ハクオロは宣言通りすいすい木を登っていく。畑仕事ではすぐにバテるくせにこういうことは得意なのである。

「っ…」

「って逃げようとししないで。大丈夫大丈夫、怖くないよ。」

幹にしがみつきながら手をアルルウに伸ばす。

「うゝ…。」

「そうだ、今日の晩御飯のおかず僕のをわけてあげるよ。だからおいで。」

「……」

本当に子猫を相手してる気分になってきたよ。

「アルルウ、いい子だね。怖くないよ。おいで。」

アルルウはゆつくりとハクオロの手に小さな手を伸ばす

「いい子だね、アル」

その時、ハクオロはアルルウの背後に大きな蛇がいてしかも近づいてくるのに気付いた。

「くるな!」

「っ。」

蛇に言ったのだが怒鳴られたと勘違いしたアルルウは驚くべき早さでさらに上へと登った。

「あ、違…ってそっちは枝が細」

「枝が細くなつてて危ない。」と言おうとしたのだがそれより先にアルルウの乗っていた枝が折れてしまった

「っ」

「！！！！？」

ハクオ口は渾身の力をこめて幹を蹴りアルルウに手を伸ばし、逆さに落ちてくる襟首を掴んで抱き寄せた。しかし当然ながら足場のない二人は落ちた

「十点満点っ！！！！」

そしてハクオ口はまた渾身の力で着地した。足が痺れるが骨が折れた様子もなく、何とか軽口を叩くことにも成功した。

「アルルウ、大丈夫？」

「……ん。」

「よかったあ。もうあんなとこまで登っちゃ駄目だよ？」

「……うん。ごめんなさい」

「まあ今回は無事だしよかったけど」

「よくありませんっ！！」

あまりに大きな声に二人はびくつと背中を震わせてからゆっくり背後を見る。

「私、私心臓が止まるかと思ったんですよ」

お説教から始まったが興奮したエルルウの話は支離滅裂になりついには泣き出してしまい、二人はオロオロと困惑するばかりだった。

「エルルウ。」

「……。」

泣きやんでから帰る最中も全く返事をしてくれないエルルウにハクオ口は辛抱強く声をかけ続けている。しかしもう集落まで来ている。

「エルルウー。ちよいとエルルウさん？」

「……。」

「美人で器量良しのエルルウさん？」

「……。」

「ごめんなさい。許してくださいてかマジで反省してます。二度と  
しませんから返事してよ！」

いい加減に疲れて根気負けしたハクオロがそう叫ぶとエルルウはク  
スリと笑った。

「え。」

「もう良いですよ。でも、絶対にもうしないでくださいよ。」

「勿論さ。」

勿論、場合によってはするよ。だってアルルウを置き去りには出来  
ないからね。

「アルルウ、もう着いたからそろそろ降りなさ…あ、アルルウった  
ら…。」

アルルウはあの後疲れたと言つので背負つて家まで帰ってきたのだ  
が、ハクオロが首をひねって見るとどうやら眠っているようだ。

「どうりで静かなはずだね」

「アルルウ、起きなさい」

「いや、気持ちよさそうだし無理に起こさなくてもいいじゃん」

「すみません…もう、この子ったら…」

「おとー…さん…」

「え？」

「お父さんって…僕が？」

「アルルウ…」

「ちよつ、と待った。僕そんな年じゃ…せめて兄が良いな」

「は…ふ、ふふふ」

「ちよつ、笑わないでよ。もう良いよ。トウスクル、ただいまー。」

ハクオロは怪我人だったところか木登りをしたり飛び下りたのが嘘  
のように元気に家に飛込んだ。エルルウは少し呆れながらも微笑ん  
でいた。



## 笑顔のために働け（前書き）

原作沿いを目指してますが、沿ってないとか言われても責任は持てません



## 笑顔のために働け

「ハクオ口さーん！」

いつものように耕しているとソポクとエルルウが粉でいっぱい  
の器を持ってやってきた。

「あんたの注文通り灰に骨、貝殻、あとは渡された石ころを砕いて  
混ぜたもんを作ったよ」

「でも、こんなのどうするんですか？おばあちゃんにもらった薬鋤  
石も混じってましたけど」

「この畑に撒くんだ」

「撒く？これを？何かのまじないかい？」

「まさか。これが植物を育ちやすくするんだ。植物が育つには必要  
なものがあつて、特にチツソ、リン、カリウムは不可欠なんだ。そ  
れにマグネシウム、イオウ、マンガン、あとは」

「ああ、もう！何がなんだかわかりやしない。やっぱりまじないな  
のかい？難しいことは言わないでそーいやりいいじゃないか。とにか  
く撒けばいいんだね」

「いやまじないじゃ」

「不思議な力で荒地を森にする連中もいるみたいだし、同じような  
ものかね。行くよエルルウ」

「あ、ちょっ」

二人はさっさと撒きに行った。

まじないって…何か勘違いしてるみたいだけど…まあいいか。うん、  
いいけど…僕の話聞いて欲しかったなあ

「ん？」

「あ…」

居間に行くとアルルウとぼったり出くわした。ハクオロとアルルウの関係は森に行った以来変わった。以前のように顔を見れば逃げ出すこともなくなった。

よし、僕の胸に飛び込んでおいで！

ハクオロは笑顔で両手を広げる。アルルウはしばらくハクオロを見ていたが

「……………」

すぐに逃げられた。

こ、これは涙じゃなくて心の汗だからね！

夜、ハクオロはギシギシという物音で目が覚めた。  
扉の音？誰だろう？

「……………」

話声が…トウスクール？一体誰と話してるんだろ？

ハクオロはそつと窓から外を覗くが、誰もいない。

あれ？でも確かに…もう戻ったのかな？

ハクオロがエルルウとアルルウにトウスクール3人の寝室を覗くが、トウスクールはいなかった。

こんな夜中に外出…？まあ、自分の意思で出たみたいだし、トウスクールなら心配する年でもないか

「ふわあ」

ハクオロは欠伸をすると寢床に戻って行った。

「うむ、そしてそこに『ケスパウ』と『アママ・ウチュ』を加える  
んじゃ」

「はい」

トウスクルの言葉に真剣な面持ちで頷き作業をするエルルウ。壺から乾いた何かを摘み中央の窪んだ平たい石に置き、別の石ですり潰す。

これが薬の調合か…何が何か分からない。いやこれは決して僕がバカなんじゃなくてだね

「あ、ハクオロさ　っ！」

ハクオロに気づき顔を上げたエルルウに容赦なくトウスクールがエルルウの手を叩いた。

「よそ見をするでないよ！」

そしてギロリとハクオロを睨みつける。

「ハクオロ、邪魔をするでないよ！」

「ご、ごめん」

これだよ。この迫力だよ。僕が無意識に敬語を使った原因は

「ここからが肝心じゃ。ひとつまみ『ネコン』を加える」

「えっと、このくらい？」

またトウスクールの手がエルルウの手へと落ちる

「うっ」

「そんなに入れて、殺す気かえ！？」

「で、でも、摘んだだけでそんな細かくなんて…そりゃあこの少しで死にいたりしちゃうのは分かるけど、どうして薬サジや秤を使っちゃ駄目なの？」

「薬草は質が変わりやすいからの。日によって使う量も変わる。じやからそれを指先で判断するんじゃ。第一、そんなのんびり量っておったら間に合うものも間に合わんて」

エルルウはうつ向いて悲しそうにため息をはく。

「…やっぱり、私にはそんな、おばあちゃんみたいなことできないよ」

「ホホホ、簡単にできるわけなかるう」

「え？」

ぱつと顔をあげたエルルウにトウスクールが笑いかける

「ワシとて、できるようになるまで散々叱られたもんじゃよ」

「おばあちゃんが？」

「ああ、優しい姉様じゃったが、こん時や悪戯した時ばかりは怖くての。こつちも悪口言つたら、すりこぎ振り回して凄いい形相で追いかけてきたもんさ」

「ぷ…あははは、おばあちゃんが？」

「…そう、肩の力を抜いてな。焦らんでええ、ゆっくり少しずつ、体で感じるんじゃ」

「あ…うん！」

「うむ。では気を取り直してビシビシやるぞえ」

「……言ってることが違う」

「それはそれ、これはこれじゃ」

「う〜」

これは邪魔しないほうがいいな。さっさと行こう

ん？何か今、誰か僕のこと見てた？

視線を感じハクオロは振り向いたが誰も見当たらない。

おかしいなあ

「アンちゃん、今度はこつちに水路をつくるのかい？」

「あ、テオロ、そだよ。そうしたらこつち側だけじゃなくて向こうにも畑がつくれるからね」

「よーし、おーいてめえら！今度はこつちだってよ！」

「おー！」

みんな頑張ってるなあ。よし、僕も頑張ろう！集中集中！

最近ハクオロにも体力がつき畑仕事についていけるようになり、意気揚々と鍬を担いで駆け出した。まあ元々遊ぶことに関してはあり余る体力を発揮していたのだが、こういう仕組みか働くとなるとすぐ疲れるのがハクオロだった

「……」  
少し離れた場所からアルルウがハクオロを見ていたが、ハクオロは気づかなかった

「ふいー、疲れたあ」

「ハクオロさん、どうぞ」

エルルウがタオルを渡してくれたので汗を拭う。

「みなさんもうぞぞ」

エルルウたちタオルを配る係とソポクのご飯を配る係とに別れて昼食の用意が着々と進む。

「じゃあ昼飯にすつか」

「つてあら？アルルウは？」

「そこで遊んでるよ」

アルルウは以前の様子が嘘のように緑でうめつくされている畑の隅をほじくっている。

「ちよっ、アルルウ！悪戯しちゃ駄目でしょう」

慌ててアルルウに近寄り止めるエルルウにテオロは苦笑しながら鍬を構える

「まあまあ、モロロが育ってか気になるんだろ。ちよっと掘ってみつか」

「え」

モロロ芋を傷つけないように丁寧にテオロが土を掘ると、まだ小ぶりながらもしっかりとモロロ芋が育っていた

「へへん、どうだい。見直したか？」

「なに言っただい。ハクオロの手柄だろう」

「ング。ちよっとくらい花あ持たせてくれよ」

「あはは、でも僕は何もしてないよ。みんなが頑張ってくれたからできたんだ」

本当に、僕最初はすぐばてたし、言うだけだったのに枯れた畑を潤すための大変な労働をみんな凄く頑張ってた。だからこうやってできたんだ。なんだか…感無量だなあ

「アンちゃん！」

ハクオ口が寝ながら顔を洗っているとテオ口が急ぎやってきて肩を掴んだ

「ん…エルルウ、おはよう」

「なに寝ぼけてんでえ！俺だ俺！ちよつと着てくれよ！」

「俺？一人称変えたんだね。今日の朝ごはんは大盛りにしてね」

「起きろー！！！」

叫びながらテオ口がハクオ口の腹に渾身の拳を叩き込む

「ぐほっ…ごほ…え、テオ口？どうしたの、あれ？エルルウは？朝ごはんは？」

あれ？何で外？ていうか、お腹めちゃめちゃ痛いんだけど…？一体何が起こったんだ？

「んなの後だ！行くぞ」

「え、え？何処に？てか何で僕お腹痛いのか？」

「畑だ！」

「お腹痛いのは？」

「いいから早く！」

「う、うん」

よく分からないがハクオ口はテオ口のただ事でない様子から気を引き締めて全速力で畑に向かった。ちなみにハクオ口は足がとても早いのでテオ口は自然に置き去りになった。

「ま、待てよアンちゃん！」

「え！な…何これ！？」

ハクオ口が畑に着くとおよそ半分近くが荒らされ、無惨な姿になっていた

そんな…みんなで、あんなに頑張ったのに！

「ハクオ口、やっと着たのかい」

現れたソポクにハクオ口はぽつぽつと落ちているモロ口芋を拾い詰め寄る。

「ソポク！こ、これは何処のどいつの仕業なのさ！こんな…モロ口に噛みあとまで付けて捨てるなんて…ん？噛みあと？」

自分で言ってからハクオ口はモロ口芋を見る。生で土のついたモロ口芋にははつきりとかじったあとがある

「げ…原始人？」

「何言ってるんだい。犯人はあいつらさ」

「え…」

指さされた方を見ると畑の脇の森に続く木々の上に人ほどの大きさをした猿のような生き物がいた

「な、何あれ？」

「何ってキママウさ。森に住む食い意地の悪いヤツでね。時々森を食い荒らすから困ってるんだけど…でもまさかこんな所までくるなんてねえ」

話しているとエルルウやテオ口とみんな集まってきた

「そんな…酷い…」

「エルルウ。にテオ口、遅かったね」

「アンちゃんが早すぎるんだっつーの。って！あいつらまだいやがったのか！」

テオ口が畑の隅で固まっていたキママアをめざとく見つけて追いかけた

「ちよつとあんた！」

キママアはさつさと木に登ってしまうが直もテオ口は叫びながら拳

を振り回すが、当然効果はなく、それどころか食べかけのモロコ芋や終には自分たちでひねりだした汚物まで投げてきた

「うえっ、ペペっ……うう、ひでえ目にあっただぜ」

肩を落としてハクオロたちの元に帰ってきたテオロにソポクは鼻をつまむ

「キママアに追いつくわけないだろう。まあハクオロならどうか知らないけどさ。ちよつと、臭いから早く体を洗つといいで」

「そんな言い方あねえだろ。俺あいつらをおっぱらったんだぜ。

なあエルルウ、アルルウ」

「う……」

エルルウは後づさり、アルルウは逃走した。テオロは嘆かわしいとばかりにため息をついて今度はハクオロを見る

「つたく、女共は冷たいぜ。なあアンちゃん」

「いや、臭いものは臭いから」

ハクオロにも突き放されテオロはトボトボと体を洗いに行った

「……」

「エルルウ？」

テオロが行っても元気のないエルルウにハクオロが声をかけると、誰に言うでもなくエルルウは口を開く

「酷い……みんなが、せつかくみんなが頑張ったのに……。あと、もうちよつとだったのに……」

「エルルウ……」

ソポクがエルルウを抱きしめ、ハクオロも何とか元気づけようと努めて明るい声を出す

「大丈夫だよ！ほら、まだ半分は無事だし。みんなの頑張りは無駄なんかじゃない。まだこれからだよ」

「ハクオロの言う通りさ。エルルウ、まだ終わってないよ。辺境の女はね、絶対に諦めちゃいけないの。諦めたらそこで終わりだから」  
「……はい！」

ああ、よかった泣かなくて。僕が泣くならいいけど、泣かれるのは



嫌だ。楽しいならいいけど、やっぱりみんな笑わないとね

だって、涙は悲しい。喜びの涙とは違う。悲しみの涙は、辛すぎる。もう…誰も泣かしたくない

「そうそう、もつと笑ってよエルルウ。困った顔より怒った顔より、笑ってる方が可愛いよ」

「え…ええ!？」

顔を真っ赤にするエルルウにソポクは嬉しそうに豪快に笑った

「あはは!言うじゃないかハクオロ、こりやうちの宿六と一緒にしちゃ悪かったね」

「え…まあ、僕老け顔じゃないしね」

「いやあ…そう言う意味じゃないけど…。とにかくエルルウ、気を落とすんじゃないよ」

ソポクは呆れた顔をしてからすぐに気を取り直してエルルウの肩を軽く叩く

「うん、ありがとうございます二人共」

「ってあれ?誰も、って…僕はいつたい誰を泣かしたんだろう?この間のエルルウのは違うし。でも誰か、遠い昔に、とても大切な誰かを泣かしてしまった気がする」

ハクオロは少し考えたが、やはり何も思い出せなかった

まあ、そのうち思い出すでしょ。それより、エルルウたちを安心させないとね

半分もやられたんだ。次にやられたら、本当に終わりだ

## キママウ退治、そして報酬（前書き）

戦闘シーンは筆者の文才があまりにないので割愛しています。  
文句は心中にしまっておいてください。

## キママウ退治、そして報酬

「柵を作ったらどうだ？」

「身軽なあいつらの入れないような柵なんてできるかあ？」

夜、村の人間が集まってキママウについて話し合うことになった。拳手をして出された意見だが、テオロが首を横に振って却下した。

「じゃあ、罨はどう？」

「一匹二匹捕まえたって意味ねえぜ」

「それに子供がかかったら？ やっぱり、交代で見張るしか…」

「でもあいつらはずる賢い…俺らの隙をついてくるだろうな」

「やっぱ一網打尽にするしかねえか」

「どうやって？」

「そ、それはだなあ……そ、そうだ！ アンちゃん！」

「ん？」

「頼むぜアンちゃん。びしっとちゃんとしたの考えてくれ」

「ああ、そうだねえ。ハクオロなら適任だね」

「え…ええ！？ でも僕…よ、よそ者じゃん？」

「なあに言っでんてい。もう十分アンちゃんはこの村の住人だつての」

「そうそう」

「ハクオロは普段子供っぽいくせに俺よりずっと賢いし足も早いから、いざと言うとき頼りになるよな」

足の早さ関係なさすぎ！

「そうだね。ねえみんな、ハクオロが考える案ならいいんじゃない？」

何故か満場一致で決まりそうな雰囲気慌ててハクオロは立ち上がり抗議する

「待ったあ！ みんな考えるの面倒だからって人に押し付けようとしてるでしょ！」

「ま…まあまあ、アンちゃんだから安心して任せられんだよ。なあみんな？」

頷く一同にハクオロは唸る

このままじゃなくすした。別に構わないし信頼されるのは嬉しいけど…なんかズルイ！

「ったく、男がぐずぐず言うんじゃないよ。ほらエルルウ、アルルウ、言っておあげ」

ソポクがため息をつきながら二人を促す

「えっと、頑張ってください」

「…ばれ」

「ほら、女にここまで言われてツツパねる気かい？」

どこまで！？…まあ、良いけどさ。どうせ誰かがやるんだから、僕がやってもいいよね

「分かったよ分かった。じゃあこついうのは？」

とりあえずハクオロはみんなが話している間に考えておいた単純だが確実に効果が期待できそうな案を発表した。

「なんだ。ちゃんと考えてたんじゃないか。出し惜しみするんじゃないよ。みんなー、今の聞いたかい？」

「おうよ」

「反対意見はあるかい？」

「いいんじゃないね」

「うん。賛成」

さつそく明日から準備をするということでもみんな帰って言った

はあ、まあ頑張ろう。別に正義の味方や賢者を語るわけじゃないけど、みんなが笑顔でいられるようにさ

ハクオロが考えた案はこうだ

まず二班に別れる。片方は『追い込み班』。もう片方はハクオロた

ちの『始末班』だ

まず追い込み班が隠れてキママウを待ち伏せ、現れた所で大声をあげながら鐘をならし、包囲していく。こちらの班に殆どの村人を使っている。

包囲の時点でわざと一ヶ所だけ人の手薄な場所をつくっておく。そうすれば、包囲網を縮めればキママウは間違いなくそこから逃げる。しかし逃げるとそこには幾重にも仕掛けられた罠が待っている。という寸法だ

しかしさらにその罠を抜けてくるのもでるだろう。それを始末するのが始末班だ。撃退班は人数が少ないが大丈夫だろう  
ただ問題は

「今日で三日目か…なかなか来ねえなあ」

キママウが現れるまで、待ち惚けだ

「もうすぐだつて…多分」

「ところでアンちゃん、得物はどうした？」

「あ、それならトウスクルがこれを…」

ハクオ口は腰にさしていた50センチ強の扇子を出す

「あ？そりや扇子じゃねえか。じゃなくて武器だよ武器」

「いや、結構エグいよ」

テオ口に渡すと顔色を変えた

「重い…鉄製か」

「それにこうすると…」

テオ口から返してもらった扇子をハクオ口は実践して見せた。ハクオ口が扇子を振るうと扇子が一瞬牙を剥いた

「う…仕込みかよ。しかし何だつて村長がそんなもんを…」

「さあ？テオ口の方が詳しいんじゃない？」

「あの人は謎が多くてなあ」

「ふうん」

あとこれは言っていないけど、この鉄扇子、仕込み刃部分に溝があつて液体が流し込めるようになってる。刃に流す液体と言えば……そ

れに、ご丁寧に黒ずんだ染みまであるし、やっぱり今までにも…

「ハクオロさん！」

「あ、エルルウ」

エルルウが荷物を抱えて来たのでハクオロは扇子を腰にさした

「差し入れです」

「ありがとうございます」

「あと、これは姉さんからテオロさんに」

エルルウはテオロに紐にぶら下がった徳利を渡す

「気がきいてるなあ……ん？」

ご機嫌でテオロは徳利の中を飲むがすぐに眉を寄せた

「ただの茶じゃねえか」

「あは。もしそう言ったら、『何だと思ったのこの宿六。こんな時くらい真面目に仕事しろ』って伝言です」

「あははは」

「ング。笑ってるのも今のうちだぜ。アンちゃんもそのうち味わう。あれでも昔は、エルルウみたいに純朴な女の子だったんだがなあ。それがあんな肝っ玉カアちゃんに…。どうも辺境の女は年くう度に肝っ玉が太くならあ。エルルウもあと数年したらいてっ！何しやがるエルルウ！」

エルルウに殴られ反射的に睨むテオロだが

「むっ！」

とエルルウに睨まれすぐに目をそらした

「だ…ダハハハ…」

カンカンカンッ！鐘の音がなり響く

「！ 合図だ！」

罨が作動する音に獣の断末魔の叫びが段々とハクオロたちに近づいてくる

「エルルウ、下がってて」

「は、はい」

ハクオロもテオロも武器を構える。一匹、二匹とキママウが現れる

「アンちゃん、ちよいと多くねえか！」

くそ！罨が甘かったか！

「テオロ、手負いだからって気をぬくなよ！何をするか分からないからな！」

「おう！」

「くっ」

襲いかかる爪を弾き畳んだ鉄扇を叩きつける

「ぎゃう！…っ、フーツ！」

「しっけえな！」

「テオロ！こいつら弱いんじゃないの！？」

「んなこと言つてねえ！そもそもこいつらすぐ逃げるから戦ったことなんかねえ！」

なににいー！？しまったあ！もっと人を回せばよかったー！

「あ、あの！私も手伝います！手当てならできます！」

嫌だ！危ない目にはあわせたくない！だけど…

ハクオロは苦戦しながら同じく苦戦しているテオロと視線を一瞬合わせた

「っ……絶対に僕らから離れないでよ！」

「はいっ！」

「はあ…終わったあ」

「ぜえっ…何とか、なつたな」

危なかった…エルルウがいなかったら止血もできないし…危なかったかも…

「あ、あの…ごめんなさい！その、出しゃばったことして…」

頭を下げるエルルウにハクオロは困って頭をかく

「いや…その助かったよ。ありがとう」

「え…あ」

自然とハクオロの手は自分とそう変わらない位置のエルルウの頭を撫でていた

「でも、危ないから、もうしないで」

「……………は、はい」

「にしても戦ってる時のアンちゃんは迫力あったなあ」

「そう？」

「ああ、畑の指示とは違ってこう…勢いがあるし、自然と気がしまるというか…年下と思えねえ迫力だったぜ」

「あ、ありがとう。でも偉そうだったよねごめん」

「なあに、アンちゃんは指揮者なんだ。それくらいがいいさ」

テオロはそう言っただけのもの気さくな笑みを浮かべ、ハクオロの頭を乱暴に混ぜた。しばらく3人で頭を撫であうという不思議な時間になっていた

「ホラ見てください！モロロがこんなに！」

エルルウがはしゃいでそう言う。みんなが予想以上の収穫量に笑っていた

キママウの時はどうなるかと思ったけど、これでみんな飢えることはなくなるね

「ダハハハ。やったなアンちゃん！本当に…やっちゃったな。カアちゃん、後は頼んだぜ」

「あいよ。さあみんな！始めるよ！」

「はい！」

作業が男から女に変わるが一人分らないハクオロがエルルウに尋ねる



「あ、これからモロ口を焼くんです」

「焼く？へえ、穫れたてだから美味しいんだろっねえ」

「え？」

「ん？」

「…ふふ。違いますよ。食べるんじゃないくて、保存です。モロ口は軽く火で焙るととっても日持ちするんです。だから倉にいれる前に一度焼くんですよ」

「へえ」

「でも穫れたてはやっぱり美味しいですよ。アルルウ、今日はこれを使おっか？」

「きゃっほう」

分かりやすく喜ぶアルルウにエルルウは微笑む

「楽しみにしてくださいね、行こうアルルウ」

「ん」

頷き、しかしアルルウはハクオ口の顔を見上げる

「？ アルルウ？」

「……」

アルルウは無言で、しかししっかりと微笑んだ

…これが一番の報酬、かな？

キママウ退治、そして報酬（後書き）

こんな感じでいこうと思います。

それでよければこれからもお付き合いください。

## おにちゃん(前書き)

前書きが面倒になってきました

「うたわれるもの」の二次創作です

苦情は受け付けてませんが純粋な評価なら大歓迎です

## おにちゃん

「さて…今日も頑張る…ん？」

何処からか激しい足音が聞こえ、音の方を見ると二足歩行の大きな爬虫類が現れ、乗っていた男がおりてきた。ハクオロと年はそう変わらないだろう

「おいてめえ、そのへんな仮面つけたてめえだ」

「…僕？」

「見かけねえ顔だな。誰だ？」

「君こそ誰さ？」

「なに？俺様を知らねえだと？仕方ねえ、本当は俺様が名乗るなんて有り得ねえが俺様は寛大だ。俺様は又ワングィ！この国の皇の弟でここを統治する藩主の息子だ！！」

「…はあ」

「恐怖のあまり声もでねえか」

いや、むしろよくそこまで堂々と虎の威をかる狐をできるなあと感じてたよ

「ハクオロさーん、あ…又ワングィ…」

エルルウは又ワングィに気づくと何処か表情を硬くした

「ようエルルウ」

「…いつ、来たの？」

「今だ。お前に早く会いたくて飛ばして来たんだ」

又ワングィが笑って隣の爬虫類を叩きながら言うとうエルルウはほっとしたように微笑んだ

「ふふ、じゃあそのウマ（ウォプタル）、又ワングィの？」

「おう。気性が荒くて俺様にしか乗りこなせねえんだぜ」

言いながらぺしぺしウマを叩いているとうマはガプリと又ワングィの手を噛んだ

「いぎーっ！」

「だ、大丈夫、又ワング？」

「へ、へへ…じゃれてんだよ。可愛いやつだぜ」

口から出てきた真っ赤な手で軽口を叩く又ワングに、エルルウはくすくす笑う

なんか…そんな悪い人じゃないのかなあ？でも最初のエルルウの態度が気になるし…

「又ワング、今日は何しにきたの？」

「この前言ったろ？次はお前を迎えくるってな」

「え…本気だったの？」

「当たり前だ。ほら、行こうぜ。俺様は次期皇になる男だ。こんなしけた村じゃ考えられないくらい贅沢させてやるぜ」

「…私、いけないよ」

「は？な、何でだよ！」

「……」

エルルウは助けを求めてかハクオロに視線を送るが、又ワングは何を勘違いしたか眉根に厳しく皺をよせる

「何でそいつを見るんだよ！だいたいなんだよこの怪しいのは！何するか分かんねえぜ。早く追い出せ！」

「又ワング！そんなこと言わないで！一緒に住んで、いい人だって分かってるんだから！」

「は？…一緒に、住んでるだあ！？なっ、もうやつちまったのか！？やつちまったのかあ！！？」

肩を掴んで叫ぶ又ワングにエルルウは真っ赤な顔で尻尾をさかだてる

「なっ…へ、変なこと言わないで又ワング！ただハクオロさんは、患者さんというか…」

「そ、そうだよな。へへ。よし、じゃあエルルウ、行こうぜ」

機嫌よくエルルウの手を引く又ワングだがエルルウは浮かない顔と言つか明らかに嫌がっている

「又ワング、やめなよ。エルルウが嫌がってるのが分からないかな？」

「はあ？俺様はエルルウのためを思ってたな…」

「じゃあ尚更！…エルルウにそんな顔をさせるな。友達なら嫌がることするなよ」

「っ…うるせえ！エルルウは俺様の女だ！テメエはエルルウの何なんだ！」

「恩人であり家族だよ。だから君がいくら恋人でも、エルルウが嫌がるなら行かせるわけには行かない」

「ち、違います！恋人じゃありません！ただの幼なじみです！」

「おさ…っ！？テメエが…テメエがエルルウをたぶらかしたんだな！だからエルルウが…っこのオ…！」

又ワングはハクオ口の顔面に向けて思いきり拳を放った  
ガン…！

鈍い音がしてハクオ口の視界は一瞬暗くなる

ん？何か鈍い衝撃が…あつた？えっと…痛くはないけど、殴られたのかな？

又ワングは手を押さえてゴロゴロと地面を転がっていた

「テメエ…堅いなら堅いつて言えよ！」

「又ワング大丈夫？」

「へ…このくらい、何でもねえ、ぜ」

「でも…かつてない方向に腕が…」

又ワングの顔は真っ青で利腕はぶらぶらと力無く揺れている

「騒がしいね。おや又ワングかえ。ずいぶん久しぶりじゃな。お前がここを出ていつて以来かい」

トウスクールが現れると腕の怪我でさえ虚勢をはっていた又ワングが怯んだ

「っ…」

「え？ちよつと前まで週に一度は…おばあちゃんには会わなかったの？」

「エルルウ！」

余計なことを言つなとばかりに怒鳴る又ワングだがトウスクールに睨

まれ、まるで蛇に睨まれた蛙だ

「じゃあ何か？一度も顔を見せんとはどういつ了見かえ？」

「だ、黙れババア！」

「……本気で言ったのかい？」

「ヒッ！いや…いまのは…」

「毎日病弱なあの子に変わり世話をしたワシが…ヴァ・ヴァ・ア？」

「きゅ、急用を思い出した！じゃあな！あ、テメエ！エルルウは俺様の女だ！手を出すなよ！」

又ワングはウマに乗るがウマは草を食べて動こうとしない。又ワングはイライラとウマを殴る

「この！走れ！」

怒ったのかウマは又ワングを振り落とし、地面のソレを踏んで主人の命令通りに走って行った

「ま、待てよ！」

又ワングは立ち上がるとウマを走って追い掛けた

「……あ…」

「又ワングとエルルウは兄妹みたいに育っていたからの。複雑なんじゃよ」

「幼なじみなんだっけ？」

「元服ホボロを迎える前に跡取りが居なくなつたと連れて行かれてね」

元服と言えば部族によって異なるけど11〜17でする成人の儀式か。……僕ギリギリか。てゆうかエルルウって何歳？

エルルウの態度から偉そうだけど嫌なやつじゃなかったんだろうけど、ずいぶん贅沢や権力にこだわってるみたいだ

二人の悲しそうな表情にハクオロは昔はそうじゃなかったのかと去って行った彼に思いをはせた

「アルルウ！待ちなさい！」

どたばたと言う足音にハクオロが居間に顔を出すとアルルウとぶつかりそうになり互いに止まる

「っと…アルルウ」

「んっ…」

「捕まえた。アルルウ！大人しくしてなさい！」

エルルウは嫌がるアルルウを捕まえると顔や手に何か薬のようなものを塗りたくる

「エルルウ？」

「あ、は、ハクオロさん！？いつからそこに…ってアルルウ！」

エルルウがハクオロに気をとられた隙にアルルウは外へと逃げてしまった。

「ああもう！」

「アルルウがどうかしたの？」

「あ…あの子、また一人でハチの巣をとってきたんです。危ないから駄目って言うてるのに。はちみつが大好きで言うこと聞かないし、薬を塗るのも嫌がるし困ってたんです」

「そうなんだ。アルルウがねえ…それにしてもエルルウってさ」

「はい？」

「結構お転婆だよね」

「……うっ…」

ハクオロが外に出ると探していたわけでもないがアルルウが視界にはいった

「たーたたたらら、たららーらー、たらー、きやつほう」

尻尾をぶんぶん振りながらアルルウは木陰に座る。ハクオロがゆっくり近寄り背後から覗くと、アルルウは嬉しそうに半透明の液体がたっぷり染みこんだ土色の塊　大きなハチの巣を籠から取り出していた



うわあ。凄い大きさ。これはハチの数も凄いんだろうな。エルルウも心配するはずだよ

「アルルウ」

「!？」

アルルウはびくりと振り向き、エルルウでなくハクオ口だと分かってても警戒心バリバリだった

「あゝ、アルルウ、凄く大きなハチの巣だね。どうやってとったの？」

「……」

沈黙が苦しい…

しばらく見つめあっていたが、やがてアルルウは口を開いた

「…フクロを被るの。巣に近づいてケムリでいぶして、とるの」  
答えてくれた!?

「そ、うなんだ。でも刺されちゃうでしょ？」

アルルウはコクリと頷く

「それでも頑張るなんて…アルルウは本当にはちみつが好きなんだね」

「ん」

アルルウは頷くと同時にさっきまで今にも逃げそうな張りつめていた気配をけした。

そしてアルルウは蜜のしたたるハチの巣をちぎりハクオ口に突きつけた

「え？くれるの？」

「ん」

「ありがとう」

受け取って見るとうにやうにゆと幼虫がうごめいている

う…これってもしかして…まるかじりですか？

アルルウはじーっとハクオ口を見つめている

「いただきます」

ハクオ口は覚悟を決めてかぶりついた

「ん！…美味しい」

濃厚で複雑な甘酸っぱさ、もう一口食べたくなる癖になる味だ

「ん！」

アルルウはにつこり笑って食べ始める。ハクオ口は隣に座ってまたはちの巣を口に運ぶ

「おひひーへ（美味しいね）」

アルルウはモゴモゴと口を動かしながら言い、ハクオ口もにつこり笑って同意する

「うん。アルルウが好きなのも分かる。ってか、僕も好きになっちゃった」

「うん」

ああ…まさかアルルウとこんな穏やかな時を過ごせるとは…それに始めてアルルウとまともに会話したよ

「アルルウ、もうこんなところに…あれ？いつの間にハクオさんと仲良くなったの？」

エルルウが来て尋ねるとアルルウは食べながら答える

「はっひ（さつき）」

「そう。良かったね」

「ん」

エルルウはアルルウに笑いかけてからハクオ口に耳打ちする

「ありがとうございます。あの子、本当は仲良くしたがつてたんです。でもそういうのに臆病だから。ふふ…アルルウ、美味しそうね」

私にも一口頂戴」

「イヤ」

「…そ、そんなこと言わないで、ね？」

「イヤ」

アルルウは非情な狩人だった

「……」

「アルルウ、いっぱいあるんだし、ちょっとくらい良いんじゃない？」

「ん。はい、お姉ちゃん」

「え…？」

渡され受け取りながらもエルルウはポカンとアルルウとハクオ口を順番に見る

「なんで、ハクオさんが言つとくれるの？」

「んゝ、なんでも」

「……うう……」

「あははは……」

多分、怒られてばかりだからじゃないかな？ 勿論エルルウがアルルウのこと考えてるのは分かるし、本当は二人は凄いい仲良しなんだけどね

「アルルウ？」

「っ……」

ハクオ口が声をかけるがアルルウは動かない。ハクオ口が部屋で今後の畑に関する計画などについて書き物をしていると、アルルウが無言で部屋にきて隠れたのだ

素早い動きだったが、侵入したのは明らかで、犯人も明らかだ。アルルウは棚に隠れてるつもりなのだが尻尾が見えている

「アルルウ、どうしたの？ 出ておいでよ」

アルルウは姿を見せると小さく何かを口にする

「……と……さん……」

「え？ 何？ よく聞こえないよ」

「……おと……さん」

おとさん？ ……あ！ 「お父さん」？ そうか…

「アルルウ、僕はハクオ口だけど、君のお父さんじゃない」

「っ」

泣きそうに顔を歪めるアルルウにハクオ口は座ったまま動かず、極

めて優しく言葉を続ける

「でも、家族にはなれる。父親は無理かも知れない。でも、兄ならなれる。アルルウが寂しいなら抱きしめる。怖いことがあるなら守る。父親にはなれないけど、アルルウが望むなら傍にいるよ」

「あ、に…?」

「うん」

「おにく、ちゃん?」

「うん。アルルウがそう望むなら、僕はアルルウの兄だ。まあ呼びたいなら『お父さん』でもいいけど、でも僕はやっぱり父親には…」

「違う。おとくさんじゃない」

「うん。違うね」

「でも、おにくちゃん?」

「うん」

につこり微笑むと、アルルウはだつとハクオ口の胸に抱きついた

「おにくちゃん!おにくちゃんおにくちゃんおにくちゃん!」

「なに?アルルウ」

「おにくちゃん!」

抱きとめて柔らかい髪の毛を撫でてあげるとハクオ口を抱きしめる力を強くしてアルルウは嬉しそうに頬をほんのり赤くして微笑む

「おにいちゃん…」

「ハクオ口さん、アルルウ何処に行つ…ってアルルウ!何してるの!?」

「おにくちゃん」

「お兄ちゃん?」

「まあ、そういうこと。父親は無理だけどさ」

「んふふ。おにいちゃん、いい匂い…」

「あ…そう、ですか。でもアルルウ、ハクオ口さんの迷惑になるから、離れなさい!」

エルルウはアルルウの肩を掴んでハクオ口からはがそうとするが、アルルウはぎゅっとより強くハクオ口に抱きつく

「ヤッ」

「離れなさ〜い〜!」

「まあまあ。いいじゃん」

「でも…」

「それに、兄ならこういう時は抱きしめてあげるんじゃないかな、  
って思うから」

「…もう、知りません!」

エルルウは怒りながらそう言つと部屋から出ていった

「…なんで怒つたんだ?」

「ん〜?」

「何でもない。アルルウはいい子だね」

「おに〜ちゃ〜ん…」

パタパタと揺れる尻尾が床を叩く音だけが、穏やかな時を刻んでいた

## 約束

夜、またしても物音で目が覚めた。外からはトウスクルの話声

「……」

夜中に迷惑だなあ。何を考えてるんだか

そして気配は消えた

まあこの前も帰ってきたし寝よ寝よ

「……いてください」

「……ん？エルルウ？」

ハクオロが寝ながら起きるとエルルウが泣いていた

「つく……つくう」

「泣いてるの？」

「おばあちゃんが……黒ずくめの格好した人たちに……連れていかれちゃったんです……追い掛けたんですけど、すぐ見えなくなっ」

「大丈夫大丈夫、この前も同じことあつて出ていったから。じゃあアルルウ、いい子にしてるんだよ。僕は山へ芝狩りに行くから」

しかしハクオロはめっちゃめっちゃ寝起きが悪いというかむしろ神がかっているの、目を開けてエルルウが泣いてると認識したのが寝ている頭なら、すっかり会話をしながら寝ていた

「起きてください！」

ハクオロが立ち上がり枕を抱えて外に行こうとするのでエルルウは足を掴んだ。ハクオロはボタンと顔から床に倒れた

「いつて……つ。痛た……いったい何が……あれ？エルルウ？どうして？

あれ？夜？」

おかしいな。アルルウにいつてきますしたはずなのに。夢か。ってアルルウ泣いてる！？

「ひつく…おばあちゃんが…連れていかれちゃったんです…」

「トウスクール？あ、大丈夫だよ。前にも同じことが…」

「さっきも聞きましたけど…でも、おばあちゃんが私たちに黙って行っちゃうなんて変ですう」

誰から聞いたんだろ？まあいいや。にしてもトウスクール、もっとうまく出ていってよね

「分かったよエルルウ。僕がウマで追い掛けるから、だから泣かないで」

「…ハクオ口さん…」

「ハアッ！」

確か気配はこつちで消えたけど、ずいぶん奥に来ちゃったなあ。もう追いついてもいいはずなんだけど

何か糸を引っ張ったような音がした気がしてん？とハクオ口が振り向くと人が襲いかかってきていた。ウマから飛び下りたが、その人影はハクオ口の背後から喉元に刃をつきつけた

「うっ…」

「動けばこのまま首は飛ぶぞ。何故俺たちの後を尾けてきた」

尾ける？トウスクールさんを連れてった人？でも何で刃を？そうしなければならぬ理由…まさか！？……まずいな。とにかく突破だ！ハクオ口はあらん限りの力で男の腕を握り、地面を蹴り男の鼻に頭をぶつけるようにして背後の木に叩きつけようとした

「な！？」

しかし男は身軽な動きで軽々とハクオ口の頭の上を通り、同時に刃がハクオ口を襲う

「っ」

慌てて腕を離れたが、あと少し遅ければ確実にハクオ口の手首は切り落とされていただろう

「ちっ」

男はハクオ口の正面に着地。しかし外套の留め金が先ほどの衝撃で弾け、男の姿が露になる

「見たな…」

現れたのは痩せすぎな、無駄のない絞られた体の鋭い目つきの若い男だった。その目はまるで抜身のようにギラギラしていた

「投降しろ。さもなければ…」

ギリギリとさつきも聞いた音がして見れば、二人ほど弓兵がいた

「死んでもらう」

「コラッ！」

トウスクールが現れた途端、男は目に見えて落ち着きを無くした。

「人様の命を奪うとは何事じゃ！」

「いや…これはその、脅しです。本気じゃありません」

さつきまでの剣幕が嘘のようにトウスクールにペコペコしだす男にハクオ口は呆気にとられてしまう

「…本当かえ？」

「はい！」

「まあよい。すまんかったねお前さ…おや、ハクオ口じゃないか。どうしたんだい？」

「それはこっちのセリフだよ」

ハクオ口はため息をついた

「そうか…エルルウがのう」

「で？トウスクールは？」

「診察じゃ。夜なのは…まあ色々事情があつてのう」

「はあ」

まあやつぱりというか危険はないみたいだし、帰ろう

「さて、ワシはこの者たちと行かねばならん。…そうじゃなお前さ



んも来るがええ」

「は？」

「なっ！そんな素性の知れない男を連れて行くなんて」

「この男は家族も同然。それを疑うのかえ？」

「く…分かりました。トウスクール様がそいうなら……オボロだ。あんたは？名前くらいあるだろう？」

渋々頷いたオボロはハクオロをジロジロ見ながらそう言った

「ハクオロだよ」

ていうか行くなんて一言も言っていないんですけど…まあいいか

「お前巫山戯てるのか？」

「巫山戯とりやせんよ。それよりさっさとせんか。夜が明けちゃうよ」

「は、はい！グレア」

「はい。失礼します」

呼ばれたさつき弓を構えていた少年の一人がハクオロに目隠しをした  
「少しの間の辛抱です。足元に気をつけてください」

連れられるままハクオロは歩か続けた。時間感覚すら麻痺するほど歩かされると気配が変わった

「開門！」

オボロの叫びと共に大げさな音が聞こえ、建物に入ったのを感覚で  
しる

「トウスクール様の知り合いでもここからは通すわけにいかない。待  
つてろ」

「って目隠しのまま？」

「何をしとる。早くせえ」

「はい」

「ハクオロ、お前さんもじゃ」

「しかし」

「この男はワシの家族と言ったじゃろ。ワシを怒らす気かえ？」  
「い、いえ」

「だいたいお前は過保護すぎる。このままあの子を籠の中へ閉じ込めておく気かえ？」

「籠って…俺は別に…」

「じゃったら早くせんか。安心せい。この男は妙な面はしとるが害はない」

「…わ、分かりました」

ドアが開く音がして、女の子の声が聞こえたと思うとハクオロの目隠しははずされた

「ユズハ、起きてたのか」

「はい、お兄様。今日はとっても気分がいいから…」

妹？とつても可愛いけど…なんていうか儚い、散りそうな花を見てる気分だ

「あ、トウスクール様、来てくださっただんですね。…後ろの方は？トウスクール様の温かな薬草の香りとは違う…大きな、とっても大きな土のような香り…」

ベッドに寝たまま焦点が合わない様子の少女にトウスクールは笑いながらハクオロに目配せをする

もしかして、目が？

「あ、僕のことかな？」

少女はハクオロの存在を確認すると起き上がろうとするが、オボロが制する

「やっとな熱が引いたんだ。大人しくしているんだ」

「はい…お客様、こんな姿で…ごめんなさい。私…ユズハと言います。どうか、よろしく願います…」

「僕はハクオロ。トウスクールの居候だよ。こちらこそよろしく」

「はい…」

「どれ」

トウスクールはユズハの額や胸に手を置きながら目を閉じ、息を潜めた  
「ふむ…少し火神<sup>ヒムガミ</sup>がむずかっとなるようじゃか。うむ、中々ええ調子じゃな。このまま安定すれば、じきに良くなるじゃろうて」

「本当ですか!？」

「うむ」

「っ…良かったな!ユズハ!」

「はい」

「さて、ワシはオボロに話があるから席を外す。ハクオロ、ユズハの相手をしててくれ」

「あ、うん」

「なっ!ちよつとトウスクール様!？」

「なに、待ってる間退屈じゃろうしせつかくじゃからな」

「冗談じゃない!なん」

「つべこべ言わんと来いや!」

トウスクールは無理矢理オボロの耳を引つ張って出ていった

「いつ…いたた!ちよつ、トウスクール様っ、あいてて!」

ドアがしまつてからハクオロはさて、とベッド脇の椅子に座る  
オボロは騒がしいなあ。兄妹っても似なさすぎ

「あ、座ったけどいい?」

「はい。あの、ハクオロ様、ハクオロ様のこと、教えてくれませんか?」

「僕のこと?良いけど…実は昔の記憶がないからあんまり話すことがないんだ」

「記憶が…?」

「うん。大怪我をしてトウスクールに助けられたらしいんだけど、氣付いたら何も思い出せなかったんだ」

「ごめんなさい…私…」

「気にしないでいいよ。僕は気にしてないから。それよりユズハ…様?」

「ユズハのことは…どうかユズハとお呼びください」

「そう?良かった。様づけとかしたことないし。ユズハはさ、何の病氣?」

「病氣…よく、分からないです。ずっとこうだったから…」

「ずっとって……ごめん」

くそ、トウスクールがすぐ良くなるなんて言うから

「どうして、謝るんですか？…気にしてませんから」

そして突然笑いだすユズハにハクオ口は、ん？と首を傾げる

「ユズハ？」

「ふふ、何だか謝りあつて…おかしい。くすくすくす…」

「あは…そっぴやそっぴだね」

それからハクオ口は村での色々なことを話した。ユズハは時折笑みを溢しながら楽しそうに耳を傾ける

そして話に一段落がつくと、奇妙な沈黙が訪れた

「あの…」

「え！…な、なに？」

「不躰なこと、お願いしてもいいですか？」

「ん？」

「お顔を…触ってもいいですか？」

「別にいいよ」

それって不躰かなあ？

ユズハは微笑むとゆっくり起き上がった

「大丈夫？」

「はい」

ユズハが恐る恐る手を伸ばし、戸惑っていたようだが、やがて何かに納得したようにハクオ口の顔に触れてきた

あ、そっか。目が見えないから代わりに触って確認するのか

その時、ドアが開きオボ口たちがやってきた

「む、何をしてる。横になるんだ。あまり兄を心配させないでくれ」

「あ…はい」

「あんたもあんただ。ユズハに何をするつもりだった」

「構わんよ。気分がええなら少しくらい動いたほうがええ」

「ぐ…第一、何をしていた」

「ユズハがハクオ口の顔を触った位で大の男が騒ぐんじゃない」

「ぐっ……」

本当にオボ口ってトウスクールに弱いなあ

「さて、そろそろおいとましようかの」

「もう……帰られるのですか？」

「また今度、くるからの」

「はい……あの、ハクオ口様、また……来てくれますか？」

「勿論。またねユズハ」

「……おまじないしても、いいですか？」

ユズハは自分の髪を一本抜くと、ぎこちない手つきでハクオ口の小指に巻き付けた

「ハクオ口様も……」

「うん」

よく分らないハクオ口だが言われた通りに髪を抜いてユズハの小指に巻き付けた

「再会できるおまじないです」

「またくるよ。大丈夫、僕は可愛い子との約束は守る人だから」

アルルウと過ごすうちに癖になったのかつい頭を撫でると、ユズハはくすぐったそうに目を細めて微笑んだ

「やれやれ、なんとか夜明けまでに帰ってこれたの。……ハクオ口？さっきのを気にしてるのかい？」

家の前で問われ、ハクオ口は先ほどの会話を思い出す

回想

「それではトウスクール様」

「うむ」

「オボ口、またね」

「！ あんたはもう来るな。だいたいユズハも俺も勝手に呼び捨てにするな！」

「何で？ ユズハは良いって言ってたよ？」

「いいから来るなと言ったら来るな！」

回想終わり

「僕、なんかした？」

「あれも一種の病気じゃから気にせんでええ。それより急いで戻らんと」

「おばあちゃん！ こんな時間に何処に行ってたの！」

忘れてた…エルルウに伝えるの、完璧に忘れてた…

エルルウに詰問されながらも家に入る

「診察さ。ある体の弱い方がいてね、この時間がその方には一番都合が良いのさ。分かってもらえたかい？」

落ち着いたエルルウは頷く

「うん…でも、もう黙って行かないでね。本当に…心配したんだから…」

「ああ、約束するよ」

「ん…どうしたの？」

奥からアルルウが眠たい目を擦りながら起きてきた

「何でもないんじゃないよ。ほれ、寝ようかね」

トウスクールはアルルウの背を押して奥へ消える。エルルウはまだ涙目でハクオロに頭を下げた

「あの、ハクオロさん。色々と…ごめんなさい」

「いやいや、エルルウが泣かないようにするためなら何てことないよ」

ていうか結局今まで心配させっぱなしだったし

「あ…あの、お茶でも飲みますか？」

「うん？ ああ、お願い」

「はい！」

ハクオ口は座っておまじないをした小指を見る  
おまじない、ね。可愛い話だ

「どうぞ、お茶 え？その小指…髪の毛？」

「ん？ああ、再会できるおまじないだつてさ。知ってるの？」

「え…あ…もしかして、あの方つて…女の子？」

「何で分かるの？エルルウと同じくらいの可愛い子だったよ」

「……」

「エルルウ、早くお茶を……」

「……」

「エルルウ？」

「ハクオ口さんも、その子の指に？」

「うん。それよりお茶……」

エルルウはがっつと湯飲みを掴むと一気に飲みほした。とても怒った  
表情で尻尾をさかだてて

「お休みなさい！」

エルルウはそう言うたとさつさと奥に行ってしまった

「……？」

その様子を見ていたトウスクールはやれやれと呟いた

## 働くことにサボること

「ハクオロさん！」

ハクオロが腹ごなしに木陰で眠っているとエルルウがやって来て肩を揺すった

「え？何？テオロ、またお酒飲んでの？背え縮んだね」

普段の朝なら無意識にハクオロが起きて寝ながらご飯を食べてから外に出て畑に着く間に自然に目が覚めるまで放っておいてくれるのだが、昼寝の時などはすでに慣れたもので容赦なく暴力を振るうようになっていた

「起きなさい！！」

「ぶっ！！…あ、れ？エルルウ？何かお腹痛いけど知ら」

「知りません！それより凄い人が！」

まあハクオロに寝ぼけている記憶はないからできるのだが

「え！？サーカス！？」

「さー…？何だかわかりませんが多分違います。そうじゃなくて凄い人数なんです。とにかく着てください！」

エルルウはお腹を抑えるハクオロを引きずって走り出した

夜 トウスクール宅にて会議

「そうかえ、戦を逃れての。最近他国では戦が絶えないとは聞くが…」

「数は150人弱、殆どが疲労と飢えにで衰弱しきってたから、今は食事をあげて休んでもらってるよ」

ハクオロがとりあえず代表して報告するとトウスクールは頷き眉を寄せる

「ご苦労。じゃがああの山脈を越えるとは何と無茶な…」



「村長、どうするんでい？まさかあの数を受け入れるんじゃ」

「受け入れねば…ならぬ」

「ちよつ、いくらなんでも、150つつたらここのヤツらより多いじゃないですかい！」

テオロが慌てて抗議する

「そりゃあ、ちつたあ蓄えも出来たが、あれだけの数が増えたら、あつという間に干上がったまう！そんなことは村長が一番よく知っているでしょうが！」

「では、おぬしはあの者達を見捨てると？戦で家を焼かれ、住む場所を奪われ、断腸の思いで故郷を捨て、何人もの同胞の屍を踏み越えながら山脈を越え、ここまで辿りついたあの者たちを見捨てると言うのかえ？」

「んぐ、そ、そりゃあ…」

「忘れたかえ。助けあうからこそ、ワシらはこの貧しい地で生きていけるということを」

「…それにも限度つてもんが…。一人二人ならまだしも、あれだけの人間を養う食料も場所もねえつてのに」

確かに…家もなければあれだけいたら蓄えもすぐに尽きちゃう。現実的には、無理だ

「あの…とりあえず疲れが癒えるまでいてもらって、その後他の村や都に行ってもらうとか…」

「そいつあ無理だろうな。他ん所も似たようなもんさ。受け入れてくれるとは…」

受け入れないのは見殺しにするのと同じ、か。問題は食料 いや、食料をまかなう土地だ

「ハクオロや」

「え？」

「お前さんなら…どうする？」

「僕なら…」

「そっじゃ」

騒がしくなる場にハクオ口は尻込みする

「でも…いくら何でも新参者の僕が口を挟めることじゃ…」

「いいや。この前にも言ったが、お前さんはここの男じゃ。みんなが認めとるんじゃ。なら時間なんて関係ない」

「そうじゃの…」

「オラもハクオ口の意見聞いてみてえ」

「うん、僕も」

「アンちゃんの正直な意見を聞かせてくれねえか？」

「さあ、お前さんならこの状況をどう乗り切る？遠慮なく言ってくれ」

みんなに見つめられ、ハクオ口は覚悟を決めた

「僕は…ここのみんなに助けられたから、だから同じ立場のあの人たちを助きたい。でも…」

「『でもここにはあれだけの人を受け入れる余裕がない』…じゃな？しかしそれでも受け入れなければならぬとしたら？」

「それでも受け入れるなら…まずは、集落の拡張に、食料生産できる土地の確保だ。回りということは傾斜になっちゃうけど、今までの経験から、不可能じゃないと思う」

「うむ…」

「でも一番の問題は、すべて自給できるようになるまでの食料だ。今の蓄えじゃ足りない。だから…足りないのは買おう」

「ちよつと待ってくれや。んな簡単に言つて、何処に金があるんだ？自慢じゃねえが金も交換出来そうなもんも何もねえんだぜ？」

テオ口に問われ、ハクオ口は考えておいた案を提案する

「だから造るんだ。金属、特に鉄なら銅より貴重だし都に持って行けば高く売れるよ。そして帰りにはそのお金で食料を買うんだ」

「お、おいおいアンちゃん、無茶言っなつて。確かに鉄つつたらバカ高エけどよ、どうやって造るってんだ」

「鉄の製法なら知ってる。純度が高いのを造るには高熱に耐えうる炉に、燃料とか他に薬品とかいるけど…まあ何とかなるよ」

「何とかなるって…なんでアンちゃんが知ってるんだ。どつかじや造り方すら秘密にされてるって話だぜ」

そう言われると…何で僕はそんなことを知ってるんだ？

考えこむハクオロを見て突然ソポクがテオロの脇腹に肘打ちを喰らわす

「何細かいこと気にしてんの。ハクオロがどうにかできるって言ってるんだよ。だったらそんなのどうでもいいじゃないかい」

「グフツ…あ、ああ、そりゃあ、そうだな」

テオロはハクオロが記憶喪失であることを思い出して同意する。ソポクはにつこりハクオロに振り向き

「んじゃ頼んだよハクオロ」

そう言って片目を閉じた

「うむ。決まりじゃな。ハクオロ、後は任せたよ」

「僕？」

「他に誰がおるんじゃ？なに今までと同じと思えばええ。ちよいと忙しくなるかの」

「う、うん」

簡単に言うなあ。まあ、頑張るしかないんだけどさ

「ではこれで散会じゃ。みなご苦労じゃったの。明日からの作業に備えて今日はゆっくり休んでおくれ」

「ハクオロ、起きんかえ」

「……アルルウ？」

「ええから起きんか」

ドスと容赦なく眠っているハクオロのお腹にトウスクルの足が落ちた

「ごっ…くあ…あ、トウスクール？おはよ？…まだ夜じゃん。てかお腹が痛いんだけど知らない？」

「さあな。出かけるから支度をするんじゃ。約束したんじゃろ」

言われて思い出したハクオロが小指を見るとまだ髪は残っていた

「ユズハ…」

「そうじゃ。寝ぼけて中々起きないくせに起きたらすぐに頭の回りはしつかりするみたいじゃな」

「え？僕寝ぼけてたの？」

「まあの」

「恥ずかしいなあ。何か言ってた？」

「気にするでない」

ハクオロの寝起き（むしろ寝てる）は話しかけても噛み合ってるのかそうでないのか微妙な会話になり、しかも話かけなくても普通に挨拶をしてきてしかしピントのズレた事を言うのが普段なので今更だった

「まあトウスクールが言うなら大丈夫なのかな？」

「ああ」

大丈夫とは一言も言っていないが、害はないし第一治りそうもないのでトウスクールは頷いた

「でもいいの？オボロ、僕に来るなって言ってたけど」

「ええんじゃよ。妹思いは結構じゃが過保護すぎるて。今のあの子に必要なのは話相手さね」

「エルルウとかは？」

「いずれは…の」

「そつえば…目が…」

「幼い頃発作を起こした時に。命は取り留めたが光を失ってもうた」

「病気って…？」

「オシカミ 軀中の神様がいがみ合い争う病さね」

神様…

「すみません、手間取 あ！なんであんたがいるんだ。まさか一緒に来る気じゃないだろうな！」

音もなく現れたオボロがそう言った

「ワシが連れていくと言うんじゃない。さっさとせんか！」

「は、はい！」

以前と同じく弓兵、双子のドリイとグラアが目隠しをして先導する。

「足元に気をつけてください」

「気をつけなくていいぞ。そのまま谷底へ転落してくれれば手間が省ける」

「わ、若様……」

やれやれ、嫌われたもんだね

「ハクオ口様……？」

「うん、こんばんはユズハ」

ハクオ口は椅子に座ってユズハの手をとり、小指に触れる

「まだ、約束は有効だよ」

「はい」

ゆつくりユズハの手もハクオ口の指を探りながら小指に触れた

「？ トウスクール？」

後ろが騒がしいので振り向くと倒れているオボロの口にトウスクールが布をあてていた

何してるんだ？

「仕方ないねえ。オボロを運んでやりな」

「はい！」

ドリイグラアが（ハクオ口の中ではドリイとグラアはセット扱い）オボロを運び、トウスクールもしばらく話をしているよう言つと部屋から出ていった

「まあ、いいや。さて、何を話そうかな」

「…また、エルルウ様やアルルウ様のお話が聞きたいです」  
「そっか」

ハクオロは日常をほんの少し脚色しながら面白おかしく話始めた

「それでエルルウとアルルウの追いかけてここが始まってさ」  
「ふふ…」

微笑むユズ八がどんな気持ちなのかハクオロには分からない。羨望なのか、ただ穏やかな微笑みで相打ちをうつユズ八に、ハクオロは微笑み返す

「ユズ八は普段何してるの？」  
「普段…ですか？」

「うん、友達とどんなことしてるの？」

「トモダチ…トモダチって、何ですか？」

「え、何って…」

純粋な疑問符にハクオロはふいにトウスクルの言葉を思い出す

「あの子に必要なのは話相手さね」

「…『友達』ってのは、一緒に話したり遊んだりする好きな人…かなあ？」

口で言うのは難しいな

「んー、まあユズ八にとって僕みたいなのが友達かな？」

「ハクオロ様が…トモダチ」

「嫌？」

ユズ八は頭を横に何度も振って、頬を紅潮させながら笑う  
「嬉しい、です」

「うん。そのうちエルルウやアルルウも紹介するよ」

「エルルウ様たちとも…友達になれますか？」

「勿論。友達の友達は友達ってね」  
ユズハは嬉しそうに微笑んだ

お腹減ったなあ…あ この地面の土まで美味しそうに見えてきた  
「おいアンちゃん、次の畑予定地なんだけだよ」

いや、土食べる動物っているし、案外イけるんじゃない？カロリー  
は低そうだし実は健康系？

「アンちゃん」

嫌、でも…イけるか？ギリギリ？うん…

畑にしゃがみこんで土をつかんで真剣に睨むハクオロ。はつきり言  
って人間の尊厳とか自尊心は崩壊寸前だが、端から見れば畑につい  
ては村長であるトウスクルから任されたハクオロが真面目に土の様  
子を見ているようにしか見えないから不思議だ

「アーンちゃん！！」

ドンと肩を叩かれハクオロが振り向くといつの間にハクオロは陰の  
中にいた

「！…テオロ」

陰を作ってるテオロが呆れたようにハクオロを見下ろしている。ハ  
クオロは立ち上がる

「テオロ…ちよつといい？」

「おう、なんでい？」

「お腹減った…」

「またか。ちったあ我慢しろよ。アンちゃんはアルルウたちと遊ん  
でたりする時は体力あるし夕飯になってもずつと遊んでるくせに、  
働いてる時はすぐにバテるし燃費悪いたあどういうことだ」

「知らないよ。とにかく僕は頭脳労働派なの。だって夜に部屋で計  
算とか計画考えたりするのは全然お腹減らずにいけるもん」

「はあ、俺なんかは文字読んだりすりとすぐ寝ちまうけどな」

「だあかあら、僕とテオロじゃタイプが違っんだよ」

「分かった分かった。じゃあ指示してくれりゃいいから休んでろよ」  
「……やるよ。一人だけやらないなんて、そっちのが嫌だ」

拗ねて唇を尖らせながら返事をするハクオロに、テオロはどこか嬉しそうだ。が照れ隠しに頬をかく

「そうかよ。…にしてもそのくせサボリたがるのは何なんだよ」

「うつ…それはほら、別腹？」

「何の話でい」

なんて言うかさあ、サボるのは僕の責任でだしいけど、初めから僕だけ特別扱いでつてのは嫌なんだよねえ

「わがまま、なのかなあ」

だけど、やっぱり働くのは面倒だ。勿論やらなきゃ駄目なのは分か  
つて。だから僕にしかできない、今後の計画や材料の量の計算な  
ど細かいのはちゃんとやる。でもこういうのは…みんな頑張ってる  
し大丈夫かな…って

「まあそうだな」

「最低限はやってるつもりなんだけどなあ。まあ、僕も大人だし頑  
張らないとね」

「まだまだ俺に比べりゃ小さいけどな。それに普段はアルルウとタ  
メはる時もあるしな」

「まあ、ね。でも元服も多分してるしね」

「いくらなんでもアンちゃんそこまで小さくねえだろ。小さいつつ  
つても俺と比べたらの話で、同じくらいの他の男と比べてもそう変  
わらねえよ」

「そうかなあ？ソポクともそんなに変わらない身長なんだけど」

「年が違っただろ。それに中身がガキくせえってもよ、真面目に働い  
て俺らに指示したりしてる時は、むしろ俺よりよっぽど年上に見え  
るぜ」

「え…それはちよっと…40歳はなあ」

「誰が40だ!!」



殴られた

だって、テオロ老け顔じゃん

## 主（ムティカバ）様の怒り

ハクオロがのろろしていてエルルウが汗をふいてくれるがお小言という有難いことばを頂戴していると、アルルウがやってきた

「お姉ちゃん、おばあちゃん呼んでる」

「あ、じゃあハクオロさん、ちょっと行ってきます」

ふう、エルルウの文句は初めはサボるなんて。からだけど段々よくわからなくなるんだよね。適当に相槌うつのも大変だ

「んう」

アルルウはエルルウの姿を見ると抱きついてきた。ハクオロは可愛いなあと頬を緩める

「ん？どうしたの？」

「ん」

「アルルウは甘えん坊だなあ」

ハクオロのお腹に頭を擦りつけるアルルウにハクオロはもはや無意識に頭を撫でてやる

アルルウの髪の毛は柔らかくて気持ちいいんだよね

「おいてめえ、エルルウは何処だよ」

聞こえた声に振り向くと見覚えのある姿にハクオロはにっこり笑って挨拶する

「久しぶり、又ワンギ」

「おう　って何親しげに挨拶してんだよ！つかお前に聞いてねえよ。おいガキンちょ、エルルウは何処だよ」

「……あっち」

アルルウはハクオロに抱きついたままぴつとあらぬ方向を指差す

「あっちにはいないから、行っちゃ駄目」

え？何その言い方…ま、さかアルルウさん？そっちは肥溜めなんですけど？

「へっ、そういうことか。エルルウはこっちにいるんだな。俺様を

騙すなんて100年早えぜ」

「ちよつと待って又ワング、そっちは駄目だつて！」

「勝手に俺様を呼び捨てにすっ　ぎゃあああ！」

又ワングは肥溜めに落ちた

「……糞虫」

アルルウ…君ってやつは…

肥まみれになり逃げてしまった又ワングはこの際無視だ。ハクオロにとつてはどちらかと言うなら明らかに女>男だ。何故なら可愛いものが好きだから

「アルルウ」

「ん？」

「あん」

「アルルルウー！！」

あんなこと言っちゃ駄目じゃないか、と言おうとするとエルルウの叫び声に遮られた

「え、ルルウ？　ちょ、アル」

逃げ出したアルルウを追いかけてエルルウがハクオロの前を通過

「待ちなさい！　おばあちゃんが呼んだなんて嘘ついて！！　アルルウー！！」

「……アルルウ……」

女の子があんな言葉遣いしちゃ駄目だよアルルウ。…あとエルルウ、元気なのは良いけど、もうちょと回り見ようよ…

「後で言わないと……」

「んあ？　アンちゃんなんか言ったか？」

「別に。さ、頑張ろう」

ハクオロは気を取り直してにっと笑った

「こんなところに呼んで、何の用だ？」

集落から少し離れた森の入口、そこに又ワングが村の知り合いだった男たちを数人呼び出していた

「決まってるんだろ。あの仮面男のことだよ」

「ハクオロのことか…」

男たちは各々渋い顔をしたり悲しそうに又ワングを見たりする

「又ワング、本気で言ってるの？ハクオロさんを追い出せなんて…分かってる？」

「何がだよ」

「ハクオロさんはもうこの村の男なんだよ」

「お前さんも村の男だったなら分かるじゃろ？」

「黙れ！これはお願いじゃない、命令だ！俺様の言うことが聞けねえのか！俺様はもう昔の俺じゃねえんだぞ！」

「確かに、変わったな」

「んだ。昔のオメエなら、そげなこと言わんかった」

「なっ…」

段々冷たくなる態度に又ワングは慌てて全員を見渡すが、味方してくれるものはいない

「うん。又ワング…変わったちゃったんだね」

「もう昔のことは忘れたんだろ。行こうぜ。そんなやつもう村の男じゃねえよ」

「んだな。又ワング、森の神様ヤナウンカミともう一度向き合いな」

立ち去る男たちだが一人が後ろ髪引かれて立ち止まる。裏切られたとばかりにシヨックを受けている又ワングに、何を言えいいのか分からない

「行くぞ」

「…うん」

しかし結局みんな行ってしまった。残った又ワングは顔を真っ赤にして怒るとそばにある小さな祠に目をやる

「くそっ！何が森の神様だ！こんなもんだのタムヤ霊宿じゃねえか！！」  
そして激情のまま祠を蹴りつけ、中のものも壊してしまう

「はあっ…はあっ…」

すると、何処か遠くから遠吠えが聞こえた

「ひっ!?!」

又ワングが特別ビビリなのではない。それほど、ここの主はムティカバ恐れられてゐる。又ワングだって知っている。これがただの祠ではないことを

森の神様への祠、そして…主を鎮めるための祠

祠を壊してしまった今、主は確実に暴れるだろう。又ワングにはどれだけの被害が出るのかは分からない。ただ、人が死ぬなんてくらいわかる。一人や二人では、絶対におさまらない

けれど激情の前で理性的に振る舞うなんて、又ワングにはできなかった

「あ…ああ…」

そしてやってしまつてから、恐ろしくなつた。遠くの雄叫びが自分を今に八つ裂きにくるんじゃないか。だって相手は、『主』だ

「っ…」

赤かつた顔を180度逆の青にして又ワングは走り去つた

夜、ハクオロは自室で小さな灯りの下でばちと算盤を弾いては何かを書き込んでいく

次の畑予定地だけど、岩盤が邪魔で水路が掘れないや。いつそ簡単な水道橋を作つた方がいいかな

「ハクオロさん…まだ起きてたんですか?」

「あ、エルルウ…君こそまだ?早く寝なきゃ明日に響くよ」

「ハクオロさんこそ…寝ないんですか?」

「ん、まあこれが終わってからね。もうじき一区切りつくから」

「…どうして…」

「え?ごめん、聞こえなかった。なに?」

「……あ……何でもありません。あの、何か暖まるもの煎れてきます」  
エルルウは居間に消え、しばらくすると湯気たつ湯飲みを乗せたお盆を持ってやってきた

「ハチミツ酒です」

「ありがとうございます」

ずず、とすると温かい香りのいい液体が喉を通り体に染み渡る  
温かくて甘酸っぱい……ハチミツと柑橘系の果実だ。美味しい……

「うん……美味しい」

「良かった。ソポク姉さん直伝なんですよ」

ほつとしたように笑うエルルウにハクオロも頬が緩む

「体が温まる……ありがとうございます」

「はい……」

「でもさ」

「はい？」

「君のこの心遣いの方がずっと嬉しいし、心が温まったよ。ありがとう」

「……いえ……どう致しまして」

エルルウはにつこり微笑んだ。顔が赤いのは、暗闇の中を照らすのが小さな火だけだからだろうか

「……え？」

突然、虫の声が止んだ。背中を嫌な汗が伝う

何？何か分からないけど……凄く、凄く嫌な予感がする

「ハクオロ、さん……」

エルルウは耳をピンとたてて何かを察しようとするようにせわしなく動かし、尻尾は全ての毛が太く逆立っている

「いや……いや……」

「エルルウ？」

ガタガタと震えるエルルウを抱きしめるが止まらずに歯の根があわないようにひたすらエルルウは震えている  
遠吠えがして、激しい破壊音に、悲鳴が小さな集落に響く

「エルルウ、エルルウ？」

「…まが…ムイ　パさまがつ…」  
「ムテイ…主！？」

ガタガタ震え続けるエルルウをさらに強く抱きしめてから、ゆっくり手を離す

「は…くおろ、さん…？」

震えながらもエルルウはハクオ口を見上げる

「行ってくる」

「っ！？駄目！駄目です！！主様なんですよ！ハクオ口さんは主様のことを知らないから！！」

金切り声をあげるエルルウにハクオ口は一瞬迷ったが、やはり走りだした

「でも、行くよ。エルルウはここにいて。大丈夫、声も止んだし様子を見にいくだけだから」

「ハクっ」

外に飛び出したハクオ口はまっしぐらに音がしていた方へと向かう。無惨に破壊された家の前になるとむせ返るような臭いがして立ち止まった

「っぐう」

なにこの臭い…血？濃すぎる…気持悪い  
ぐちゃ、ぐちゃ

何か水気のある断続的な音源を目をこらして見ると、白に黒筋のある模様の毛で覆われた大きな体をもつソレ、人間を食べている主が現れた

四足歩行のソレは猫のように髭や丸く鋭い目を持っているが勿論猫のように可愛くはない。暗い中に真っ赤な目がギラギラと睨みつけてくる

「っ」

気づいた主はハクオロにゆつくりと近づいてくる。ハクオロは息を呑み、さつと以前渡されてからすっかり私物とした鉄扇を構えた。前触れもなく主は巨大を軽々と操りハクオロに襲いかかった。ハクオロの頭を一噛みにしようとする口に鉄扇をつっこみ何とかかわすが、転がり逃げる時に足を引っかかれてしまった

「くっ……」

しまった。足をやられた……これが、主

「ハクオロさん！」

「え……」

予想外のエルルウの登場にハクオロは呆然とするが、構わずエルルウはハクオロの腕を自分の首に回してハクオロを担ごうとするが、いまだに震えるエルルウではここまで来たのが奇跡のようだ。今にもエルルウは地面に座りこみそうだ

「ば……バカ！なにやってるんだ！早く逃げるんだ！僕が時間を稼ぐか」

「駄目です！ハクオロさんを置いてなんていけません！！」

「っ……え？」

主は、何かを探るようにぴくぴくと耳を動かして、襲いかかってこない

「……なんだ？」

ポツ、ポツとハクオロの頭に雫が落ちてきた

「あ……」

ザーッと突然雨が降りだした。すると急に主は踵を返し山の方に帰って行った

「……は？」

「……」

「あ、エルルウ」

ぎゅっと目を閉じて震える腕でハクオロを抱きしめているエルルウは、雨が降っていることにも気がついてないようだ



「エルルウ、エルルウ」

「…駄目、駄目です…」

「助かったんだ。主はどっか行っちゃったよ」

「え……ああ……あ……」

目を開けて確認するとエルルウはポロポロと泣き出し、今度こそ地面に座りこんだ

「助けてくれて、ありがとう。僕って結局、いつも肝心な時はエルルウに頼ってるね。カッコ悪いなあ」

「っ……あああっ」

あながち冗談に出来ない軽口を言いながらエルルウを強く抱きしめて、ハクオロは優しくエルルウの頭を撫でた

「ごめんね、ありがとう」

でも、なんで主は立ち去ったんだ？……！ あれは……

「キリクリの家がカミさんも子供も……みんな食われちゃった」

「……」

「噂じゃヒツタの集落がムティカパに襲われた。トトウが襲われたばっかだっというのに。村長、もう我慢できねえぜ。黙ってみておくつもりか！？」

「……お主の気持ちは痛いほど分かる。じゃが、相手は主様じゃぞ。強く、素早く、賢く、何より矢も槍も貫くことのできないその体じや」

「っ……しかしよう」

トウスクールとテオロが言い合っている緊迫した気配の中にハクオロが気軽に入ってきた

「トウスクール、ちよつといいかな？」

「なんじゃ、欠席するんじゃないのかい？」

「ん、乾いた場合を確かめたくてさ。もし乾いてて柔らかいなら肉

体そのものが強いわけだし」

「？ 何の話じゃ？」

「これ、何だと思う？」

ハクオロはトウスクールに数本の白と黒の毛を渡す

「ふむ、毛……！ もしや、主様の……！」

「うん。テオロこれを切ってみて欲しいんだ」

「まあ……別にこのくらい……ふっ……！？ んんっ……っだあ……！……な、切れねえ」

テオロに渡した一本の毛はどんなにテオロが引つ張ろうと伸びることにすらしない

「刃物使っても無理だし火であぶっても駄目。で、テオロはその毛で全身を包まれた主をどう退治するつもり？」

「ングッ そ、そういうのは、アンちゃんの役割だろう？」

「はあ……まあいいけど。見て」

ハクオロは一本の毛を取り出し、引つ張った。すると嘘のように簡単にぷつと切れた

「は……？ さ、さすがアンちゃん！ で？ どうやったんでい……！」

「僕とエルルウは助かった。それは主の気まぐれでも満腹になったんでもない。答えは、雨さ」

ハクオロが襲われた時に見つけたもの、それは抜けていた主の毛だ。何の気なしに持ち上げたそれは、たやすく切れた

「雨……！ なるほどな。水で濡らしておるのか」

「そう。主が立ち去ったのは雨に濡れることぞ、弱点を披露するも同然だから。だから、退治もやってやれないことはないよ。ただ……」

「？ なんでい？」

「相手は、主なんだよ？ 僕は信仰心なんてないけど、みんなは大丈夫なの？」

「……ワシらとて、好き好んで同胞を見殺しにしたいわけではないんじゃ」

「じゃあ……」

トウスクールはゆつくりと頷いた

「うむ、ハクオロ、後は頼んだぞい」

「うん」

今もすぐ目の前に思い出す。あの生臭い赤い液体をしたたらせる白い獣

恐ろしくて、身震いがする。けれど放つてはおけない。だって、大切な人が傷つくほうが、何倍も怖い

お母さんになる？

今度の罾も単純なもの。元々、罾は単純なほど効果は期待できるものだ

縄張りに入り『主』<sup>ムシイカバ</sup>を誘きだし、水のはられた落とし穴の場所につれてくれればあとは待機していた人たちが罾を発動させる

「で、ホントにそんなので誘いだせるの？」

「おうよ」

ハクオロが不審そうにテオロの手元を見る。テオロは大丈夫だつて、言いながら銅鑼<sup>ドローン</sup>を持ち上げてならす

「あいつは自分の縄張りで騒がれるのが我慢できねえやつなんだ、よっ！」

ドーン！ドーン！

銅鑼が響くとすぐに遠吠えが聞こえ、派手な物音が段々と近づいてくる

「きた！逃げるぞ！」

「おう！…っ！？な、なんだあ！？」

二人が走りだそうとし、違和感に立ち止まり足元を見る。すると、鳶が絡み付いて二人の足を繋いでいた

「ちよっ、テオロこっちこないでよ！」

「アンちゃんこそ！」

「とにかく早くほどうて…っで、かてー！」

ハクオロがもどかしく鳶を引っ張るがいつの間にかこうなったのか堅い結び目が存在していた

「落ち着けアンちゃん、こいつで ふっ」

テオロが腰にさしていた斧で鳶を切る

「ふう、やれやれ」

「ってテオロ！一息ついてる場合じゃな」

ドスンガサガサ！と音がしてゆっくり振り向く

「……………」  
明るい場所で間近にみた主は巨大<sup>△ティカバ</sup>白虎のようだったが正しくは分からない  
グルルルルという不機嫌そうな唸り声と鼻息が届き、二人は顔を青くする  
「……………逃げろー!」

「ハアツ…ハアツ…ヒイツ! だあつ!」  
「ってアンちゃんなんで!？」  
二人はばらばらに走り出したにもかかわらず、太い木の幹を回ったところでぶつかりハクオロは転んだ

「そ…こつ…」  
それはこつちの台詞だ!と言おうとするが体力を使い果たしたハクオロはヒューヒューと肩で息をする

「ああもう!仕方ねえなあ!」

テオロはハクオロを担ぎあげ、ドスンドスンという派手な足音に負けじと走り出した

息を整えながらハクオロは担がれているので正面にいる主を見てタイミングを計る

テオロが罨の上を走りぬく。主はあと罨まで5メートル

4…

3…

2…

1…

0！

「今だぁ！！」

ハクオ口の叫びに脇に控えていた人たちが縄を引き、罾を作動させた主の足元には大きな穴が空き、勢いよく主は水に飛びこんだ

「はぁ…はぁ…やったか！？」

「いや、皆！構え！」

暴れる水音を聞きながらもハクオ口が合図すると隠れていた人たちがそれぞれ得物を手に出てきた

勿論水は弱点だろうけど、それで殺すことはできない。ちゃんと、止めをさすんだ

案の定主は耳を塞ぎなくなるほどの大きな唸りをあげると、一気に落とし穴から飛びあがってきた

唸り声をあげ、ゆっくり近づいてくる主に人々は後退る

「怯むな！もう主は無敵なんかじゃない！刃を撥ね返さない！僕らは負けない！！」

「っ…」

普段の様子が嘘のように強い口調で言うハクオ口に一步、また一步と人々は武器を構えながら主を取り囲む

「今だ！」

ハクオ口の合図に一気に主の体に刺さる得物たち。反対側にまで貫いている槍、食い込んで柄しか見えない斧などの農具。ぼたぼたと血を流し、しかし動かない主は威嚇を止めない

「……だあっ！！」

止めと、ハクオ口の扇が主の額から後頭部にかけて貫いた。ガクリと主は地に伏した

「…終わりだ」

ハクオ口は瞳を閉じてゆっくりと息をした。そして目を開ける

「終わった、ね」

先ほどまでの厳しい雰囲気をも180度変えて柔らかくハクオ口は微笑んだ

「お疲れ様。みんな、よく頑張ったねえ」

奥に隠れていたソポクたちが出てくる。疲れて座りこんだハクオロにエルルウが側による

「大丈夫ですか？」

「う、んっ……疲れた、だけ」

疲れた…本当に。だって僕は、この手で命を潰したんだ。主に罪はない。でも僕らにだって…ただ、生きていくためには仕方がない。仕方がない話なんだ

ハクオロは自分の手を見た。扇は血に汚れていたので拭ったが、手には血はついていない。けれど、どうしても自分の手が汚れているような気がした

「…はあっ……………？ 誰か、そこにいるの？」

ため息をついて、ふと頭だけを振り向かせ後ろを向いた。物音がした気がしたのだ

「アルルウ…どうしたの？」

茂みからこちらを覗いていたのはアルルウだった。困惑したようにうゝ、とアルルウは唸りながらも動かない

「？ アル」

「こらアルルウ！危ないから家で待つてるように言っただじゃない！どうして…ってあら？」

アルルウに気づいたエルルウが茂みに入って行ってアルルウの腕を掴むと、何故か不思議そうに首を傾げた

「なに？そのお腹…？」

「？ アルルウ、どうかしたの？こっちおいでよ」

「うゝ…」

茂みから現れたアルルウには、ぽっこり膨らんだお腹があった

「ん？アルルウ、それなに詰めてるの？」

「赤ちゃん…」

「は？」

「アルルウとおにゅちゃんの、赤ちゃん」

「……」

一斉にハクオロに疑惑の目が向けられた

「いやいやいや！ないから！僕子作りなんてしてないから！マジで！  
……いや、興味がないわけじゃないけどアルルウはちよつとね。それに妹に、なんて僕鬼蓄じゃん

ていうか！僕信用ないっすね！エルルウまで僕をそんな目で見ないで！！

「キュー……」

アルルウのお腹が鳴いた

「……アルルウ、本当は何を隠してるの？お姉ちゃん怒らないから、だして？」

「……ヤダ」

アルルウはお腹を押さえて首をふる

「……アルルウ、おいで」

「……」

ハクオロは立ち上がり、ゆっくりアルルウに近づいてしゃがみ込んで鼻がぶつかるような位置で微笑んだ

「アルルウがさ、嫌がるには理由があるんでしょ？なんとなくけど、ただの推測だけど、だいたい予想できる。大丈夫、僕が守るから。どんなことがあってもアルルウのこと信じてる。大丈夫。大丈夫だよ」

動物で、隠さなきゃならないもの。怪我をして拾ったとかならエルルウが反対をするわけがなくて、だから中に何かあるかは分かっていた

「……おにゅちゃん」

「お腹の子供に、会わせてくれるかな？」

「……うん」

そつとハクオロに手渡されたのは白地に黒縞のはいった猫科の生き物。小さなそれは親にそっくりで、だけど可愛らしくガオ〜と鳴いた  
「可愛いね」



「んっ、可愛い」

「ってアンちゃん！そいつぁ、主の子供じゃねえか！」

「！」

アルルウが肩を震わせて主の赤ん坊ごとハクオ口を抱きつく

「だから、どうかした？」

「どうかって…分かってんだろ？今は無害でも大きくなってまた俺らに危害をくわえねえとは言えねえんだぞ！？」

「アルルウが、育てる。約束した！…アルルウ、お母さんになるって、約束した」

約束？主と…？

「アルルウ」

ざわついたその場がトウスクルの呼びかけ一つで静かになる

本当にトウスクルは、凄い。いつだって正しいことを、正しく、当たり前前みたいにする

「聞こえたんじゃね？」

ん？なにがだ？トウスクルはいつも正しいんだけど、時々意味が分からない。まあ僕が世間知らずだからかな？

「うん」

「…テオ口、アルルウの好きにさせておあげ」

「村長！？」

「あの！ちゃんと育てますから！だから！」

「お姉ちゃん…」

エルルウがテオ口とアルルウの間に立つてそう言つとテオ口は困って頭をかく

「エルルウまで…参ったなあ。俺あ別に意地悪で言ってるわけじゃねえんだぜ。なあ？」

「別にいいじゃないか」

同意を求めたのにあつさり言われテオ口は情けない声をあげる

「カアちゃんまでんな…もし人を襲ったらどうすんでい？」

「そんなときやまたあんたが退治してくれりゃいいじゃないのさ。何

だい？自信がないっての？」

「ば、バカ、主の一匹や二匹俺様にかかりやあ…」

「じゃあいいじゃないか」

「ング」

ソポクに言いくるめられしかしそれでもテオ口はまだ決めあぐねて  
いるようでハクオ口を見下ろす

「なあアンちゃん、考え直してアルルウを説得してくれよ」

「僕だってさ、別に主が子供で可愛くて可哀想だからってだけじゃないよ。アルルウが大丈夫だって、エルルウも育てるって言ってる。僕は彼女たちを信じてる。主は信じてないけど、彼女たちがいるなら大丈夫だよ」

「アンちゃん…」

「もし何かあったら、その時はワシが責任をとる。老いばれの首で良ければ好きにせい。ついでにハクオ口のもつけてやる」

「僕はついだよ」

「…分かったよ、村長がそこまで言うなら。だがよアルルウ、もし何かあったら…分かってるよな？」

「うん」

アルルウは嬉しそうに尻尾をふりながら主の子供をハクオ口の手の上から抱きしめて頬擦りをする

どっちも可愛いなあ。可愛いけど…アルルウ本当にテオ口の話聞してる？ まあ、大丈夫だよな

汚れたこの手にさらに血を重ねたくはなかった。だけど、分かっている。必ずまた何かの命を奪わなければいけない時がくる。それはこの世界ではきつと避けられないこと

自分の手に重なっている小さなアルルウの手をはねのけたかった。汚れた手に触れて欲しくなかった。綺麗な君だから尚更。大好きな君だから尚更

だって大切な大切な、家族

ハクオ口が主の子供に触れたのすら勢いがなければできなかった。

そうでなければ、殺した手でその子供に触れたりはできない。いますぐに水に飛び込み全身を洗い流したかった。だけど無駄だと分かっている

「おにちゃん」

「なに？」

「大好きい」

そういつてアルルウはハクオ口から主の子供を受け取るとハクオ口のお腹に突撃してきた。ハクオ口はただその手で抱きしめるのをためらった

「？ おにちゃん？」

「うん…ねえアルルウ、君の頭、撫でてもいい？」

「んっ」

ハクオ口の葛藤なんて何も知らないアルルウは無邪気に微笑んで頷いた

それでも、アルルウにそんな気はなかったとしても、ハクオ口は許されたような気がして、ゆっくりと手をアルルウの背にまわし抱きしめて、頭を撫でた

「アルルウ、『お母さん』頑張つてね」

「ん、アルルウ、お母さん！」

「エルルウも、ね。迷惑かけてる僕が、さらにくいぶち増やしてごめんね」

「いえ、ありがとうございますハクオ口さん」

エルルウが微笑んで、ハクオ口は何故か胸の奥が熱くなった。嬉しくて、温かいくらいなのに、何故か泣きたいくらいに切なかった何だろう？ やっぱり、僕の失った記憶と関係があるのかな？

ハクオ口はエルルウに微笑みかえした。胸のうちなんて見せずに



## 藩主ササンテ

「キュー」

アルルウが育てること収まったとうの本人（主の子供）<sup>△ティカバ</sup>はアルルウが転がした布の玉にじゃれついては、しばらくしてアルルウに持つていきまた投げてもらうを繰り返す

「いい子いい子」

「キュー」

か…可愛いっ！　なんて言うか、可愛い女の子と可愛い小動物って無敵ですか？

「あゝ、アルルウ可愛いすぎ！主の子供も可愛いすぎ！」

ハクオロが悶えるように言うとお茶を前に置きながらエルルウが苦笑する

「あはは…まあでもこれなら心配なさそうですね」

「だね。だって可愛いし。名前とか決まった？」

「あ、それが…」

エルルウが何やら意味深な目をアルルウにやるとアルルウは主の子供を撫でながら

「ムツクル」

と言った

「ん？」

「ムツクル」

え…と、もしかして主の子供の名前が『ムツクル』…とか？

「…名前？」

「私は別の名前がいいって、言っただけですけど」

「ムツクルもムツクルがいいって。ね、ムツクル？」

「ガオ」

「ま、まあいいじゃん。ムツクルおいで」

「ガオ」

たたつとムツクルはハクオ口に飛び付いて鼻をすりつける

「可愛いなあ。ねえエルルウ」

「はい。私にも抱かせてください。おいでムツクル」

「キュー」

今度はエルルウにムツクルが抱きつく

「ふふ…つて、え？ちよつ」

「？」

何やらごそそとムツクルはエルルウの胸元に頭を突っ込む

「ムツクル、お腹減ったって」

「え」

それってつまりエルルウにミルクをねだってますか？

「ちよ、あ！んんっ」

チュパチュパと何かを舐める音がして真っ赤な顔で唸るエルルウは耳と尻尾をピクヒクさせる

な、んて顔をしてるんだあ！なんて言うか…可愛いすぎる！なんて言うか…なんて言うかなあもう！

「んっ…あ…？」

しかしムツクルはしばらくすると情けない声をあげながら頭をだした

「クウーン…」

「ムツクル、可哀想って」

「かわっ…！？」

まあそりゃあでないだろうね。それに…あんまり胸はないよね

シヨックを受けているエルルウをよそに今度はアルルウの懷にムツクルは忍びこむ

「ガオ〜」

そしてまた舐める音がするが、アルルウは平気な顔でムツクルも出てこない

いや、アルルウだってでないでしょ

「し、しかしこうやって見るとアルルウ本当にお母さんみたいだね」

機嫌の悪いエルルウが発する空気を何とかしようとハクオ口は殊更明るく言った

「ん。アルルウ、お母さん、おにーちゃん、お父さん」

「いやぁ照れるなあ。ムツクル、お父さんだよ」

「あれ？　なんかエルルウの雰囲気がいり冷たくなった気がするぞ？　なんでかな？」

「ハクオ口さん……」

「な……んですかなエルルウさん？」

思わず敬語をつかうハクオ口

「私……お茶をいれてきますね」

先ほどエルルウがいった湯飲みにはまだなみなみとお茶がある

「え？　まだ飲んでな」

「いれてきますね」

エルルウは部屋から出ていく。すると居間からドン！ドン！という打撃音が連続的に聞こえ、ハクオ口は反射的に首をすくめたが、アルルウは平気な顔でムツクルと戯れている

「……アルルウ」

「ん？」

「なんでエルルウ、あんなに怒ってるの？」

しかも向こうで暴れるくらいに

「知らない」

「そっか……」

せっかく休んでるんだから、アルルウだけじゃなくてエルルウとも一緒にいたいんだけどなあ

ハクオ口は嘆息してからアルルウとムツクルの頭を交互に撫でた

ざわざわと騒がしいので家でごろごろとしたのにトウスクールに引っ張られるようにハクオ口は外にでた

「貴様がここの村長か？」

うつわ僕関係ないし、帰らせてよ。

トウスクールは何で僕を連れてきたかなあ

ハクオ口がぶつくさ文句を呟いているとトウスクールがジロリと睨んできて、ハクオ口の足を踏みながら問いかけてきた兵士に改めて向き直る

「！……っう」

「そうじゃえ」

この婆さん…平気な顔して人の足をゴリゴリとっ…晩御飯のおかず盗んでやるからみてろよ！

「ぶひゃひゃひゃひゃ、久しぶりにやもねえ。まあだ性懲りもなく生きてたにやもか」

兵士に言われて二人が人垣を越えて先ほどから視界に見えていた引車のところに行くと、どつぷり太った豪華な身なりの男がいた

『にやも』？変な口調。巫山戯てるのかな？それとも素？

「まあ。この間こそそそ持っていた痔の薬は効いたかの？」

「にやも！！」

顔をひきつらせる男に兵士たちがトウスクールとハクオ口を武器を構えて取り囲む

うわ、メンドーなことになったなあ。まあトウスクールなら大丈夫だろう

「貴様無礼だぞ！この方は偉大なる藩主ササン様だぞ！頭を下げよ！」

「…ぷん、よいよい。死にぞこないの戯言にやも。ところで噂によるとおみやあ等、ずいぶん羽振りがいいそうだにやも？」

「まさか。日々食べて行くので精一杯じゃよ」

「にやぷぷぷ。嘘はいけないにやも。聞くところによると、鉄を売ってるらしいにやもね

にやぷう、その顔はあたりにやもね。鉄はつくるにも売るにもワシの許可がいるにやも。黙ってるとは打ち首ものにやも」



そこまで言ってササンテは嫌らしくにやあと笑う

「で・もお、ワシは寛大にやも。誤魔化していた粗を払えば許してやるにやも。そうにやもね、かれこれ10年ぶりは払ってもらうにやも」

「なんだって！ ちよいと待つとくれや！ 俺らが鉄をつくりだしたのはつい最近だぜ！」

「にやぶぶ、粗を払わずにいた罰にやも。打ち首にしないで感謝するにやも」

「分かっておる。粗は、払う」

「村長！？」

ああもう！なんだよこのデブむかつくなあ。ていうか十年って無茶苦茶すぎ！

「ちよつと待つてください」

叫ぶハクオロにササンテは今気づいたとばかりに膨れあがったもさもさの頭を傾ける

「にやも？ おみああ誰にやも？」

「そんなことより、私たちはちゃんと鉄をつくりだした報告も普通とは別の粗も払ってましたよ」

「にやもお？ そんなの知らないにやもよ」

「なんですって！？ それは大変ですよ！ ササンテ様の部下に着服をする不届き者がいるということですか！？」

「にやもー！？ どういうことにやも！？」

「だって私たちがササンテ様のために稼いだお金は、ちゃんとササンテ様の部下である兵士のかたに渡したのですよ！？」

僕らが偉大でかつこよくて素晴らしいササンテ様のために汗水流したお金を！ ササンテ様のお金を！ なんと不埒な兵士が盗んだのですよ！？ なんて、なんてだいそれたことを！！」

「なんにやって！？ ふふううつ！ 許せんにやもー！」

怒り心頭とばかりに真っ赤な顔で鼻息を荒くするササンテにハクオロは畳み掛ける

「ササンテ様！ お怒りは最中です！ 我らとてササンテ様に差し上げたつもりがそのようなことに……。すみません！ 私どものミスです！ どうか盗まれた分をまとめて今お支払しますから、どうかご勘弁を！」

「にやもお？ 飯にそうだとしても、やっぱりおみああたちが悪いにやも。よつて十ね」

「ササンテ様！ そのようにごむたいなことをおっしゃらないでください！ そのようなことをされては、私たちは生きていけません！ 勿論、私たちはササンテ様のためなら死すら惜しくはありません！ しかし！ しかしです！ 偉大でカツコヨクで凛々しく強く賢く気高いあなたに、ササンテ様にもっとお仕えしたいのです！」

ハクオ口はばつと土下座をして額を地面にこすりつける

「どうか！ どうか我らをあなた様のためにもっと奉仕させてください！」

「にやも……。ぷい、仕方ないにやもねえ。そこまでいうなら今後もワシのために働かせてやってもいいにやも。十年は勘弁してやるにやも」

「ありがとうございます！！」

有難いわけあるかー！！

「テオ口、じゃあさつそく差し上げてたのと同量の粗を用意してさしあげて」

「お、おう」

トウスクールが指示してテオ口たちが粗を用意する間はハクオ口がひたすらゴマをすっていた

「……トウスクール、もういいかな？」

ハクオ口は張り付けた笑顔のまま隣のトウスクールを呼ぶ。ササンテたちは粗を取り上げると立ち去った

「ああ」

「っ……だああ！　なんだよあれ！　十年とかボケてんのか！　あゝ  
っ、もうやだー!!」

じだんだを踏むハクオロにトウスクールはすまなさそうに眉を寄せて  
ため息をついてから、微笑む

「よう我慢したの。お主の機転に、感謝する」

「……うん。でも新参者だから今までと違う態度とか思われずにすむ  
だろうし、それに元はと言えば僕のせいだから。ごめんね、僕知ら  
なかったんだ。鉄をつくったりするのに許可がいるなんて……」

「そんなもんありやせんよ」

「……え？」

あれ？　今トウスクール凄いこと言わなかった？

「ワシらから金をむしりとりたくて即興でつくったにすぎん」

「……はあっ!？」

あのデブ！　可愛くないのは見た目だけじゃなくて中身もかよ！  
最低だよ！

「村長！　なんで素直に払っちゃったんでい？　そりゃあハクオロ  
のおかげで十年なんてこたあ免れたけどよ、だいぶ持ってかれちま  
ったぜ」

「あそこで首を縦にふらなんだら、難癖をつけられてここを焼き払  
われとったよ」

うゝ、納得いかない

「どうした？　雁首揃えて慌てふためいたりしてよ？」

ひょいと現れた又ワングに人々は険しい顔を向けるがハクオロは悲  
しそうに

「又ワング、悪いけど今日は遊んであげられないんだ」

と片手をあげて言った

「残念だな　ってなんでだよ！　いつ遊んだ！　つか何で上から目  
線なんだよ!!」

「冗談だよ」

「おい又ワング！ まさかこれ、お前の仕業か？」

「へ、だったらどうなんだよ」

「てめえ！」

詰め寄られて伸ばされた手を又ワングはふりほどく

「あ？ 触んなよ。俺様はこの藩主様になるんだぜ」

「くっ……」

「又ワング……」

現れたエルルウに又ワングは一気に子供のように微笑んだ。エルル

ウが暗い顔をしているのは全く気にならないというか気づいていない

「エルルウ！ よう、元気だったか？」

「又ワング……酷いよ……」

「あん？」

「みんな、みんな一生懸命だったのに……」

「お、おいエルルウ？」

しかし涙を溢したエルルウには又ワングも慌てて何とかしようとしても、何をすればいいか分からずに手を宙に漂わせる

「又ワングの、バカアー ア！！」

そしてエルルウは立ち去ったが又ワングは呆然と見送るだけだった。ハクオ口は慌てて

「エルルウ！」

と叫んで追いかけた。これからのことを話し合わねばならぬと知っていたが、エルルウの側にいてあげたかった

「又ワング、お前さんもバカだねえ。エルルウが本当に喜ぶと思ったのかい？」

「……くっ、うるせえ！」

ソポクに呆れたように言われた又ワングだが、肯定なんてできなかつた。又ワングはウマに乗るとその場を立ち去った

くそ！ なんだよ！ 俺様は偉いんだぞ！ エルルウ、お前には、お前にだけはなんだってしてやるって、お前のために、お前のために言ってるんだ！ こんな村なんかいらねえだろ！！

又ワングは心の中で怒鳴りながら、それでも本当はエルルウがこの村を捨てないと知っていた。だけど曇ってしまった今の又ワングの目では、自分の真実の心さえ知ることはできなかった

「エルルウ！」

木の陰にもたれて座っていたエルルウに近寄る。エルルウは涙をポロポロとこぼす

「っ…ハクオロ、さん……今は、今は一人にしてください！」

「…うん。正直僕には何を言えいいかわからない。でも、側にいさせて欲しい。だって、僕ら家族でしょ？」

「っ…ハクオロさん！」

隣にしゃがんでエルルウの肩をだくハクオロにエルルウは抱きついて涙を流す

「私っ…私ほっ…！」

「大丈夫。僕はずっと君の味方だよ」

「っ！……あ…ああっ！！」

僕は又ワングのことはせいぜいツッコみってことしか知らない。だからエルルウの気持ちは分からない

だけど、それでも側にいたいんだ。慰めることもできないけど、何もできないけど、エルルウの側にいたいんだ

エルルウは泣いて泣いて、ハクオロの胸を濡らした。その間ハクオロはずっとエルルウの頭を優しく撫でていた

## シスコンの恩返し

正直やぶあい。何がってそりや残り食料とかお金とかお金

ハクオ口は藩主ササンテが去った夜にぱちぱちと算盤を弾いて紙面とにらめっこをしていた

足りないのは勿論、あのデブ藩主に増量してとられた通常の粗とさらに鉄の粗だ。おかげで予想よりずいぶん少ない

今はまだ大丈夫だがこれでいま台風が来たり、雨が降らないカンカン照りでひからびたりしたら、確実に食料難になるだろう

みんなに食料が回らないのは非常に困る。何故ってトウスクルくらしいは平気な顔しそうだけど可愛いアルルウやエルルウ、それに大食らいのムツクルやそれに村の皆が元気ないのは嫌だ

「うゝゝんゝゝん」

参ったなあ。倉の中身が勝手に倍になったりしないかなあ

まあ冗談だけど。悩んでも仕方ないし今日はもう寝よ

「アンちゃん！」

「だっ！？ あ、何だテオ口か。こんな夜中にどうしたのさ？」

布団をひきかけたハクオ口は予想していなかった突然の大声での呼びかけに、つんのめるようにして布団に乗ると反転して鉄扇を構えた

「いいからそう構えないでくれ。ちよいと来てくれや」

「むゝもうエルルウに怒られるのはヤダ」

先日景気付けだと夜中に呼ばれ大量の酒を飲まれたハクオ口は、しっかりと二日酔いになりエルルウに怒られてアルルウに避けられて散々だったのだ

ハクオ口はそこまで酒に弱いわけでもないのでコップ一杯で酔ったりはしないが、さすがに酒瓶を一気飲みしたあたりから記憶はないあと悪酔いはする。記憶にはないがその場にいた人たちはしばらくテオ口以外がよそよそしかったのだ

扇はおろすが警戒は逆に強まったのでテオ口は慌てて否定する

「今日は違っただよ。いいからきてく」

「んゝ、おにゝちゃん？」

部屋の入り口からアルルウとエルルウが覗いている

「あ、アルルウにエルルウも…起こしちゃった？」

「はい。テオロさんも…どうかしたんですか？」

「ああ、ちよつとアンちゃんに用があつてな。行くぜ」

「んゝ、分かったよ」

違うつて言つてたし、行つてみよう

「ん」

「ん？」

部屋から出ようとするアルルウがきゅつとハクオロの服の裾を掴む

「アルルウも…行く。おにゝちゃんが行くなら、アルルウも一緒に行く」

「え、眠いでしょ？ いい子だから待つ」

「や！ アルルウも」

参つたなあ。アルルウは言い出したら聞かないんだ。まあそこも可愛いけどさ

「別にいいじゃねえか。すぐそこだ。エルルウも来るか」

「あ、はい」

「もう…二人とも明日起きなくても知らないよ」

呆れたように言うハクオロだが、エルルウは普段のハクオロの寝起きの悪さを身を持って知っているのでムツとして小さく呟く

「……ハクオロさんに言われたくありません」

「え？ 何か言つた？」

「何も？ ね、アルルウ？」

「んゝ」

アルルウはエルルウと手を繋ぎながらもぞもぞと眠い目を擦っていた

倉の前に来たとき、驚きでアルルウも両目をしっかり開けた

「え…これって」

「ああ、取られた粗だな」

倉の前にはモロコ芋などが入った俵が積んであった

「何で、あ！　もしかしてほらエルルウの幼なじみって言う又ワングが」

彼なら藩主の息子なんだからどうとでもなるだろうし

しかしハクオロの意見にテオロは首をふる

「アンちゃん、アンちゃんはお人好し過ぎるぜ。エルルウならともかくアンちゃんは昔のあいつを知らないで、よくそんなことが言えるよな」

言われて思い返すと確かにハクオロには又ワングにいい思い出はないが、しかしだからと言ってそこまで悪い印象もない

確かに偉そうな態度と自分勝手なところはあったが、ウマ（ウオプタル）に踏まれたり肥溜めにはまったりと可哀想なところを見ていたので、むしろ多少同情する

それに…エルルウ泣かせたりしたのはムカついたけど、慌ててたしエルルウを悪いようにしたいわけじゃないと思うんだよね

「でも、エルルウは信じてるんだよね？　なら僕も信じるよ」

何より家族が、信用する人が信じる人なら、少しくらい無条件に信じてもいいと思うんだ

「……はい」

「ま、エルルウの気持ちは分かるしアンちゃんの理屈も一応分かった。だがな、あいつはもう昔のあいつじゃねえんだよ」

「……」

まあだからって又ワングのことはよく知らないし、エルルウが信じるっただけでエルルウと同等に好きになったり信用するわけじゃない。ていうかそれは無理

「にしてもさっ、又ワングじゃないならなんで戻ってきたんだろうね？」



「さあてね。ワシらを哀れんだ優しい方が恵んでくださったんじやろうて」

「は？」

いつの間にかハクオロの後ろにいたトウスクールはそう言つと、テオ口を始めとする集まっている男たちに倉にいれるよう指示をする

「トウスクール、これ誰がやったか知ってるの？」

「ワシが知るわけなからうて」

「…うん……そうだよ」

ただ、ハクオロには一人だけ心当たりはあつた。トウスクールに恩義があり慕つていて、身のこなしがまるで賊のように素早い人物を、一人だけ知つていた

勿論確証はないが、しかし何となく正解だろうと思う。ただの勘だけれど

「ふわああ……」

アルルウはもう飽きたのか欠伸をした

「ああ、アルルウもう戻つて寝なよ。いい子は寝る時間だよ」

「…ん」

「ほらエルルウも」

「あ、はい……ハクオロさん」

素直に戻ろうとしてエルルウはピタリと止まると振り向く

「ん？」

「それって私も子供つてことですか？」

「え、いやそんな他意は……。というかほら僕、エルルウと同じくらいかむしろ世話になりっぱだし下かなみたいなの？」

「…別にいいですけど」

ふう。エルルウは怒らせると怖いんだよね。お母さんの存在だから食事減らされても困るし

「ん？」

エルルウの背中を押して家に帰ろうとして、ふと視線を感じてハクオロは振り向いた

「……あはっ」

何も見えなかった。ただいつも通りの山の姿。だけどただ何となく笑った

ありがとう

「? どうかしましたか?」

「ううん。行こう」

「……!」

ハクオ口はこっちを見て笑った

ありえない。この距離、そして気配を完璧に絶っているのに気づくなんて

何者なんだ…あいつは

「ドリー、グレア行くぞ」

「はっ」

暗闇の中、外套を翻し男は二人のお供を連れて去った

騒がしくて目を覚ますと、何故かテオ口がハクオ口の部屋にいた  
あ、もしかしてまた酒盛のお誘いとか…

エルルウがちらりとハクオ口を見ると、恥ずかしくて思わず下を向いてしまった

夕食の時もだが今も、ハクオ口に思いきり泣き付いたことが恥ずかしくてあまり視線をあわせられなかった

「テオ口さんも…どうかしたんですか?」

だからテオ口に問掛けたのだが

「ああ、ちょっとアンちゃんに用があつてな。行くぜ」

と何となくはぐらかされてしまった。テオ口が呼びかけるとハクオ

口は面倒そうに頷いた

「ん、分かったよ」

嫌だ。と思った。行つてほしくはない

泣いて泣いて、抱きしめられた体温は心地よくていつまでもそうして欲しかった

エルルウはハクオロが好きだった。優しくて頼りになった。子供っぽく甘えたりするところも可愛いと思つた

最初はちよつと気になるだけだった。だけど一緒にいて、家族だと言われて、笑いあううちに、どんどん好きになつていた

妹のアルルウに嫉妬したりして自己嫌悪したりする時もある

「ん」

「ん？」

ハクオロが部屋から出ようとすると、アルルウがきゅつとハクオロの服の裾を掴んで甘えた声ですりよる

「アルルウも行く。おにちゃんが行くなら、アルルウも一緒に行く」

羨ましい。私もアルルウみたいに素直になりたい。私だって、好きでこうなんじゃない

「え、眠いでしょ？ いい子だから待つ」

「や！ アルルウも」

ハクオロは困つたふうにながらも頬は緩んでいる

もう！ ハクオロさんは、いつもアルルウに甘いんだから…

「別にいいじゃねえか。すぐそこだ。エルルウも来るか」

「あ、はい」

「もう…二人とも明日起きなくても知らないよ」

呆れたように言うハクオロに、エルルウはムツとして小さく呟く

「……ハクオロさんに言われたくありません」

ハクオロは毎日わざとかと疑いたくなる寝ぼけっぷりを見せている。エルルウはそこも可愛いとは思うが、そんなハクオロに子供扱いされるのは感に触る

「え？ 何か言った？」

「何も？ ね、アルルウ？」

「ん」

アルルウはそんなエルルウの気持ちを知ってか知らずか眠そうに目を擦っていた

倉の前に来たとき、驚いてエルルウはアルルウの手をギュツと握った

「え…これって」

ハクオロがエルルウとアルルウの気持ちも代弁するようにテオロに問う

「ああ、取られた粗だな」

倉の前にはモロロ芋などが入った俵が積んであったのだ

もしかして…又ワンギが？

エルルウは優しくかった幼なじみを思い出した。そしてそれにハクオロも考えついたのか

「何で、あ！もしかしてほらエルルウの幼なじみって言う又ワンギが」

と言うが途中でテオロが首をふり遮った

「アンちゃん、アンちゃんはお人好し過ぎるぜ。エルルウならともかくアンちゃんは昔のあいつを知らないで、よくそんなことが言えるよな」

エルルウはずきりと胸を痛めた。本当に、昔は彼も優しくかったのだ。昔から意地悪なところもあったし、偉そうな物言いをしていたふしもあるけれど、それでもエルルウの手をひいて歩いて、守ってくれと言った笑顔は嘘じゃなかったはずだ

「でも、エルルウは信じてるんだよね？ なら僕も信じるよ」

ハクオロはにつこりと何の曇りもない笑顔でそう言った

凄く嬉しかった。又ワンギはハクオロに対してとても失礼なことを

平気で言ったのに、それでもエルルウが信じるなら信じると、そう言ったのだ

それだけエルルウを信用してくれているのだ。とても、嬉しかった。けど同時に少し悲しかった

ハクオロは信じてくれるのに、又ワングを信じきれない自分と、やっぱりエルルウの期待を裏切る又ワングが、悲しかった

「……はい」

「ま、エルルウの気持ちは分かるしアンちゃんのリ屈も一応分かった。だがな、あいつはもう昔のあいつじゃねえんだよ」

「……」

分かっている。昔は、あんな風に村を貶めるような言い方をしたりしなかった

変わってしまったのだ

「にしてもさっ、又ワングじゃないならなんで戻ってきたんだろうね？」

エルルウの雰囲気を感じてかハクオロが明るく言った

「さあてね。ワシらを哀れんだ優しい方が恵んでくださったんじゃないやろうて」

「は？」

いつの間にかハクオロの後ろにいたトウスクールはそう言つと、テオロを始めとする集まっている男たちに倉にいれるよう指示をする

「トウスクール、これ誰がやったか知ってるの？」

「ワシが知るわけなからうて」

「……うん……そうだよ」

ハクオロの反応にエルルウは首を傾げる

何かしら？ ハクオロさん、何か知ってるのかな？

「ふわああ……」

アルルウはもう飽きたのか欠伸をした

「ああ、アルルウもう戻って寝なよ。いい子は寝る時間だよ」  
「……ん」

「ほらエルルウも」

「あ、はい……ハクオ口さん」

素直に戻ろうとしたが止まってハクオ口を振り向いた。今の話の流れは少し聞き捨てならない

「ん？」

「それって私も子供ってことですか？」

「え、いやそんな他意は……。というかほら僕、エルルウと同じくらいかむしろ世話になりっぱだし下かなみたいなの？」

慌てるハクオ口の態度にエルルウは逆に少し不審だと感じるが

「……別にいいですけど」

と流す

ハクオ口さん、何だかんだ言って私のことすぐ子供扱いするのよね。そりゃ、時々は……頼れる年上な雰囲気があるけど、でも私と年はそう変わらないんだから、止めてほしい

「ん？……あはっ」

ふいにエルルウの背を急かすように押していたハクオ口の手が止まり、聞こえた笑い声にエルルウは振り向いた

しかしハクオ口が顔を向ける先には特に何も見えなかった。ただいつも通りの山の姿

「？　どうかしましたか？」

「ううん。行こう」

ハクオ口はそう言って微笑むとまたエルルウの背を押した

## ユズハの病

クスリ

すでに何度ハクオロが足を運んだかは分からない

ユズハはハクオロと初めて会ったころの、本当に今にも消えそうなか弱い笑みとは違い、かすかにだが生命の灯を感じる微笑みをみせるようになっていた

「あは、でさエル」

「ハクオロ、もう帰るぞえ」

話を続けようとするとうすくがやってきた

「あ、もうそんな時間か」

「トウスクル様：行かれるのですか？」

「うむ、またすぐに来るでな」

トウスクルが優しくユズハの頭を撫でる

「じゃあユズハ、またね」

「はい」

トウスクルと交代するようにしてハクオロはユズハの頭を優しく撫でる

「…はい。また…。ユズハも…お見送りします」

「だ、駄目だ駄目だ！安静にしているんだユズハ」

起き上がるうとするユズハをオボロが慌てて制する

「でも…」

「ユズハ、頼むからあまり兄を困らせないでくれ」

「…はい」

……僕はユズハの兄じゃない。だけど、だけど大切な友人なんだ

「トウスクルは先に帰っててよ。僕はオボロに…大事な話があるん

だ」

「あ？ 俺は別に話なんて…」

「ね？」

「…ふむ、分かった。夜明けまでに帰るんじゃよ」

「分かった」

トウスクールが奥に消えたのを見てからハクオ口はゆっくりとオボ口に向き合う

「？ 何だよ？」

「ユズ八のことだよ」

『ユズ八』と聞いてオボ口は表情を変える

「……何がしたい」

「決まってるよ。ユズ八を自由にしておけろ」

「黙れ：これは俺とユズ八：家族の問題だ。他人のお前が口を挟むな」

「僕はユズ八の友達だ。友達のことを思うのは当たり前だよ」

「俺はユズ八のことを思って言うてるんだ。こうするのがユズ八のためなんだ」

「日の当たらない部屋で何も、友達なんて簡単な言葉も知らない。それがユズ八のため？」

そんなの認めない。あんな風にユズ八をベッドに縛りつけることがユズ八のためなんて、あんな顔をさせることがユズ八のためなんて、認めない

たとえユズ八が仕方ないと言ったって、認めないんだ

「黙れ！ ユズ八はな、強い陽射しに弱いんだ」

「たとえ陽射しによってその命が短くなっても、自由に生きたいと思うんじゃない？」

それに陽射しに弱いって言っても、受けた途端溶けたりするわけじゃない。むしろ病気と言ったって適度な陽射しは体にいいはずだ」

「黙れ黙れ黙れ！ 貴様にユズ八の何がわかるんだ！」

「君がユズ八を外に出さないのは：君のしてることを知られたくな



いだけなんじゃないの？」

「っ！」

「お前は義賊なんて自分自身を誤魔化して、他も誤魔化して、最後はユズ八をも誤魔化すつもりか！　それがユズ八のためと言つつもりか！！」

「黙れ！！」

虫の鳴き声が、耳障りに鳴いていた声が消えて代わりにチリチリと身が焦げるような圧迫感に、ハクオ口はぐっとその発信源であるオボ口を睨む

悪寒が走り本能のままにハクオ口は後ろから襲いかかる圧力に身を屈める。同時にハクオ口の首があつた位置に一閃が横切る

「っ…はあっ…」

人の首を撥ねるのに何の迷もない真っ直ぐな太刀筋。ハクオ口が避けなければ確実に今頃ハクオ口の頭は転がっていただろう

「やるな。今のを避けたのは貴様が初めてだ」

言いながらオボ口は二本目の刀を構える

式刀流！？

そして間を開けずにハクオ口に容赦なく刃を落とす

「あっ…」

式刀流ということに氣をとられ、ハクオ口の反応は一瞬遅れた。それは、オボ口にとっては致命的な一瞬だ

「がっあ！」

どんなにハクオ口が早かろうと、一瞬遅れのハクオ口の腕にはしっかりとオボ口の刃により傷を刻まれた

しまった…。オボ口相手に氣をとられるなんて、死ぬようなものだ。次に氣をそらせば…死ぬ

腕に焼鏝を押しあてたような熱さが広がり、そして急速に冷たくなっていく

指先の感覚は無くなる。ぼたりとあふれた血がやけに重く地に落ちていく

「今ならトウスクール様に免じて許してやる。さっきの発言を取り消して、地にひれ伏せ」

ハクオロはゆつくりとオボロに見せるように傷を舐める

「はっ、こんな傷舐めれば治るさ。それより『さっきの発言』？

それって、お前が『ユズ八』と言う名の愛玩動物を飼ってるってことをか？」

「殺す」

静かに宣言したオボロは音もなくハクオロに飛びかかる。しかしハクオロは慌てずに、先ほどすすった血をオボロの目に吹きかけた

「ぐあっ！？ 貴様！」

オボロは目を擦るがそんな簡単には拭えず、依然としてオボロの視界は赤く何も見えない

「血つてのは意外と粘着力があるのさ。擦っても簡単には拭えないよ」

むやみに剣を振り回すオボロにハクオロは狙いを定めて、強く、一撃を決めた

たった一撃、けれどオボロは倒れ、もがき立ち上がるうとするがまた倒れてしまう

「くっ…なんだ…体が言うことを……この程度でっ…！」

「面白いでしょ？ 世界がぐるぐる回ってそのくせ体は泥みたいに重い」

「き、貴様！何をした！」

「ちよつと、『揺さぶった』だけさ。君は感覚が鋭いから尚更キクでしょ？。しばらくは立てないよ。こういう戦い方だってあるってことを憶えておくんだね」

オボロは吠えるがやはり動けない。しかしハクオロも目眩を感じてふらつく。腕からは血がしたっている

無茶しすぎた…か。でも僕は、間違っただなんて思っただけ。正しいかなんて分からないけど、後悔なんてしない

「気はすんだかえこのバカタレ共」

その時、トウスクルのいつも通りの怒ったような呆れたような声がした

「少し染みるえ」

言いながらトウスクールはハクオ口の傷に液体を塗る

「っ！！？」

どこが！ どこが少し！？ え、なにこれ詐欺？

「ほれ、これで二人とも手当は終わりじゃ。全く、バカなことしおつて」

「あはは…ごめんねトウスクール。ありがとう」

オボロはじつと口をつぐんでいたが、やがて口を開いた

「分かっていた…言われずとも、分かっていたさ」

それはそうだ。オボロは何より妹、ユズハのことを優先して考えている。ユズハの命が望みか、考えないわけがない。その結果に命を選んだからって、望みを叶えたいと思わないわけがない

ユズハも分かっているから従うのだろう。だけどハクオ口は嫌だった。自分勝手だと知っている。ただハクオ口自身がそんな二人を見るのが嫌だった。それだけだ

「若様！」

オボロの部下であるドリイとグラアが走ってきた

「ユズハ様が！」

「トウスクール様お願いです！ ユズハ様を助けてください！」

3人は一斉に走りだしながら二人の話を聞く

「若様が出られてからすぐに熱がでて」

「どんどん酷くなってくみたくてもう意識が…」

ユズハの部屋に乗り込むとユズハはぐったりと息も絶え絶えに、普段以上に虚ろな目をしていた

「くそ！ なんでもっと早く言わなかった！」

「すみません！　ですが若様の姿が見当たらずに……」

「くそ！　ユズハ……ユズハ！　これは……ユズハから光を奪った……くそ！」

オボロが手を握るが何の反応もない。トウスクールは黙ってユズハを触診する

「トウスクール様！　お願いです！　どうか！　どうかユズハをお救いください！」

土下座をするオボロにトウスクールは険しい顔をしながら

「このトウスクール、命にかえてもこの子を見捨てるような真似などせぬ。これを見るがええ」

と言って自身の首飾りの玉を割り、中から紫色の粉をだした

「琥珀<sup>コウハ</sup>を粉末にしたものじゃ」

ハクオロの知識と異なる粉末にハクオロは首をひねる

琥珀にしては色が変わらない？　紫色の琥珀？

「紫琥珀<sup>ムイ・コウハ</sup>というものじゃ」

分からずにハクオロは見分けがつかないドリイグラアに尋ねると、どちらかは分からないが神妙な顔で

「それってまさか……その一欠片で一生遊んでくらせるっていう、あの紫琥珀」

と言った

なんでそんなものを……トウスクールが持つてるんだ？

トウスクールは普段ハクオロが見ているエルルウの手際とは比べものにならない、素早く無駄のない手つきで薬を調合しそこに紫琥珀の粉末をいれ、オボロに渡す

「ユズハに湿らせるように飲ましておあげ」

「はい」

優しい、壊れものを触るような優しい手つきでオボロはゆっくりゆっくりユズハの口に薬をいれる。段々とユズハの呼吸は収まり、はた目にも普通に眠っているようになった

「峠は越したようじゃな」

「ありがとうございます！ トウスクール様！」

「しかし…あのまま逝った方が楽だったかも知れん」

「なっ、何を！」

「よくお聞き。ユズハのこの発作は、これだけではおさまらないよ。二度三度と、何度だってこの子の命がある限り、この子は苦しみ続けるんだ」

「しかしこの薬があれば…」

「すぎるようなオボロにだがトウスクールは首を横にふる

「紫琥珀は高価じゃ。ワシの持つてるぶんではあと数回が限度。その時は、覚悟せい」

オボロはぼたぼたと涙を流す

「そんな…。とても素直で、優しくて、虫一匹殺したことのないこの子に、いったい何の罪が…っ！ くそ！ くそおっ！！」

涙はシートを濡らす。ゆつくりとユズハが目を開けた。ハクオロはさっとオボロの口に手をあてて黙らせる

ユズハには、知らせられない。まだこれからなんだ。これからいくらだって楽しいことはある。なのいきなりそんな…そんな希望を奪うようなことは言えない

「あ…」

「気分はどうじゃ」

「トウスクール様…？ お帰りになられたのでは？」

「！…ちよつと忘れ物しちゃってさ。話こんでたんだ。起こしてごめんね」

憶えてないんだ。発作を起こしたことすら。じゃあ尚更、教えられないよ

「ハクオロ様…いえ、ユズハは、大丈夫です。とっても…気分がいんです。こんな気分、久しぶり」

「そうかい。じきによくなるからね」

「うん。大丈夫。すぐに元気になるよ。治ったら何しようか。やりたいこととかある？」

「ユズハは…思いつきり走ってみたいです。いい香りのするお花畑の中を、思いつきり」

嬉しそうに言うユズハに、オボロは涙が止まらない。だがそれでは困るのだ。ハクオロはユズハに気付かれないようにオボロに耳打ちする

「笑え。ユズハに悟られるな。ユズハのことを思ってるんだろ？」

悲しませたくないんだろ？」

「…は、はは…はしゃぎすぎて…転ぶなよ」

「ふふ」

ユズハは楽しそうに、さっきの苦痛の顔が夢だったように、綺麗に微笑んだ

「トウスクール…僕って駄目なやつだよ」

「なんじゃ？」

帰り道で、オボロと別れてからハクオロはそうこぼした

「オボロには、偉そうなことを言いながら…」

本当にユズハの意思を尊重したいなら、全てを話して選ばせるべきだ。なのに僕は、表面だけを取り繕って…最低だよ

「ハクオロ、物事に、答えなんてないんじゃ。正しいとか正しくないとか、そんなものは所詮他人が後から判断したにすぎん

じゃからな、とにかく後悔をしないように、みな精一杯生きるんじやよ」

「……」

「後悔しとるか？」

「…いや、後悔は、してない」

もう一度今日をやり直したって、きっと僕はオボロに喧嘩を売って、ユズハには隠すと思う

「ならええ。ワシとて万能ではない。じゃから毎日、一生懸命に後

悔しくないように生きてる。長く生きたが、まだ答えなんて一つも分  
かりはせんよ」

「…そっか」

「ああ」

大丈夫。僕らは、生きてるんだ。明日死ぬかも知れない。そんなの  
は誰にだって言える。僕だって明日崖から落ちたりして死ぬかも知  
れない

ただユズハはその確率が高いというだけ。同じなんだ。だから、同  
じようにすればいい。同じように、自由に生きればいいんだ

日常になった日々。集落の姉妹編（前書き）

久しぶりに更新します

最近はおさなく『が滞ってますが、中々手がまわりません  
少しずつ更新したいと思います



## 日常になった日々。集落の姉妹編

エルルウは朝ごはんを作るとハクオ口の部屋に入りハクオ口を起こす  
「起きてください」

「……？」

エルルウに揺すられて起き上がったハクオ口は目を擦る

「美人になったね」

「……え！？」

「……待つて！ ハクオさんはいつも寝ぼけまくるんだから、真に受けちゃダメよ私！」

「にしてもアルルウ、しばらく見ない間に大きくなったねえ。まさに三日会わねば刮目なんたらってやつだ」

「……やっぱり……」

エルルウはハクオ口の寝ぼけっぷりにいつものことと言えため息をついた

「……ハクオ口さん、寝ぼけてないで起きてください」

「ん？ 何が？ 僕起きてるよ。そろそろ晩御飯の時間だし帰ろうよテオ口。ソポクが待つてるんじゃない？」

「わかりましたから、朝ごはんにしますよ」

手をつかんで起き上がらせると素直に立ち上がるハクオ口。そのまま手を引けば普通に歩くし話し方もはつきりしていて目も半分あいている

「ありがとうエルルウ」

何処からどう見ても半目なこと以外起きていて、寝ぼけているのも演技なのかどこまで本気が分からない

「……起きてます？」

「勿論だよオボ口」

「誰ですか……まあ村の誰かでしょうけど」

最近人数が増えたばかりなのでエルルウに全員の名前はまだ分から

ない

「おにーちゃん、起きた？」

アルルウがとてとやって来た

「いつも通りよ」

「アルルウが連れてく」

アルルウがエルルウとは反対のハクオロの手を掴み、さつさと居間に連れて行く

力無く握られていたエルルウの手はほどけた

「ちよっ…もう」

エルルウが肩をすくめながら居間に行くとハクオロが定位置に座り、アルルウはハクオロの膝の上に座っていた

「んー、おにーちゃん起きて、ごはん」

アルルウがハクオロの朝食を器に盛り渡すとハクオロは半目のまま受け取る

「ん…ありがとうございます」

「アルルウはアルルウ、お姉ちゃんじゃない」

「ん…美味しいよアルルウ。アルルウはアルルウなんだ…アルルウはアルルウでエルルウはアルルウでトウスクールはエルルウ？…よくわかんないや」

「…おにーちゃん」

「ん？ どうしたのアルルウ？ あ、おでこから角がでてるよ」

ハクオロはえい、と言いながらアルルウの額を人差し指で押す

「あれ…ない」

「最初からない」

ハクオロさん…いつもどんな夢見てるのかしら。人を見間違えるのはいいとして、頭の中にストーリーもあるみたいだし

「あれ…？ 成人するまで角はとれないんじゃない…」

「ない」

「そだっけ？」

本当に、時々淒く気になる

だがハクオロは目を覚ませば寝ぼけていたことは綺麗に忘れる

「いただきます」

「おかえりなさい、あ、それ爆発するから気をつけて」

ハクオロの向かいに座り自分も朝食をとろうとするとハクオロにそう言われた

意味がわかりません

「ご忠告ありがとうございます」

「いやあ…アルルウ可愛いなあ。しかも二人に増えてるし」

増えてません！ ……はあ、寝ぼけてるから無駄だと分かってる…分かってるけど、ツツコミたい！ ああもうハクオロさんたら！  
どうしてそう意味不明なのよ！

エルルウはもんもんとしながら朝食を食べた

「おにゅちゃん」

「…！ あ、おはようアルルウ。あれ、何で僕アルルウにほっぺた引っ張られてるの？」

ハクオロは目を半目から完全に開いてそう言った。アルルウはさらにハクオロの頬肉をひっぱる

「…ひはひ（痛い）」

「おおー」

さらにひっぱり、ハクオロのよく伸びる頬にアルルウは感嘆の声をあげた

「ひゃっはひゃ（やったな）？ ほひゃ（そりゃ）！」

「！　　」

アルルウの頬を伸ばしてハクオロは得意そうだ。アルルウはむっとして手に力をこめる

「っ、ひひゃひ（痛い）！ ほっ（ちよっ）、ひゃひへひはひ（マジで痛い）！」

アルルウが手を離すとハクオ口は両手で赤くなつた頬を涙目で押さえる

「うゝ…アルルウ、実は僕のこと嫌い？」

「好き。アルルウおにゝちゃん好き」

「…えへへ、僕も」

ハクオ口はいい子いい子とアルルウの頭を撫でる。アルルウは嬉しさから微笑む

おにゝちゃんはいつも優しいから好き。おつきくてあつたかいから好き。アルルウが赤くなるまでつねつちやっても、嫌いにならなくて頭を撫でってくれるから、好き

おにゝちゃんはすごく優しい。お姉ちゃんにもみんなにも優しいし頼られてたりする

でもおにゝちゃんはアルルウのおにゝちゃんだから、みんなに怒られてもアルルウと遊んでくれる

ちよつと自慢。でも、アルルウはおにゝちゃんが働いてる姿も嫌いじゃない

すぐに疲れてるのはちよつと格好悪いけど、オヤジやみんながおにゝちゃんを笑つても、おにゝちゃんを中心に動いてるのが分かる  
頼られてるおにゝちゃんは格好いいから、頑張つて働いてるおにゝちゃんは好き

「アルルウは可愛いなあ」

「ん。おにゝちゃんも、可愛い？」

ソポクが言つていたのを思い出し言つてみるとハクオ口は固まつた。アルルウは首を傾げる

「？ おにゝちゃん？」

「……僕は…僕は男なんだ。そりやまだテオ口に比べたら小さいけど…可愛いなんて、可愛いなんて…しかもアルルウに…」

おにゝちゃん、またブツブツ言つてる。このあいだ言われた時はすごく怒つてた。でもアルルウはおにゝちゃんに『可愛い』って言われたら嬉しいのに、おにゝちゃんは嬉しくないのかな？

「おにーちゃん、アルルウいけないこと言った？」

「……僕が悪いんだ」

「？」

「僕がこうして畑仕事をしぶって何かにつけ家でごろごろしてるモヤシっ子だから駄目なんですよ！　こうなったらアルルウに『筋肉だるま』って言わせるくらい働いてやるう！」

ハクオロは一方的に宣言すると鍬やら農具を取り出す

「おにーちゃん」

「じゃあ、行ってくるねアルルウ」

勢いはどこへやら、首から上だけにつこり振り向くハクオロにアルルウは手を小さく振る

「……ん、行つてらっしゃい」

おにーちゃんはちよつと子供っぽいけど、頑張つてて強くて優しく、アルルウの大好きなおにーちゃんだ

## 日常になった日々。日陰の兄妹編

トウスクールと一緒にいつもの待ち合わせ場所で待っていたハクオ口はオボ口らに気づくと気安く手をふる

「やつほー、調子はどうだい愚民よ」

「何様だ」

「ハクオ口様」

「貴様：酔ってるのか？」

不快に眉を寄せるとハクオ口は緩んでいた表情を戻した

「まさか。ユズハの様子は？」

「……今日は安定している」

オボ口にはいまだハクオ口が掴めなかった

見た目より子供っぽい言動。だけど悪いやつではなく、むしろ人のことばかり考えているのではないだろうか

仮面をつけていてもくるくる変わる表情からとても感情がわかりやすく、好感が持てる

しかもいざと言うとき（二度ばかり戦った時）には口調から違い、まるで別人のようにキリリとした顔で幼さはみじんもなく、武人<sup>もののふ</sup>の顔をしていた

「そっか、良かったあ。じゃあ行こう」

無邪気に笑うその態度にはオボ口が本気で命を狙ったことなどないようなもので、最初はひょうしぬけた

オボ口はハクオ口と出会ってからリズムを崩されてばかりだ

ハクオ口は大切な大切な大切な妹、ユズハに近づくから、ユズハをいとも簡単に笑わせるから、妬けた

けれど、楽しそうなユズハの様子と、敵視するのがバカらしくなるような能天気なハクオ口を見ては、オボ口からすっかりハクオ口を疑ったりする心はなくなった

むしろ、口にはださないが奇妙な安心感がある

絶対にこいつは裏切らない、と

「おい待て、目隠しをしろ」

「えゝ、いいじゃん。別に場所を知ったからって情報売ったりせめこんだりしないよ」

「目隠しをしろ！」

ドリイとグラアはクスクス笑う。オボロにだって、ドリイとグラアにだって、ハクオロがそんなことをしないのは分かっている  
律義にツツコミを入れるオボロに嬉しそうにハクオロは笑って

「冗談だよ冗談」

と言いなから自ら進んで目隠しをつける

もう必要は感じないが、ハクオロがつけているのにオボロから目隠しはなし、と言うのは何となくしゃくだった

「それでいい！行くぞ。トウスクール様、足元にお気をつけください  
ね」

「あはは…相変わらずトウスクールももてだね」

「ワシが若いころは、お前さんのような若い男が山ほど求婚にきたわい」

「あはははははっ！」

「爆笑するでない！」

「そ、そうだっ、失礼だぞっ」

肩を震わせてオボロが言うが、笑っているのは明らかだ。トウスクールは口元を歪ませる

「ふ…」

二人は杖で思いきり殴られた

「っ…！」

「ゝゝおゝゝっ！！ トウスクール！ 天才的な僕の頭脳がバカになつたらどうするのさ！」

「それくらいで変わるならとうに変わっておるわい」

普段の様子からは分らないが、ハクオロは見た目よりはずっと頭がいい

トウスクールから聞いた限りでは本人が言っている程度には優れているらしい。オボロは半信半疑だと言いながら、大半が真実だろうと思う

ハクオロの動きはけして自分より上ではなかった。けれど先に倒れたのは間違いなく自分

それは状況判断力によるものだと考えられる。土壇場での肝も座っている

その変わりようは普段が演技かと思いたくなるほどだ

認めたくはないが、こいつは凄いやつだ。器もでかい。きっと何かあってもすぐに笑って許すのだろう

笑うユズ八を見ては、最近思うようになった

こいつになら、ユズ八を預けてもいいかもしれない  
勿論すぐに打ち消す

だが、俺の中でこいつの存在がでかくなってるのは事実だ

「まったく失礼しちゃうよ。さ、オボロ、早く行かなきゃ日があけちゃうよ」

「…ああ」

仮面の上に目隠しをして笑う様は滑稽だけど、自分の顔に浮かぶ笑みは別の種類だと理解していた

「ユズ八、散歩しない？」

挨拶もそこにハクオロはそう言った

言っている意味がよくわからなかった。だっていつも歩くのは必要最低限だけだから

「…え」

きよんとするユズ八にハクオロはにこにこ笑顔でさらに誘おうとするとオボロが噛みつく



「貴様何を巫山戯たことを言っている！」

「あーうるさい。トウスクールもちよつとした運動ならいいって言うてたじゃん。もしユズ八が疲れても、おんぶすれば問題ないない！」

「おい待てこつ　…う……」

さらに言おうとするオボロの口のにトウスクールは何やら懷から出した布をあてた。オボロはバタリと倒れた

「え？　ちよつ、トウスクール何を…」

「こやつは疲れとるんじゃよ。ドリイグレア、休ませておあげ」

「は、はい！」

「？　ハクオ口様、何かあつたんですか？」

だが目の見えないユズ八には何が何だか分からずに首を傾げる

「い…いやいやいや、何でもないよ」

何でしょう…？　何だか楽しそう。ハクオ口様がいらつしやると、賑やかになつて楽しくなる

「さ、ユズ八、僕と一緒に歩かない？」

「…はい」

本当は、歩くだけのお散歩がどうして楽しいのかよく分からないけれど、でもハクオ口様が一緒なら、きつと何だつて楽しい

ゆつくりと手を繋いで外を歩く。ひんやりした空気が心地よく二人を撫でる

「寒くない？」

「はい、気持良い…です」

「良かった。疲れてない？　どうする？」

「ちよつとだけ…でも、もうちよつと、歩きたいです」

「よし、行こつ」

「はい」

ハクオ口様は何気なく言っているだろう『どうする？』という言葉。ユズ八は、何だか淒く好き

ユズ八はあんまり頭が良くないから、お兄様が決めてくれるのも嫌

だとは思わない。何よりお兄様がユズ八を大切に思ってくれてるのが分かるから

でも、それでもハクオ口様がユズ八に聞いて、意見を求めてくれるのは嬉しい

強引なところもあるけど、無理矢理じゃない。ユズ八を気遣ってくれるけど、対等だ

いまならユズ八にも分かる。これが『友達』なんだ

繋いだ暖かい手をユズ八はきゅっと握る手に力をこめる

「？　どうかした？」

「いいえ…ハクオ口様、あったかいです」

「ユズ八はちよつと冷たい、かな？　念のため上着はおっておきなよ。かけるよ」

「はい」

ハクオ口が手を離してさつと一枚脱いでユズ八の肩にかける。服にもハクオ口の熱が残っていて、暖かい

「ありがとうございます」

「どういたしました。また手を繋いでもいい？」

「…お願いします」

ユズ八はハクオ口様と手を繋ぎたい。ハクオ口様に触れるのが好き。でもきつとそれだけじゃなくて、目が見えないユズ八のために手を繋いでくれるんだ

「何言ってるのさ。僕が繋ぎたいからだよ。可愛い女の子と手を繋いで喜ばないなんてのは男じゃないね」

「ふふ…」

ハクオ口様に可愛いと言われると、すこしだけドキドキする。発作とは違って、嫌じゃないドキドキだ

「ハクオ口様、空の様子は…どうですか？」

「月が黄色に輝いてて、たくさんの星が綺麗だよ。見せてあげられないのが残念だ」

「でも…ハクオ口様のおかげで、想像できます…風を、感じます。」

とっても…素敵です」

「よし、じゃあもつと細かく説明しよう。真ん丸の月にはちよつと陰があつて、ボコボコだつて分かるくらいはつきり光つてて親指の爪の大きさだよ」

ユズハの頭の中に、月が浮かぶ

「うさぎさんは…いますか？」

「え…あは、うゝん、見えないけど、ユズハの中のお月様には住まわせてあげてよ」

「はい…。寂しくないように…たくさんにします」

「ユズハは、寂しい？」

「いいえ…お兄様もみんな…ハクオ口様もいます。ユズハは…幸せです」

「あは、駄目だよユズハ」

「え…？」

「これから僕がもつともつと幸せにしてあげようと思つてるんだからさ。幸せすぎて気絶しないように覚悟しなよ」

「…はいっ」

きつとハクオ口様も具体的に考えてるんじゃないと思う。だけどハクオ口様といれば、楽しくなる

前よりも今日が楽しい。ハクオ口様が来るたびに嬉しい。だからその言葉は嘘にはならない

ユズハ、ハクオ口様のことはお兄様と同じくらい好き

ユズハが握る手に力をこめると、優しく握り返された

ハクオ口の話はユズハの手に絵を書いたりしてどんどん続いた

ユズハがくしゃみをするまで、二人は並んで月光を浴びた

## オボロの戦い

「糞っ、俺としたことがなんてドジを……」

わーわーと騒がしい城から、オボロは慌てながら出てきた

そしてそのまま林の奥に消えようとした時、武人が一人、現れた  
「残念ですが行き止まりです。賊が忍び込んだとのことでしたが、  
皇城の倉に手を出すとは大胆なことを。手荒な真似はしたくありません。大人しく投降してください」

一瞬警戒したが、相手が一人と知ってオボロは忒刀を構えながらも  
た不敵に笑う

相手は槍でリーチも向こうが上だ。しかしそれがどうした。オボロ  
には、自信があつた

「たつた一人で、この俺を取り押さえられるとでも思っているのか  
？」

「あなた程度、私一人で十分です」

「……何だと？ 俺をみくびるなよ」

「それはどちらの話でしょう。もっとも、さすがにその逃げ足には  
追いつけそうにありません。」

ですから捕まりたくないなら逃げることです。背を向け、尾を巻い  
て、全力で、相応の哀れな悲鳴をあげながら、ね」

「巫山戯るな！ ……こい」

オボロは刀を構えて追つ手に隠さず殺気を向ける。相手は刀を向け  
られようとならん慌てることなく、オボロの体を一瞥して言い放つ  
「無駄なぜい肉のない均衡のとれた肉体。速さに重点をおいた戦術  
を得意としますか

感覚が鋭く、武人としての資質も悪くない。おそらくほとんど負け  
てない。自惚れ驕り高ぶるには、この上ない

そして驕りは、冷静な判断力を鈍らせる。相手との力量差を計れな  
いくらいに」

「弱い獣ほどよく吠えるってな」

「その吠える獣に、何をしり込みしているのです？」

こいつ…ただ突っ立っているように見えて隙がない…下手に飛込めば槍で串刺しか。だが…懐にさえ飛込めば

「……」

「……」

「！…ダアッ！」

僅かな隙をつき一気に間合いを詰める

「なっ」

だが、そこには既にそれを読んでいたかのように矛先が向けられていた

「くっ」

からうじてかわすが、槍の先が外套をかすめる

その瞬間

クン

槍に捻りが加わり、かかりがオボロの外套に絡みつく

そしてそのままオボロの体が一気に持ち上げられたかと思うと、唸りをあげ地面に叩きつけられた

地がめり込み、地響きが起こるほどの衝撃がオボロを襲う

「カハッ！」

「いい太刀筋です。とても素直で、先が読めるほどの」

「っ……」

「あれを食らってまだ意識が…」

少し驚いたようなベナウイだが、オボロはすでに全身が擦り傷や切傷で血にまみれていた

「名前を聞かせてもらえますか？ 私の名はベナウイです」

その名前には聞き覚えがあった。侍大将の一人、ベナウイ

「！…オボロだ。晒し者になる気はない。殺せ」

「……致命傷ではありません。運が良ければ逃げれるでしょう」  
覚悟を決めたオボロだがベナウイはあっさりとひるがえす

「な……待て！ 情けをかけるのか！」

「……私が手をかける価値ありません。そんなに死にたければ、  
そこで寝ていれば他の者が先を争いその首をあげるでしょう」

「待て！」

「それでは……いずれまた」

「待て！ 待てよ！！」

言うが早いかベナウイはさつさと闇へと消えた

静かな闇に包まれて一人残されたオボロは、地面に伏したままダン  
ツと地面を殴った

「っ……くっそおおおっ！！」

何度も殴る。手から血が出た。まだ、殴る

沸き上がる衝動は止まらない

苛立ち、憤怒。怒りで頭が爆発しそうだ。悔しくて悔しくて、目眩  
がする

「ッ！！」

オボロはただ、吠えた

「たっらら」

とても楽しそうにアルルウは身の丈に合わない、大きな大きな袋を  
振り回しながら森を進む

そのすぐ後ろをやや不安そうな顔のハクオロがついて歩く

「……本当に、やるの？」

「ん。頑張ったぶん、ハチミツ美味しい」

そう、二人は今日ハチミツ取りに来ていた

「はい」

袋を受け取る。役割はアルルウが煙でいぶして、ハクオロが直接ハ

チの巣を別の袋にいれるのだ

勿論、取る係のハクオロの方がさされるのは明白だ

「……アルルウ、ハチミツ好きだよね」

「ん。大好きい」

につこり笑うアルルウ。可愛い。とても可愛い。身内びいきを抜きにしたって可愛い

だからこそ、『兄』であるハクオロには期待を裏切れない

こ…これが愛か…

「分かつ…！？」

覚悟を決めて袋を被ろうとするとガサリと派手な音がして人影が現れる

反射的にそれからアルルウを抱きしめかばうが、すぐにそれが知ったものだを知る

「っオボロ！？」

「…あつ」

血まみれの彼は力尽きたのか膝をつく。さらに時間をあけずに騒がしい物音が近づいてくる

「！ オボロ、中へ」

大きな大きな袋にオボロをつっこみ、はみでる部分にはもう一つをかぶせる

「おいお前たち！」

間一髪、オボロを袋に詰めた途端に森から武器を持った兵士たちがやってきた

「何ですか？」

アルルウを片手で抱きしめながら聞くと、兵士たちは怪しい男が来なかったかと聞く

「来てませ…アルルウ？」

袖をひくアルルウに何事かと問いかける。ハクオロにとってむさくしい兵士たちと話すよりアルルウに対応するほうが大事なのは当たり前だ

「あっち」

アルルウは森のある方向を指差して言う

「あっちに、何かいる」

「あっちだな。行くぞ！」

兵士たちはアルルウの指差した方へと突撃する  
そっちって…僕らの目的地じゃありません？

アルルウを見ると平然と

「嘘じゃない」

と言われた。それはまあ、向こうに怪しい人物がいたなんて言っていない

「ぎゃー！ 隊長！ ハチが！」

「怯むな！ 突っ込め！」

ぎゃーぎゃーと悲鳴は段々遠ざかる

アルルウは生まれながらに策士だ。とハクオロが密かに汗を流したのは秘密だ

「オボロ、大丈夫？」

「…ああ…助かった。俺はもう…行っ…はあ」

「駄目だつて、凄い傷じゃん」

「俺はこれ以上…お前らに迷惑を…」

「怪我したままうるうるされるほうが迷惑だよ。せめて手当てくらい受けなよ。なんと稀代の薬師トウスクルの孫アルルウがいるんだからさ」

「ん…痛そう」

「…だが…」

迷うオボロにハクオロは切札をだす

「君にはユズハがいる。ここで死ぬわけにはいかない。そうだよね？」

「…すまん」

素直に折れたオボロにハクオロはため息をつく  
シスコンだなあ…ま、僕だってアルルウには弱いけどさ



「おばあちゃんやお姉ちゃんほど、うまくないけど…」

アルルウがきゅっと包帯を結びながら言う

「いや、だいぶ楽になった。ありがとう」

「…ん」

オボロはややよろめきながら立ち上がるが、止血をして休んだから顔色はマシになっている

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

「当たり前だろ。よし、俺もう行くぜ」

大丈夫。彼はとても強いから。だからあんな兵士には見つかること  
すらない

「……気をつけてね」

「ああ」

大丈夫

オボロを見送ってからアルルウとハクオロは顔を見合わせる

「大丈夫…？」

「大丈夫。彼は強いから」

大丈夫大丈夫大丈夫

本当は、送って行ってあげたい

でも、巻き込まれたら…もしアルルウたちまで巻き込んだら…

そう考えると、恐かった。だからハクオロは見送った

弱いのは自分だと分かっている。ただの言い訳だ。それでも万が一  
を思うと、恐い

「ハチミツ、とる？」

「…ん！」

血にぬれた袋は仕方ないのでアルルウはかぶったがハクオロはかぶ  
らずに行うことになった

.....  
超痛い

これは悪い夢だ…

「おら！ さつさと運びだせ」

「又ワング？ 何してんの？」

食物庫を出入りする兵士に命令する又ワングに騒ぎを聞き付けやってきたハクオロが尋ねた

「あ？ 見てわかんねえか？ 徴税だ」

ハクオロが大嫌いな又ワングだが顔を見ては殴りかかる趣味もないので仕方なく答える

「……あれ？ この前もしなかった？」

「増えたんだよ」

「ちよつと待つてよ！ 何でそうなるのさ！」

「うるせえ！」

「貴様！ 又ワング様に失礼だぞ！」

ハクオロに兵士が槍をつきつけるが又ワングがにやりと笑いながら止める

「はっ、しかし…」

「こいつは俺の獲物だ。てめえら手え出すんじゃねえぞ」

「はっ！」

兵士が敬礼するのを見てからム力ついたのを我慢するつもりはない又ワングは、ハクオロに殴りかかるがハクオロはひょいと避ける

「くっ！ この！」

元々動体視力がいいハクオロは農作業などで力もついたので又ワングの拳をかわすのは簡単だった

「人の話聞こうよ」

「うるせえ！ ム力つくんだよ避けるな！ 税増やすぞ！」

ぴたりとハクオロの動きが止まり又ワングは嬉しそうに笑う

「けっ、最初から素直にそうしてりゃ、いいんだよっ！」

以前で学んだ又ワングは仮面は避けて鼻を殴る

「ぶっ」

怯むハクオロにさらに腹をなぐりよるめくハクオロを蹴りとばし、地に伏すと何度もしつこくハクオロを蹴りつける

「くっ…あ…！」

痛い。だけど、避けたらみんなが苦しむことになる。偽善者を気取りたいんじゃないけど、今、ほんの少し我慢するだけで辛い思いをせずに済むなら、それがいい

「てめ！ アンちゃんになにすんだ！」

「うるさい！ 俺はこの藩主の息子だ！」

「はは、大丈夫だよテオロ。僕丈夫だから」

騒ぎながらも、ハクオロが制するので誰も手をだすことができない  
どうして又ワングはこんな酷いことをするんだろう？ 分からない。  
エルルウと昔は仲良しだったらしいのに、どうして？

前から疑問だった。どうして又ワングは、エルルウを泣かせるんだろう

僕に辛くあたるくらいなら構わないと思う。だけどどうして村のみんなにまでキツイ態度なのか分からない

だって同じ場所で共に努力して共に生活する、家族じゃないか

それとも、又ワングにはもう過ぎたことで、僕は又ワングを無理に家族だと思い込むことはないのかな？

正直又ワングには会う度に段々、エルルウと兄妹なら僕とも家族だ、と考えようとするのに無理がでてきた

悪いやつじゃないかと思いたいのに、どんどん僕の中で又ワングの評価が下がって、どんどん僕の中に又ワングに対する嫌な感情が出てくる

「っ…！」

痛い。だけど、耐えられなくはない

「な！？ ハクオロさん！？」

いつの間にかハクオ口の側にかけよってきたエルルウがハクオ口をかばうように又ワングに向かう

「う…エルル…」

「又ワング！ どうしてこんな酷いことをするの！？」

キツと睨むエルルウに又ワングは心底不思議そうに

「ああ？ 何言ってんだエルルウ？ 俺は藩主になる男だ。こいつらが俺のために働くのは当たり前だろ」

そう言う。エルルウは、信じられないとばかりに顔を若干青く染めて、問う

「…本気で、言ってるの？」

「？ ああ」

それに気付かずに頷く又ワング

「…止めて」

「は？」

「…止めて…これ以上したら…又ワングのこと、本当に嫌いになっちゃう」

囁くように、何より辛そうにエルルウが言うと又ワングは口をあめぐり開ける

「な、何でだよ！」

「……分らないの？」

「うるさい！ 良いから俺と来ればいいんだ！ こんな田舎くさいところは捨てる！」

「いやっ」

又ワングがエルルウの腕を乱暴に掴

「又ワング、止めるよ。エルルウは嫌がってる。またエルルウを泣かせたら、僕はお前を許さないぞ」

掴む前に、立ち上がったハクオ口が又ワングの腕を弾いた

「っ！ うるさいうるさいうるさい！ てめえ何様のつもりだ！ エルルウ！ いいから来い！ じゃないと粗を増やす！」

「…え…」

「止めるよ！」

「黙れっ！ エルルウ、お前が俺様のものになるなら税を減らしてやるよ。だから来い！」

「…本当に？」

いらいらした。そんなことを言い出す又ワングを嫌悪し軽蔑するし、迷うエルルウにだつて腹がたつのだ

「止めるよ！ エルルウ、止める。増えたって僕が払ってやる。そんな最低なこと、やめろ」

「っ…ごめんなさい」

すつと槍が向けられるが、ハクオロは冷たい目で兵士を一瞥する

「なんの騒ぎじゃ」

人波が引き、間をトウスクールが歩いてくる。ハクオロはゆっくり息を吐く

ああ、遅いよ。おかげで僕がでばっちゃったじゃん

「げっ…ババア…」

「まあたお前さんか。懲りないねえ」

「う、うるせえ！ 俺様は昔とは違うんだ」

「ああそうだね、昔はもうちいつと骨のあるやつだったさね」

「っ…」

「おい貴様！ 又ワング様に失礼だぞ！」

槍をつきつけられるトウスクールだが顔色も変えずに

「さつさと取るもん取ったら帰ればよかろう」

と言い、兵士がさらにトウスクールに刃を近づけ

「いつ」

ゴツツと兵士の頭に石が当たった。振り向くとアルルウが石を構えている

「おばあちゃんを離せ！ お姉ちゃんを離せ！ おにーちゃんをいじめるな！」

さらにアルルウの手にはあまるような大きめの石が投げられる

「いてっ…この、糞ガキっ！」

石を投げられた兵士が逆上してアルルウに向かい、槍を突きだす  
その刃は何の容赦もなく、アルルウを突き抜こうと進む

「危ないっ！」

ハクオロは間に合うかどうかわからなかったがとにかく体が動いて  
いて

アルルウを

ギュッと抱きしめていた

間に合った

ただそう思い安堵して、迫りくる痛みに覚悟した

ブシュッ  
！

肉が裂ける嫌な音がして、生暖かい何かが、ハクオロにかかっていた

「…え」

広場はシンと静まり返っていた

ハクオロとアルルウが目を開けると、見慣れた優しい一対の瞳が、  
二人の前にあつた

「トウスクール…？」

「おばあちゃん…？」

計らずとも同時に呟いた二人に、トウスクールは頷いた

「は、ババアか…」

兵士の毒づく声が響くように聞こえる

体中の血液が沸騰したような激しい怒りだった

世界が、色が、反転する

「おばあちゃん！　しっかりして！」

「あ…」

エルルウの声でハクオロは正気に戻る。怒りは消えないが、それよりトウスクールが大事だ

「てめ、何てことを！」

又ワングが血のついた槍を持つ兵士を蹴り飛ばす

「な、何を…」

又ワングはトウスクールの前で呆然としながら顔を真っ青にする

「ち…違うんだ。俺じゃない…俺のせいじゃ……っ撤退だ！」

又ワングは走りさったが、それを気にかける余裕のある村人はいなかった

「早くトウスクールを中に！」



## 武器をもて（前書き）

久しぶりの更新なのでおかしいところがあるかも知れませんが何かあれば直すのでご一報ください。

## 武器をもて

「おばあちゃんしっかりして！　すぐに薬を」

「ええんじゃよ」

トウスクルの傷は深く、血は止まるどころか布団にいれた今も床を濡らしていく

「でも」

「自分の体のことは自分で分かつとる。それより最後に…お前さんの顔を…よく見せとくれ」

「おばあちゃん…」

「やああ！　おばあちゃん死んじゃだめえ！」

「トウスクール！　駄目だ！　まだ…まだアルルウだつて小さいし、それに僕だつてまだ何も返せてないっ！」

「なら、二人を頼もうかの」

「違うっ。　そうじゃないよ…。二人を守るとかそんなのは…家族だから当たり前なんだ！」

「ああ…知つとるよ。じゃからわしも…そうした。なあに、わしはもう十分生きたさ」

「っ」

「あの人と出会い、ハクオロが生まれ、可愛い孫にみとられるんじや。わしの人生も…捨てたもんじやない」

「おばあちゃん、死んじゃ駄目よ。しっかりして」

「エルルウ…お前さんは死んだ姉さまにそっくりじゃ。ほんに…綺麗な人でなあ…」

ゆっくりゆっくり、トウスクールは言葉をつむぐ。ただ側にいることしかできない3人にトウスクールは微笑む。

汗を浮かべ、痛みからか離別の悲しみからか涙をこぼし、それでもトウスクールは優しい笑みを3人に向ける。

「おばあちゃあん」

「アルルウ…お前さんはな、若いころなわしにそっくりなんじゃ。ふふ…信じられんか？ わしだって昔は可愛い可愛いと可愛がられたもんじゃ」

ふ、と昔を思うように息をはいてからトウスクールはアルルウの頭から手を下ろす。その手をアルルウとエルルウは強く握る。

体から魂が抜け出さないように、強く。意味はないとしても、無意識に。

「『エルルウ』の名前は、姉様の名前じゃったんじゃ。お前さんらの名前は…そこからきたんじゃ」

「おばあちゃん…」

トウスクールが目を閉じる。

「おばあちゃん！」

「トウスクール！」

3人の声がかさなり、トウスクールは目を閉じたままで口を動かす。

「大丈夫…まだ、大事なことを伝えておらん。それを伝えなきゃ、ワシや死んでも死にきれん…よ」

少しずつ不規則になる呼吸にトウスクールは深く息をする。顔色は小さな灯りのもとで分かるほどに白い。

「よく…お聞き」

「いや！聞きたくないよお…言わないで、死なないでよ」

「エルルウ…」

僕だって、それでトウスクールが死なないなら、僕だって聞かないよ。でも…そうじゃない！

「エルルウ、聞けよ。ちゃんと聞けよ！ じゃないと…トウスクールが安心して逝けないじゃないか」

「っ…でも」

「お姉ちゃん…」

アルルウが片手でトウスクールの手を握ったままもう片方の手でエルルウに抱きつく。

「…ごめん、ごめんねアルルウ、アルルウも辛いのに」

アルルウはふるふると頭をふる。

「いいかい、時には…言い争うのも、ええ…喧嘩してもええ…だけど、お前たちは唯一の肉親さね。…そうやって…力を合わせて…いつまでも…仲良くするんだよ」

エルルウとアルルウは何度もこくこくと頷く。

「ああ…いい子だ。…ハクオロ」

「なに？」

「私の心残りは、この子たちじゃ。なあハクオロ、どうかこの子たちの側にいておくれ」

「いるよ。家族だもん。ねえトウスクール、あなたも勿論、家族だよ。大好きだよ。愛してる。ごめん、何も返せなくて」

「いいや…返してもらったよ」

「え」

「ありが…とう。これからも…仲良く…するん、だ…よ」

「トウスクール…」

「エルルウ…アルルウ……元気で、な…」

「おばあちゃんっ！」

「トウスクールっ！」

3人の呼びかけに、トウスクールは応えなかった。

「う、あああああっ」

アルルウが泣きじゃくり、エルルウに抱きつく。エルルウもアルルウをぎゅっと抱きしめる。

「う…うう…エルルウ！」

「…はい？」

ハクオロは涙をためながらトウスクールを迂回して二人に抱きついた。アルルウは真つ赤な顔で泣きながらハクオロとエルルウに体をこすりつける。

エルルウはアルルウとは対照的に、真つ青な、トウスクールのように青い顔で、悲しみに染まった瞳で眉をよせて、困ったように無理矢

理笑みをつくる。

「泣いてもいいんですよ。私は、大丈夫ですから」

「泣くよ！ 悲しいもん！ でも違うんだ、君も、泣くんだ」

「え…？」

「我慢しちゃ駄目だ。今泣かなきゃ、余計辛いんだ。泣いて」

「私…は…」

「それに僕だつて、君が我慢してたら…泣けないよ」

「……っ」

ぼろり、エルルウの頬に涙が伝った。

「あ…れ？ 駄目、私は…お姉ちゃんなんです。だから…」

「じゃあ僕は…君のお父さんでもお兄さんでも弟でも、何でもいいよ。でも、そんなの関係ないよ。家族なんだから、支え、あわな…  
きや、駄目、なんだ…」

もう…我慢できない。

「うああっ…ううっ」

ハクオロはせきをきったようにボロボロと涙を流しだした。つられてように二人はさらに声をあげて泣き出す。

「うああああっ」

数十分後、ようやく落ち着いて泣き疲れた二人を眠らせてから、ハクオロは家を出た。勿論ハクオロだつてたくさん泣いたし、疲れたけれど、やらなきゃいけないことがあると分かっていた。  
夜の涼しい空気が泣いて熱い体を、目を、心を冷ます。

トスッ

ハクオロの側の木に、弓矢がささった。

あいつが呼んでる。

「行かなきゃ……」

大切なことだからなおさら、自分の言葉で、しっかり伝えねばならない。

ハクオ口は迷わずに足を動かした。

「……やほう、待った？」

「トウスクール様は、どうなった？」

殊更軽い調子で声をかけたが、待ち人　オボ口は冷たく率直に尋ねた。

「……逝かれた」

ガツンッ

何の加減もない、ただ全力のオボ口の拳がハクオ口をとらえた。

「くあ……」

「聞こえないな。もう一度言ってみろ」

「っ……逝かれた！　トウスクールは、死ん」

二度、三度とオボ口の拳がハクオ口に向かってくるが、ハクオ口は避ける素振りすらせずに無抵抗にオボ口の拳を受ける。

「聞こえないんだ！」

「ぐうつ……っ、死んだ。死んだんだ！」

殴られて倒れるハクオ口の襟首をオボ口が掴んで無理矢理立ち上げさせる。

「貴様っ！　貴様がいながら何をやっていた！　貴様が、貴様が殺したような」

「そうだ！　僕だ！　僕が殺したんだ！　……好きなだけ、殴れよ。

僕は……僕には何もできなかった。僕が殺したようなものだ。僕が……」

「……俺は、お前が憎らしい。ユズハは、お前のことばかり話す。その時は、いつも笑っている。部屋の外を気にして、ドアが開けば嬉しそうにして……けど、お前じゃないと分かればすぐに暗い顔にな

る。お前が憎い。殺意すらわく」

「…オボロ」

「けどな、お前がユズハを笑顔にしているのは事実だ。俺自身、お前には救われた」

オボロはぎりぎり歯を噛み締めて怒りで顔を真っ赤にしたまま、悔しそうに呟く。

「認めたくはないが…俺はお前に惹かれてた。そんな、そんなお前がいながら…どうしてあの人があんな死に方をしなければならんだ！ 答える！」

「……」

「答えるよ！ ……頼むから…何とか言えよ…っ」

「…ごめん」

「っ……もういい！」

オボロは乱暴にハクオロから手を離す。ハクオロは、もう一度小さく謝罪した。

どうにもならないと分かっている、自己満足と分かっている、謝る以外に何を言えればいいかわからなかった。

自分よりずっとトウスクールと付き合いの長い相手で、けどあの姉妹のように泣くように言える相手でもない。

何よりハクオロは気づいていた。オボロの顔には悲しみよりずっと強い、怒りが支配していると。

「…あんたに、頼みがある」

オボロはハクオロに背を向けてそうきりだす。

「…なにかな？」

嫌な予感がする。

彼はいつだってまっすぐで、情に厚くて義理がたい。

「お前にしか、頼めない。預かってほしいものがある」

「……なに？」

「ドリー、グレア」

「はい」

草むらからドリグラが駕籠かしょを二人で担いで出てきた。

「オボロ…君は」

「何も言っな」

オボロは駕籠を丁寧に開けて中からユズ八を抱き上げた。ユズ八は静かに寝息をたてている。

「ユズ八を…頼む」

「…行くの？」

「トウスクール様は俺たちには親同然。俺は…親を殺されて黙っているほど、お人好しじゃないんでな」

「そんなことしたってトウスクールは…」

「分かっている。喜ぶどころか、けして俺を許さないだろうな」

それでも、行くと決めたのだろう。まっすぐにハクオロに向けるオボロの視線は、もうハクオロが何を言っても揺るがない。

だから、彼はユズ八をここにつれてきたのだ。

「それとドリイとグラアもだ」

「若様!？」

聞いていなかったのか驚くドリグラはオボロに駆け寄る。

「そんな！ 僕たちも連れて行ってください！」

「駄目だ。これは俺の問題だ。お前らはここで辺境の民として暮らせ」

「そんな!？」

「とにかく、ユズ八を頼む」

ハクオロは渡されるユズ八を何も言わずに優しく抱く。

オボロはすつと装束を身につけて顔を隠す。そしてドリグラを置いて闇に消える。

僕は…、僕はまた、見殺しにするのか？

「ハクオロ様…」

「ドリグラ…僕は…」

省略して呼ぶハクオロだがそれはもう言っても直らないから気にす



るな。

「どうするんだ？」

「…え？ あ？」

振り向くと、集落の人々がいた。声をかけてきたのはテオロだ。

「テオロ…みんなもどうして」

「ん…」

「お、と。ドリグラ、ユズハをひとまず駕籠に」

ユズハが身じろぎをしたのでハクオロは慌ててドリグラに頼む。

「はい」

「よし。それでみんな…どうしてここに？」

「どうするんだ？ 村長」

「どうって…村長？ え？ なんで…」

どうして僕を…そんな名称で呼ぶの？ それは、トウスクルの…。

「トウスクール様が全てを任されたんだ。これからはハクオロが村長だ。」

「そうだよ。あたしらは、ハクオロについていくよ」

「な…」

人々の言葉にハクオロは絶句する。

考えてなかった。次の村長なんて。しかも、それが僕だなんて。

「ついて…」

「あんちゃん、あんちゃんが一言言ってくれればいい」

「一言…」

人々が何を望んでいるのか。それは分かっている。だけど…それを本当に、言ってもいいのか？

僕に、本当に責任がとれるのか？

だけど、確かに僕にだってある。トウスクルの敵討ちをしたいという気持ちだ。

「これから始まるのは…喧嘩じゃない。始めたなら最後、戦になる。覚悟は、できてるの？」

「当たり前だ」

「戦で被害を受けるのは何時だって弱い者だ。それを僕らで決めて…本当にいいのかな？」

例えば今も家にいるアルルウ。どこかの家で眠る話することもできない赤ん坊。彼らの意見は聞いてない。

それにここにいるけどソポクたち女の人も普段は頼れるけど、戦いとなると…。

「なんだい？」

ハクオ口の視線にソポクは強く睨みかえす。

「まさか、女子供が…なんて思っているんじゃないでしょうね」

「……それも、考えた。でもそうだね、子供だからって一概には言えない。アルルウなら喜んで乗り込むかも知れない。けど、歩けない赤ん坊は？ 自分の意思を伝えることもできないのに、戦火に巻き込まれるよ」

「…それは…」

ハクオ口の言葉に多少ざわつく人々。

なんてことを言ってから、すぐに言い訳を考える自分に気づく。

「なんて…ね」

「は？」

「…はつきり言うよ。危ない。人がたくさん死ぬかも知れない。けど、僕は行く。行きたい。僕を本当に村長というなら、信じてください。誰も死なないように頑張るから…」

「あんちゃん、分かっている。俺たちみんな、分かっている」

ハクオ口が回りをぐるりと見ると、人々は順々に頷いた。

「っ…倉を開ける！」

武器を、倉から武器を出すんだ！

人々の叫びが響く。



## 新たな始まり

「はあ……はあつ……くそつ、くそ！ 俺のせいじゃ、俺のせいじゃない！」

ハクオロが決意したところ、又ワングは庭で何かに脅えるようにうろろうとしていた。

「……へ、だ、だいたいあのババアがそう簡単にくたばるかよ。」

けど、ずいぶん血が出てたな。……いやまさか！ あのババアだぜ？ 殺したってしなねえよ。

自分に言い聞かせるようにぶつぶつと繰り返し呟きながら又ワングは意味もなく庭でうろついていた。

ふと、月に照らされて己に重なっている建物の影が動いた気がして顔をあげた。

影が動いたのではない、影が、大きくなっていた。屋根の一部分だけが、人型に。

「誰だ！」

振り向きざまに屋根の上を見上げると、そこには黒の装束を身につけた男が一人立っていた。

「貴様に名乗る名などない！」

男 オボロは刃を抜くと又ワングに襲いかかってきた。だがすぐに又ワングは転がるようにさける。

オボロは体勢をたて直し、一気に片をつけようと

「敵襲だー！！」

その時、オボロが侵入してきた方向から大きな声がした。オボロは思わず振り向き舌打ちをする。

勿論、その隙を見逃す又ワングではない。すかさず踵を返し奥へ逃げ込む。

「っ、待て！ ……ちっ」

又ワングは侵入したところの兵を殺しに行こうかと一瞬悩んだが、

すぐに又ワングを追いかける。

だがほんの一瞬で又ワングは建物に飛込み、オボロは見失い慌てて辺りを見回す。

「どこだ！ 出てこい！」

「ここだ。バカが、何処を探してやがる」

声に目標を定めるも、又ワングの隣にはササンテ、そして前には複人数の兵がいた。

「ぶひゃ、おみやあが入りこんだ鼠にやもか」

「ふんっ、何人いようが関係ない」

全員、殺すだけだ。

「にやも、ワシにおみやあごとき若造が勝てると思ってるにやも？

賢く優雅で気高く強い武人のワシに」

「はっ、愚かで下劣で臭みの強い肉、の間違いじゃないのか？」

オボロの挑戦的な口調に余裕たつぷりだったササンテは口元をひきつらせる。

「にやぶ、余興には丁度いいにやも。…やれ」

ササンテの合図で素早く兵がオボロを囲む。

「っ、はあっ」

オボロはけして弱くない。かなりの強さだし、この兵たち相手なら2対1だろうと負けはしない。だがこの人数　しかも統率のとれた兵　が相手となると楽勝とはいかない。

「はあっ」

襲いくる剣をかわし、片剣でそらせながら反対の剣で反撃を試みるも、数多の剣撃は完全には避けきれず、少しずつオボロの衣服を、肌を、傷つけていく。

「くっ…はっ」

キーン

一人の刃を弾き飛ばし、だが別の刃に阻まれる。

「はあ…はあっ」

息はあがり、体は重くなってきた。  
だがまだやれる。どれも致命傷ではないし、まだ剣を持っている。  
体があり、刃があり、殺意がある。

必要最低限、だが、これは最も戦場で必要なものだ。

「はああああっ」

オボロの刃が兵を貫く。

「オボロっ！」

ハクオロたちが門を突破し辿りつくと、そこには血にまみれ数人の  
兵士に囲まれたオボロがいた。

倒れている兵士もいるが、それでもまだ兵はたくさんいる。

「っ！？ バカ！ どうしてきた！」

どうして、だつて？ そんなの、決まってるだろ。

「若様！」

囲んでいる兵をドリグラの矢が射抜く。

「御無事ですか若様！」

理由なんて、決まっている。

「なんだよてめえら。揃いも揃って反乱かよ」

嘲笑じみた又ワングの言葉に、しかし誰も反論しない。

不気味なほど静かに睨みつけるハクオロたちに又ワングは唾を飲み  
込む。

不安になる又ワング。まさか、まさかだ。そんなことがあるはずが  
ない、と、否定して欲しくてたまらないことを言う。

「へ、ババアが死んだわけじゃあるまいし、大げさだな」

早く否定しろと、思いながら。

理由は、みんなオボロと一緒にさ。

だから、その言葉を否定する人なんていない。それが事実だから、ハクオロたちはここにいます。

「おい、何だよ。何か言わねえのかよ。てめえら何黙ってんだよ」  
ただ、人々は怒りを瞳にこめて武器を構え、じつと又ワングィらを睨む。

又ワングィの声が上擦り、汗が滲む。

「ウソつくな。あのババアが、ババアが死ぬわけないだろ」

「この状況が」

ハクオロが、口を開く。その瞳は、やはり静かだった。

「この状況が分からないほど、お前はバカなのか？」

そんなわけないよな。お前は、バカじゃないだろ。

冷たい、冷たい瞳だった。普段からは想像すらできないハクオロの表情に、又ワングィは反論しようとして、小さく呟く。

「そんなバカな…あのババアが死ぬはず………エルルウ」

そして又ワングィの視界に、愛しい娘が映る。

「エルルウ、エルルウツ、嘘だよなっ」

エルルウは、又ワングィと目を合わさない。

暗い暗い目でうつ向いたまま、又ワングィに答える。

「おばあちゃん…もう、動かない。何も、言わない…」

エルルウは涙はもう流さなかったが、声は震えていた。

又ワングィも、エルルウのこの態度には言い訳も反論もできないようだ。

「っ、そん、な…」

だが、ハクオロたちの重い空気なんて気にしていない、全く場に合わない笑い声が宮全体に響く。

「ぶひゃひゃひゃひゃ！」

ハクオロどころか兵たちも一斉に声の主を見る。

高らかに、ササンテが笑っていた。おかしそうに、見下したように。「にゃも、おみやあらお笑いにゃも、死にぞこないのババア一人に

反乱にやもか」

その言葉にオボロは目を細め切りかろうと

「やめろオボロ！ 一人で突っ込みすぎだ。下がれ！」

したが、ハクオロの叫びにオボロは動きを止めた。だがすぐにでも飛びかかりそうな体勢のまま怒鳴るように言い返す。

「ほっといてくれ。こいつらは、この俺の手で…っ」

「オボロッ！ …これは喧嘩じゃない。戦なんだ。今は、僕に従え」  
「…っ、分かった」

オボロは齒を食いしばりながらも頷き、ハクオロたちの元まで下がるうとする。

それを邪魔しようとする兵には、ドリグラ二人の矢が襲う。

「雨よ雨、赤く染まりし雨よ、若様を妨げしものたちに降り注げ！」  
「！」

「内に眠りしふむかみよ、若様を妨げるものたちを貫け！！」

無数の矢は容赦なく兵に降り注がれ、ハクオロたちが、動く。

「追え！ あとはあいつらだけだ！」

「はあ、はあ」

「あんちゃん、あんちゃんはここで休んでろよ」

「う…うん、ありがとう」

テオロが男たちを率いて宮に突撃していく。すでに刃を向けてくる兵士はいない。

あとは又ワングとササンテだけ。油断はできないが、9割が終わった。

「はあ…、ふう…オボロ、大丈夫？」

「どうしてだ…」

「ん？ 何？」

ハクオロはオボロに近寄り笑いかけるがオボロは険しい顔のまま言



葉を続ける。

「自分が何をやったのか分かってるのか？ 朝廷はすぐにでも俺たちを討伐するために軍をおくってくるぞ」

「だろうね」

「軍を 国を倒すか、皆殺しにされるか、二つに一つだ。俺は…お前にユズ八を頼んだんだぞ。どうして…っ、俺一人が死ねばそれで済んだ話なのに！」

「オボロ」

「…何だ」

「怪我は大丈夫？」

オボロは何を言ってるんだと言わんばかりに眉をよせたが、ハクオロが真顔で聞いてくるので答える。

「…ああ、大丈夫だ。少なくともお前よりはな」

「なら遠慮はいらないね」

「あ？」

ガッ

オボロがハクオロの言葉の意味を理解するより、ハクオロがオボロを殴るほうが早かった。

「な、何を」

油断したのもありふらつくオボロをハクオロは睨む。

「本気で、オボロだけが死ねばすむと？ それで？ 僕は残された

ユズ八に言い訳しろと？ 巫山戯るな」

「そ、それは…でもだからお前に」

静かにだが反論を許さない迫力で言われオボロは視線をおとす。

「黙れ！ よく聞けオボロ、お前は生きろ！ 少しでも申し訳ないと思うなら生きろ！ 死んでもいいだなんて逃げだ！」

「だ、だが…許せなかったんだ」

「…まだ殴りたいの？ それとも、みんなが許していると、本気で思ってるの？」

「……」

沈黙があたりを包む。

どれくらい時間がたったのか、宮内から音が消えていき二人の場所まで音が届かなくなった。

「……あ」

沈黙を破ったのは、ハクオ口だった。

「オボ口…朝だ」

「…長かった、な」

オボ口はそつと息を吐いて気が抜けたのか地面に座りこむ。

「…お疲れ様、オボ口」

「ああ……」

「でもね、もう死んでもいいなんて言っちゃっ駄目だ。ユズハもみんなも、僕だって、君が死んだら悲しいよ」

「ああ……分かった。お前は、言い出したら聞かないからな」

「それはオボ口の方だよ。僕の柔軟さを知らないの？ 体をそらしたら頭に足がつくんだよ」

「知るかよ」

「ま、試したことないんだけどね」

「はっ…バア力。……少し、休んでいいか？」

「大丈夫だよ」  
すう

眠ったのだろうか？ しかし気配に聡いオボ口だ。まして戦いの後、近寄ったり騒げばすぐに目を覚ますだろう。

ハクオ口は少し離れてそつと腰をおろす。

さて…又ワングヤササンテはどうなったのだろう。すでに手傷を負わせたし得物は落として行った。くわえてあれだけの人数なら多勢に無勢。

ましてこちらは勢いづいていたし、味方の心配をする必要はないだろう。

「…はあ」

殺してしまいたいほど憎くて、実際にハクオ口は兵を殺した。しか

し兵が悪いわけではないと思う。

彼らが武器を向けてくるのも人を傷つけるのも殺すのも、仕事だからだ。楽しんでるやつがないとは思わないがまた全員がそうだとも思わない。

だけでもう止まらない。ケンカなんかじゃない……戦争が始まったんだ。人を殺して殺され殺して殺され殺して殺す。

とても嫌だ。考えただけでうんざりする。いますぐ村に帰って家にもって眠りたい。

……すっかりしろ。覚悟はもう、決めただろ。許さないと決めたのは、自分自身だ。

ただ……それでも殺すことは恐い。

血にまみれたまま己の腰にある扇を一瞥する。朝日に照らされる無傷ではないが明らかに大量すぎるほど服に染みている赤。

ぶるり

一度だけ身震いする

「はあ」また息が漏れた。生きるために、大切なものを守るために他者を傷つけて殺す。

殺しのその瞬間は高揚してるのか自分でも不思議なほど、自身の体が軽いのを感じた。恐怖なんてみじんもなく 殺すなど面倒なことは考えず ただ相手を潰すことだけを考えていた。

けれど終わってしまったえば何て後味の悪いことか。

自分が聖人君子だなんて思わない。必要があれば今回のように迷わずに殺すだろう。

だけどそんな自分自身が、少し恐ろしい。一体自分は何者なのか。恐ろしい殺人鬼であったならばどうすれば……考えても、意味はない。

太陽は、容赦なく朝を運んでくる。  
一日が再び始まる。昨日とは確実に違う今日が、訪れる。

## 新たな始まり（後書き）

だいぶ間が空きましてすみません。お待たせしました（誰も待ってないか）。

一応、オリキャラも考えてたりしますがどのタイミングで登場させるかすら決めてないうえ、ゲームの内容がうる覚えです。

もうしばらくしたら改めてゲームをしたいと思うのでまたしばらく更新はお休みます。

ただ、時間はかかっても最後まで完結させたいです。

では、後書きまで読んで下さってありがとうございます。

## 次の戦にそなえるべし

「言われた通り、この一帯の制圧は完了した。次は何をすればいい？」

落ち着くと共に怪我の手当てをするや否や、ハクオロたちは行動を開始した。

オボロの報告にハクオロは頷きながら口を開く。

「ここを拠点として陣を構えるよ。ここほど戦に適した場所は他にないからね。」

そのためにやることは山盛りだ。まずは人員の配置に物資調達。同時に破壊された箇所修復と補強。

それらを細かく指示し、ハクオロは難しい顔で付け足す。

「これからいつ敵襲があるかわからない。出来るだけ急ぐように伝えて」

「分かった。任せろ」

オボロも真剣に頷く。

戦いはまだ始まったばかりだと言うことを、オボロのほうを理解しているのかも知れない。

「ハクオロさん、お茶です。オボロさんも、どうぞ」

タイミングよくエルルウが盆に茶をのせてやってきた。

「ありがとう」

「俺もか？ 悪いな」

二人とも茶を飲む。

喉を潤すだけでなく、ほんの少しだけリフレッシュした。

さすがにぶつとうして戦って働いてと動いているので、疲労がたまっている。

「ところで、エルルウは寝てなくていいの？」

さすがに指揮をしてる人間が真っ先に弱音をはくわけにもいかない。だがエルルウはそんなこともないのだから、出来るなら休んでいて欲しいのが本音だ。

ただでさえ、あんなことがあつたばかりなのだから。

「…はい。何だか今は、動いていたい気分なんです」

よく見ると、エルルウの目が赤い。寝ないのでなく、眠れなかったのだろう。

しまった。今のは失言だったな…。あんなことがあつたばかりだから、寝れないんだ。

「そう…まあ、倒れないように気をつけなよ。エルルウは別に、テオロたちと戻ってもよかったのに」

テオロたちは一旦村へ戻っている。

物資を運ぶのと、トウスクールを埋葬するためだ。

だがエルルウは黙って首を横にふる。

少しだけ気まづくなるが、そこにオボロがエルルウに向かって改めて挨拶をする。

「初めまして…と言うべきか、トウスクール様にはずいぶん世話になった。こんな時じゃなきゃ、あんたにも話したいことがたくさんあるんだがな」

「はい…」

しかし明るい話題ではなく、つかの間沈黙がおこる。

「にやむ…おばあちゃん…」

するとハクオロの頭上からアルルウの声がして、一気に雰囲気は柔らくなる。

「あ、すみません、アルルウが」

エルルウはすまなさそうにしているが、ハクオロは気にしないでと言っ。

戦いの後、アルルウはハクオロの側を離れたがらなかった。何処に行くにもついて回り、今は肩車のまま頭にしがみつくようにして眠っている。

だが、それは仕方ない。最愛の祖母を失って不安なのだ。泣き出したりせずに、むしろ手伝いをしようとするアルルウは手間もかからないし、何よりその存在だけでとても楽になる。

アルルウに甘えられるのは、つまりそれだけ信頼してくれてるのだ。



だからアルルウに頼られるのは、ハクオロにとって誇らしくもあり、支えでもある。

さて、次は陣を構える前に組の編成も考えなければならない。

頭になる人を集めて打ち合わせを…ああ、それに兵糧や武器も早急に調達して

ぐら

「つと…」

一瞬、ハクオロの視界が歪み体勢が崩れたがすぐに立て直す。

しかし、側にいた二人が気付かないわけがなく、エルルウは心配そうに眉をよせる。

「少しは寝てください。ハクオロさんは本当はそんなに長く動ける体じゃ」

「オボロ、君のそこから武力と統率力に優れてる人を何人が選んでおいて」

だけど、それに甘えるわけにはいかないのでハクオロはあえて、エルルウの言葉を遮ってオボロに言う。

「それは構わないが…エルルウの言うように少し休んだほうがいい。顔色がよくないぞ」

「でも…」

顔色なんて、そんなことを言えば今この場に血色がいいようなものはいない。

疲れてるのは皆同じはずだ。

「言われたことはやっておくから、寝たらどうだ」

「このくらい大丈夫だよ」

突っぱねるハクオロにオボロはため息ながらにエルルウに

「寝室まで強制連行してやれ」

と言う。

「どうやらこの男は自分の立場というものを理解してないらしい」

理解している。そう反論しようとするが、オボロはハクオロの肩をつかんでエルルウに押す。

「いいか？ 統括してるあんたに倒れられたら、俺たちは総崩れだ。現状が分かったなら後は任せろ」

「でも…」

それでもハクオロは反論しようとした。だが

ぎゅ

控えめに握られた服の裾につられてエルルウを見ると、真剣な顔でエルルウがハクオロを見つめていた。

「エルルウ……はあ。分かったよ。」

やれやれ、駄目だな僕は。エルルウにこんな顔をさせちゃ、それこ

そ本末転倒だ。

「じゃあ……」

「うん、休むよ。アルルウもちゃんと寝かせてあげないといけないしね」

オボロに見送られてハクオロはエルルウについて行く。

「兄者は次の戦いに備えてゆつくり休んでいてくれ」

と最後にオボロは言った。

ん？ 今何か不自然な単語があったような……？  
……疲れてるな。

「暗いので気をつけてくださいね」

エルルウについて行き、案内された奥の部屋にはすでに布団がひいてあった。

「ありがとう。アルルウ、下ろすよー」

「ん〜？」

さすがにこのまま寝るわけにはいかないのでおろすと、アルルウは寝ぼけながらも布団にもぐりこむ。

「こらアルルウ、そこはハクオロさんの寝床…ダメってば！」

エルルウが注意するがアルルウはすでに眠っている。

「まあまあ、何ならエルルウも一瞬に寝ようよ」

「な！？　ね、寝ません！」

そんなに否定しないで…冗談なのに。

「ふわぁ…」

あ、気がぬけたからか、急に眠気が…。

ハクオロが布団に入るとエルルウが掛布をぽんぽんと整えてくれた。

ああ、何だろ。凄く懐かしい。

きつと遠い昔、誰かが同じようにしてくれたんだろう。

たまつてた疲労が一気に解放されたかのように、体が鉛のように重くなる。

「  
」

エルルウが子守唄なのか何か唄を歌いだした。しかし、すでにハクオロには何を言っているのかよく聞こえない。何となくリズムが分かる程度だ。

でもこの歌…聞いたことがあるような…

ああ、そうか……………

何かに思いあたったハクオロだが、すぐに意識は暗闇へと落ちていった。

宮廷にて、主であるインカラ皇に呼ばれた男　ベナウィは御前に行き頭を垂れる。

「お呼びにございますか、聖上」

感情のこもらない静かな声にインカラ皇はキセルを口から離し、煙を出す。

「ぶはあゝゝ！」

そしてにやにやと笑みを浮かべながら答える。

「おみゃゝの呼ばれた理由、もう分かつてるにやも？」

「叛乱の件に、ございますか？」

ベナウィの答えに満足したのかインカラ皇は声を上げる。

「にやも！　これからすぐにやつらを討伐してくるにやも！　一人残らず皆殺しにやもよ！」

「聖上、おそれながら進言いたします。まずは彼らの言い分についてその者たちと話し合いをなさるべきかと。処分はその上にお決めになってもよろしいのでは？」

その平和的提案に、インカラ皇は眉をよせて戯言を言うなどばかりにまた煙をはく。

「ぶは〜！ 話し合い？ 巫山戯るにやも！ あいつらは朕の弟を殺したにやも。八つ裂きにしてもおさまらんにやもよ」

「ですが」

「くどいにやも！」

一喝して却下するインカラ皇。ベナウイは表面的には相変わらず無表情のままだ。

「聖上、御髪のお手入れ時間です」

その時、インカラ皇の脇から宮廷専属の理髪師の男が現れてそう言った。

するとインカラ皇は先ほどまでの不機嫌はどこえやら、にや〜と笑って尋ねる。

「にやむ〜ん。例のブツは手に入ったにやも？ 髪の為なら金に糸目はつけないにやもよ」

そう言いながらインカラ皇は自らのアフロの髪を撫でる。その発言にたまらずベナウイは口を開く。

「聖上、これ以上の散財はお控えになったほうがよろしいのでは？」

この國は今現在、お世辞にも財政豊かとは言えない。

「構わんにやも。租をあげればいいだけにやも」

簡単な話だと言うインカラ皇に、ベナウイはこの場にきて初めて感情を声に乗せて反論する。

「聖上、民あつての國です。民をないがしろにするような真似は」  
「にやもー！」

だが、インカラ皇にとってそんな話は退屈でくだらないものだ。

インカラ皇は全てを聞くまでもなく、手にしていた杯をベナウイに投げつけた。

「……」

ベナウイはそれを無言で受け止めた。額から血がつつと流れた。しかしインカラ皇はまだおさまらないのか、大きな声でベナウイの言を否定する。

「臣下の分際で朕に意見するにやもか！ 國あつての民にやも！  
そして國とは、朕のことにやも！ 朕が何をしようと朕の勝手にやも！」

鼻息あらくそう言い、インカラ皇は腹立ちまぎれにぶはあゝとまた大きく口を開いて煙を吐き出す。

「出すぎた真似を…お許してください」

ベナウイはまた感情のない声に戻ると謝罪した。  
インカラ皇はそれを一瞥すると不機嫌そつに鼻をならす。

「ぷふん、おみやゝのせいで気分がそがれたにやも。宴の用意をするにやもー！」

パンパン、とインカラ皇が手を叩いて命じると人々は一斉に宴の用意を始めた。

ベナウイは礼をしてから退出した。

「ふう……」

外にきて知らず息をはくベナウイに、大柄な男が近寄ってきた。ベナウイの部下であるクロウだ。

「大将、出陣の準備が出来やしたぜ。」

クロウはそう報告し、ベナウイの傷に目を止めた。

「その傷……」

「かすり傷です」

まだ拭っていないので血がついているが、事実血は止まっている。

ベナウイは視線をクロウから眼下へと向ける。

町並みは一見平和に見える。だが、人々は重い粗に苦しみ、さらに

「戦になれば、それだけ人々は貧困にあえぐことになります。しかし……」



これからさらに、生活を圧迫されるかも知れない。

戦をさけようとしてもしない今の聖上。逃げるのはいけないが、戦わずにすむのならそうすべきだ。

だが、腐敗していると理解しつつ、こんな國を護ろうとする私にはそんなことを言う資格もない。

ベナウイは表情は変えずに、静かに瞳に悲しみの色をぬる。

…護ることしかできないとは、所詮私も、その腐った果実に寄生する虫にすぎないと言うことか。

いや、その色は無力による虚無感か、それはベナウイ自身にもわからない。

「…出陣します!」

ただわかるのは、ベナウイたちはこれから叛乱者を殺しに行かねばならぬと言うことだ。

宣言したベナウイにクロウは元気に答える。

「ういっす!」

彼にとって戦いは戦いだ。強いものと戦いたい彼にとって他に意味はない。

だが彼にだって、敬愛する大将の憂いはわからないでもない。

しかしだからと言って肉体派のクロウではベナウイに適切な助言をできるとは思わない。

彼は黙って、ベナウイに従うだけだ。

二人は歩きだした。

## 次の戦にそなえるべし（後書き）

ようやく20話です。更新できましたが、いまさらながら現実にゲームをしてから小説の内容を考えているとめっちゃくちや遅いことに気づきました。ゲームをする暇がないと更新ができないという。とりあえず、あと1、2話くらいなら来月中に更新しますが、何かしないとなあ。

## 初めての我が俤

「オボロ、状況はどう？」

声をかけるとオボロはハクオロに紙を渡してきた。

「オヤジさんたちが戻れば配置はほぼ終わる。これが組の編成表だ。目を通しておいでくれ。ただ、先の戦いで損傷した 特に正門の修復には時間がかかりそうだ」

そこまで一気に言ってから、オボロは眉をよせる。

「すまない…俺が不覚をとりさえしなければ…」

ハクオロはあえてにつこり笑って明るく言う。

「自分をせめるなよ。大丈夫、オボロならすぐに挽回できるさ」  
「兄者…」

オボロは嬉しそうにつられて笑う。それに頷いて、ハクオロは門を見る。

「でも、ここまで見晴らしがいいのは不味いね。敵さんは早いと2日もすればくる。ここは最優先で終わらせないとね」  
「分かった」

二人で頷き合う。

敵は国だ。他の誰を相手するより、手数が段違いだ。まずは守りを固めなければ、味方を増やすことも難しい。

「おにちゃん！」

「おっと」

アルルウがやってきてハクオ口を抱きついた。

ハクオ口はとたんに真面目な顔を崩す。

「皆さんへのお弁当配り、終わりました」

「ありがとう」

遅れてやってきたエルルウにハクオ口はにっこり礼を言う。

「アルルウも、アルルウも手伝った」

おっと、勿論忘れてないよ。

「偉い偉い」

なでなで

優しく撫でてあげるとアルルウは心底嬉しそうに微笑む。

「んふ」

こちらまで嬉しくなる笑みだ。

しかしそろそろ、二人には言わなければならないことがある。

ハクオ口は撫でるのを止めてさりげなさを装って二人に告げる。

「で、二人とも、そろそろ戻って欲しいんだけど」

するとピタリと動きを止めて二人はハクオ口を見る。

「……」

「ここは戦場になる。わかるよね？」

無言での抗議にもハクオ口は引かない。

「……嫌です」

「だから危な」

「嫌です！」

しかしエルルウにしては珍しく声をあらげて自分の意思を口にする。怒ってる時ならともかく、普段はあまり声をあげない激しい主張に、ハクオ口はその隣に声をかける。

「う、あ、アルルウは、お兄ちゃんのお願ひ、聞いてくれる…よね？」

「……」

ぷいっ

しかしアルルウは無言でハクオ口から顔を背け、エルルウの手を握る。

「アルルウ…」

「おにーちゃんと、一緒」

まいったあ。無理矢理追い返す、じゃあ二人だけでも帰ってきそつな勢いだ。

「いいんじゃないか。側にいたいって言うなら、好きにさせてやったら」

横から言ってくるオボロにハクオロはむっとジト目を向ける。

「無責任なこと言わないでよ。オボロだって、ユズ八を連れてきたりしないでしょ」

「ああ、ユズ八なら連れてきた。よかったら後で話でもしてやってくれ。あいつも喜ぶ」

「はあ！？、な、何で！？」

オボロの予想外な言葉にハクオロは声をあげるが、オボロは平然と答える。

「あいつは兄者に委ねたんだ。兄者の側に置いておくのは当然だろ」  
「ちよっ…てゆうかなに？ その兄者って」

気になってはいたがあえて聞かずにいたことを聞いてみた。

「命を救われ、全てを委ねるんだ。兄と呼ぶのは当然だろう。」

え…？ それだと僕はエルルウを姉さんと呼ぶことになるんだけど…。

「それに…あいつが一緒に行きたいって言ったんだ。初めてなんだ。ユズ八が我が侘を言ったのは。初めは俺も断ったんだが、今回ばかりはいつも素直なユズ八も引き下がらなくてな」

ぬう…確かに、ユズ八にして見れば唯一の肉親の兄と離れるのは心細いよねえ。

まして自由に会いに来れる体でもないし…。

「今まで自分の気持ちを口にすることがなかったユズハが、はつきり言っただ。妹が兄の手から羽搏こうと言うなら、俺はあいつの好きにさせてやろうと思ったんだ」

言いたいことは分かる。分かるよ。けど一言言わせる。

ちよっ、いつからそんな物分かりがよくなったんだこのシスコン！  
ふう…いや、いい傾向だけどさあ。

「もし足手まといになるなら捨てても構わない。だから、好きにさせてやってくれ」

ここまで言われて、ノーと言えるだろうか？ 否！ 無理だ！ それにユズハの我が侂なら僕だって叶えてやりたいさ！

「わ、私だって」

ん？ どうしたのエルルウ？ そんなに赤い顔して。

「私だって、初めて我が侂言うんですから！」

「は？」

えー！？ エルルウまで何言ってるの！？

何気に可愛いんですけど！

「それに、ええと、わ、私たちが帰ったらご飯はおいしくなくなつて、洗濯物だつてたまつて汚れて臭くなっちゃいます！」

「ぷっ…くく、そりゃあいい。困ったな兄者、飯が不味いと士気が下がるぜ」



オボロが笑いながらエルルウの後押しをしてくる。

「あのねえ……」

二人からじゅつと真剣に見つめられ、ハクオロは内心ため息をつく。  
僕だって、食事が不味いのは困る。

「兄者の負けだな」

「ああ、分かったよ！ もう、二人ともいてください！」

やけくそ気味に言うと二人はにっこりと満面の笑顔に。

「はい！」

「ん」

「ただし！ いざって時は逃げるんだ。それだけは約束して」

それだけは譲れないとハクオロが真剣な顔でせまると、二人はにっこしたまま頷く。

「はい」

「ん」

本当にわかってんのかなあ？ 特にアルルウとか。は。トウスクルに怒られちゃうよ。何て謝ろうか。

ハクオロはやれやれと首をふる。

まあ、僕が頑張って守るしかないよね。

カンカンカン

「!?!」

カンカンカン

その時、鋭い鐘の音がなりひびく。

「て、敵襲―――!!」

見張りをしていた男の声が響き、皆が一斉に表情をこわばらせる。

「敵、ラクシャライ騎兵衆、数 八! こちらに向かっています」

早すぎる。

ハクオロの頭に一瞬抗議が浮かぶが、泣き言を言っている暇はない。

「ペリエライ弓衆、奴らの足を止める! 絶対に中へいれるな!」

オボロが素早く命じ、矢が幾筋も騎兵を狙うが、動きが速すぎる。矢はウマが通りすぎた後の大地に虚しく刺さる。

「駄目です! 速すぎます!」

ドリィとグラァが口を揃えてそう報告する。

「くっ」

ハクオロは慌ててエルルウとアルルウを下がらせかばつように前に出た。

その瞬間

「ハッ！」

馬にのつた騎兵たちをつれて突撃してきたベナウイが、ハクオロに襲いかかる。

「ッ！」

寸でのところで転がるように避ける。

その間にも兵たちはこちらの民たちと刃を交え始める。

キン

カン

という小気味よい旋律に姉妹はそつと互いの手を握りあい、ハクオロたちの邪魔にならぬようにと辺りを警戒する。

「兄者！」

「だっしやー！」

「ぐっ！ 邪魔だ！」

オボロがハクオロに駆け寄ろうとするが、クロウがそれをさせない。

「セイ！」

「おわっ！」

さらに槍をハクオロにめがけてくるベナウイの攻撃を、鉄扇で何とか防ぐ。

ぐっ、この人強い。

てゆーか、僕って基本的な戦闘力ではオボロより弱いんだけど。

参ったなあ。いつまで持つか。何とか、勝気が向いてくるまでは……

キーン

無機質な音がして、ハクオロの手から扇が滑り落ちた。

すぐに手を伸ばすが、それよりもベナウイがハクオロの喉元に槍をつきつける方が早い。

「くっ……」

守るとかって、無理じゃん。

「お覚悟……」

ベナウイの目が細められ槍が動く。

やられる！

「兄者！　がつ、退けえーッ！　ウオオオオオッ！！」

ハクオロの危機に気付いたオボロがすぐに助けに行こうと、得物をクロウにふりかざす。

「ハーツハツハツハー！」

だがクロウは笑い声をあげてそれをも容易く受けとめると、怒りをこめるようにオボロに強い視線を向ける。

「その程度でうちの大將に挑もうつてのか？ はっ、十年早エー！」

弾かれ、武器を手放しこそしないが体勢をくずられるオボロ。

「オラオラオラー！」

そこにできる隙に容赦なくクロウは槍でついてくる。

「ぐううつ」

「どうしたあ？ 足が笑ってるぜ？」

ニヤリと笑うクロウにオボロはギラギラした目で睨みつける。

振り上げられたベナウイの槍はすんでのところで止まった。

「…？ え、アルルウ？」

とつさに閉じた目を開くと、アルルウとエルルウの背中があった。

「エルルウまで…。二人とも、逃げるって約束しただろ！」  
「……」

ハクオロが怒鳴るが二人は動かない。一言も言葉を出さずに、手をつないだままベナウイを睨む。

「退きなさい、無益な殺生は好みません」

ベナウイがそう警告しても二人は動かない。

「……」

一瞬、膠着状態になる。

「でりゃああああ!!」

「!っ」

その時、ベナウイの背後から雄叫びと共に、テオロが武器をふりおろした。

ベナウイはそれを回避するも、必然的にハクオロたちから距離をとってしまった。

テオロはにいつと笑うと

「危機一髪ってとこだな。助けに来たぜ、アンちゃん!」

と言った。ハクオロは立ち上がりながら歓喜に声をあげる。

「テオロ! 皆! 着てくれたんだね!」

テオロの後ろには村の大勢のものたちがそれぞれ得物を手に構えている。

ベナウイはそれを見ると顔色をかえないまま

「総員、撤退します」

と号令を出し踵を返す。

「了解！」

「ぐっ」

クロウもあつさりとオボロを牽制してから去って行く。

「ま、待て！ 逃げる気か！」

「待った！ オボロ、追うんじゃない！」

追いかけようとするオボロにハクオロは待ったをかける。

「何故だ！」

オボロは立ち止まるがいらだたしそうに足踏みをし、今にも飛び出しそうなまま問う。

「頭を冷やすんだ。どちらにしても追いつけない。それにかなりの手練れだ。当然、二手、三手先を考えてるよ。そんな状態でムキになって追いかけたら、策にはまって返り討ちに遭うのが関の山だよ」

ハクオロが息をはきながらオボロに近寄り説明する。

「く」

「それに……あいつらとはまた、否が応でも戦うことになるさ。その時まで、待て」

理解はしても納得ができないオボロをなだめるようにそつつけ加える。

ギリッ

オボロは悔しそうに歯噛みしたが、無理矢理納得する。

「ならば、約束してくれ。あの男の首だけは俺に譲ると。あいつは、俺の獲物だ！」

「分かった。」

「よし。ならいい。いつまた敵襲があるかわからん！ 修復を急げ！」

オボロは踵を返して皆に指示を出す。

幸いにも今回の襲撃ではたいした怪我人はでなかった。

ハクオロはそれに安堵しつつもため息をつく。

まさか、こつも早いとは…テオロたちがもう少し遅かったら、既に決着はついていた。

この先、あんな手練れを相手にしなきゃならないのか。…気が重い。

さて、それはそうと…

「エルルウ、アルルウ」

振り向いて名前を呼ぶと、二人は先ほどの勇ましさはどこへやら、びくりと肩を揺らした。



「二人とも」

近寄ると怯えた視線を向けてくる。

ハクオ口はあえて恐い顔を作って

「とりゃ」

二人を抱きしめた。

「え？」

「助けてくれて、ありがとう」

本当に、いつだって僕は助けられてばかりだ。  
少しも恩を返せないうちからまた増えていく。

ぎゅっと強く腕に力をこめてから、そっと離して顔を合わせる。

「でもね、頼むから…もうあんなことは止めてくれ」

恐かった。二人を失うと思うと、死ぬよりもずっと恐かった。

「じゃなきゃ、僕を信じて二人を託したトウスクールに何て言えばいいのかわからないよ」

だけどそれを伝えるのは何故か逆に恐ろしい気がして、ハクオ口はそう言った。

「んだ。二人とも、気持ちはわかるがな。こういうことは俺たちに任せろ」

テオロが同意して少しだけ怒ったようにエルルウとアルルウの頭をぽんと叩く。

「はい…すみません」

「んう…」

二人の反省した態度にハクオロはふうと息をはいた。

はあ…本当に、こつちがショック死しちゃうよ。

「あいつら、追ってきませんぜ。」

逃げていたベナウイたちは森林地帯で立ち止まって振り向くが、予想外に追っ手は一人としていなかった。

「せっかくの罾が無駄になっちまりましたか」

「……どうやらこの戦、苦戦するかも知れません」

重々しく告げるベナウイにクロウは笑う。

確かに罾は無駄になったが、はまればよし、なくて元々だ。それに小細工はクロウの好みでもない。

「まさか、確かに武人もののふの腕はそこそこでしたか」

「いえ、彼ではありません。もう一人、おそらく彼が長でしょう」

しかしベナウイの言葉にクロウは驚き目を見開く。

「もう一人つて、大将がやり合った…まさか、あつちが親玉だったんですかい！？ あんなちびっちゃんのが！？ ……あちゃあ、間違っちまいましたか」

「わかりませんでしたか？ 彼らの動き…あれは戦に心得のあるもののそれです」

クロウのため息も意にかいさず、ベナウイは淡々と説明する。

「今のも、もし彼らがもう少し場慣れしていたらどうなっていたか」  
「まさか…」

笑い飛ばそうとするクロウだが、ベナウイが真面目な顔で言うので  
そうなのかも知れない、と言う気になる。

いつだってベナウイは、クロウが考えつかないようなことを考える。  
そして、それは大抵正しい。だからこそ、クロウはベナウイの意見  
に笑えなかった。

「いずれにせよ、このまま終わりはしないでしょう。戻り、体勢を  
立て直します」

ベナウイが言い、列をなして走り出した。

## 初めての我が俤（後書き）

題名が難しい…素直に話数だけにしてれば簡単だったかも。  
いやまあ、そんな、題名なんか気にしてない人もいるでしょうけど  
ね。

## 僕の友達を紹介します

「エルルウ、アルルウ、今いい？」

「？ はい。どうかしました？」

とりあえず一段落したのでエルルウとアルルウを連れてユズ八に挨拶をしに行くことにした。

途中で軽く彼女の説明をした。

「ユズ八は小さい時から寝たきりで、友達がいなかったんだ。だからってわけじゃないけど、僕らと年も近いし仲良くしてあげようね。」

「ん」

頷くアルルウの頭を撫でながら、さすがにこれはお節介かなとハクオ口は苦笑する。

「うん、まあこんなこと言わなくても、ユズ八もアルルウもみんな凄くいい子だし、余計なお世話かな」

「…は、はあ」

エルルウは曖昧に頷くが、ハクオ口の説明でもしっかり聞いてくれていたので大丈夫だろう。

何より、彼女は見ず知らずの僕を家族として迎えてくれるほど優しい。

だから本当に、余計なことを言っただかも知れない。

変に身構えさせてしまっただけは本末転倒だ。

それでもついでに言ってしまったのは、ユズ八は幸せになるべきとハク

オロが思っているからだ。

あんなにいい子なのに、今まで友達という言葉すら知らなかった。同情じゃないとは言いい切れない。だけど、誰より幸せになって欲しいというのは本当だ。

ユズハには、その権利がある。

三人が部屋に入ると、ユズハは瞳を開いた。

「ハクオロ様…？」

「やあ、気分はどう？　よく寝た？」

「はい…」

「どれどれ？」

ユズハの額に手を乗せて熱を計り、ハクオロはにっこり笑う。

「うん、熱もないね」

「ふふっ」

「ん？」

「何だか、お兄様みたい…」

「ええー…それはいかん。オボロにはデカイ口たたいたのに」

「でも…ハクオロ様の手…お兄様よりあったかくて…いい気持ち…」

「そう？　ありがとう」

そのまま撫でると、ユズハは嬉しそうに瞳を細める。

「…、ゴホン」

おっと、和みすぎて二人を忘れるとこだった。

後ろでエルルウが咳払いをし、ハクオロは撫でるのを止めてエルルウが挨拶しやすいようにスペースをあけた。

「ごめんごめん。ユズハ、気づいてるだろうけど、実は今日は紹介したい人たちがいるんだ」

「はい…気になってました…」

「この子は…」

「……」

視線をエルルウに移すと、何やらむすつとした顔をしている。

あれ、自己紹介してくれないのかな？

「エルルウ？」

「はえ！？ あ、その…」

「はじめまして…ユズハです…」

エルルウが何やらうつろたえているうちにユズハは体をおこしてそつと頭を下げる。

「あ…は、はじめまして。私、エルルウです。この子は妹のアルルウ」

エルルウの挨拶に合わせてアルルウがぺこつと頭を下げる。  
見えていないはずだがユズハはにこりと微笑む。

「トウスクール様と…同じ香り…」

「え？」

「色んな草と…温かな香り…トウスクール様と…同じ…」

「おばあちゃんと……」

その言葉に何を思ったか、エルルウは真顔で一度瞬きをし、にっこりと笑ってユズハに近寄る。

「よろしくね、ユズハちゃん。これからはおばあちゃんに代わって、私がユズハちゃんを診ますから」

そしてそつとその手をとった。

まるで誓いのようにしっかりと、まるで壊れ物に対するようにそつと、エルルウは両手でユズハの手を握った。

「はい…よろしく願いします…」

ユズハはそれに応えた。

そしてゆっくり手をとくとエルルウは笑顔のまま振り向く。

「ほらアルルウも……あ、アルルウ？」

「んう？」

しゃくしゃく

いつの間にかアルルウは置いてあった果物を勝手に食べていた。

「勝手に食べちゃダメでしょー！」

エルルウが呆れながらも怒って取り上げるとユズハがくすくす笑いだす。

「本当でした…」



「え？」

「ハクオ口様が…エルルウ様と…アルルウ様のこと…いっぱいお話してくれました。エルルウ様のこと…とても可愛くて…あたたかで…」

「そ、そんな…」

エルルウは照れているが、ハクオ口は内心冷や汗をかく。何故って、その言葉には続きがある。

けして悪口ではないが…本人が聞いたら怒りそうだ。ハクオ口はそつと逃げる準備をする。

そんなハクオ口の気も知らず、ユズハは続ける。

「愉快的子って…」

「ゆか」

エルルウの反応に気付かないのかユズハは続ける。

「この間の…体を洗っている途中…裸でアルルウ様と…家中追いかけてっこしてたお話…」

しかもさらに暴露した内容まで言われてしまった。

ハクオ口は言い訳をしようと口を開くが言葉が出ない。

「そ、それは…えーと…」

「とっても…楽しそう…」

ユズハはにこにここと、そうしめくくる。

ヤバイ。確実にヤバイ。

「何処へ…行くんですか？」

びくっ

ハクオロがそつと後ろに足を出したのにめざとく気づくエルルウ。  
ハクオロはあはは…と空笑い。

「い、いや…女同士は女の子だけの方が、いいかなあ…なんて。じゃあ、ユズハ、またね」

逃げる前にさつさと去るお詫びにユズハの頭をもう一撫でしておく。

「はい…」

ユズハは頬をそめて撫でられるままに頷く。

「おにゅちゃん」

「ん？」

「アルルウにも」

「おお、よしよし。アルルウは甘えん坊だなあ」

リクエストに答えて撫でる。嬉しそうに頬を緩める。

二人とも可愛いなあ。こんなことで喜んでくれるなら毎日してあげたいくらいだよ。

「……………」

つて、あ…え、エルルウ…。

「え、エルルウも、ほら…」

何とか機嫌を直してもらおうとハクオロは普段そんなに撫でないエルルウの頭を撫でる。

「……………」がぶっ

「ぎゃー！」

一瞬頬をゆるめかけたエルルウだが、怒りはおさまらないらしくハクオロの手に噛みついた。

ハクオロは情けなくも悲鳴をあげ、当初の予定通り逃げ出した。

パチパチ…

パチパチパチ…

ハクオロは自室で玉をはじいて計算をくり返しながら、首を傾げる。

「妙だな…倉の計算が合わない」

何度か計算したが、倉に置いている食料量が計算と報告が食い違う。消費量がこれくらいだし…兵糧の残りがかなり少ない。報告間違いつたって、この差はおかしいよねえ。

「お茶が入りました」

うんうん唸っているとすつとエルルウが室に入ってきて、そっと机

に茶を置いた。

「あ、ありがとう」

礼を言ってお茶を飲む。エルルウはちらりと書簡を見ながら首を傾げる。

「さっきから首を傾げてますけど、どうしたんですか？」

「んー、ここね、ここ。この数字が合わないんだよね」

「合わない…ですか？」

不思議そうなエルルウに苦笑する。薬師で家事万能なしっかり者も、やはり習わないことは駄目なようだ。

まあ、こういうのは読み方とかもあるからね。

「要するに、食料が予定より少なくなってるの」

「え！ そ、それって大変なんじゃ…」

「うん。だから今から倉に行って様子を見てくるけど…エルルウも行く？」

「はい、行きます」

やはりと言つか…台所を預かる立場として見逃せないらしい。

やる気満々なエルルウをお供にハクオ口は倉に向かった。

ぎい、と小さく音をたてて扉が開く。

食料倉はある意味一番重要だが、一番頻繁に人が出入りするので鍵はかけていない。

「さて…ん？」

「あ…」

なので倉に入ってそこにアルルウがいたとして、そうそう驚くことではない。

「こんなところで何してるの？ つまみ食い？」

「う〜」

だから気楽に聞いたのだが、何やらアルルウはそわそわして落ち着きがない。

「アルルウ？」

ポリポリ、モリモリ

「ん？」

アルルウのさらに奥、暗くて入ってきたばかりの二人にはよく見えないあたりから、何やら音がする。

クチャクチャ、バリバリ

気になるので奥を覗こうとすると、アルルウが通せんぼするように立ちはだかる。

何だろう？

薄暗くわかりづらいが、よく見るとアルルウの後方で巨大な塊が動いている。

「ねえアルルウ…その後ろの…ナニ？」

エルルウの問いかけにアルルウは首をふり、必死に背後のナニかを隠そうとするが、アルルウの数倍はあるそれを隠すのは不可能だ。暗さに慣れた二人の目に、段々とその塊は姿を露にする。

「……」

あれって…もしかして…

「…ねえアルルウ、どうしてここにムツクルがいるの？」

何か恐ろしいくらい冷淡に問いかけるエルルウ。その声に依然として食べていた塊…白地に黒柄のある巨大な四足動物は振り向く。

やっぱり…アルルウがかばう相手なんてそうそういないもんね。

「ヴオ？」

「ってデカっ！」

露になった姿は、ついこのあいだまで抱き上げていたのが嘘のような巨大な体躯の、ムツクルだった。

モリモリ、バリバリ

そしてまた食べ始めるムツクル。  
さっきからしてたのはものを食べてる音だった。

「アルルウ」

エルルウがアルルウの名前を呼ぶ。  
声も表情も平然としているが、だからこそかなり怒っているのがわかる。

「うゝ……」

「アルルウ！」

「！……ゴハン…食べさせてたの」

恐る恐るアルルウはエルルウを上目使いで見上げながら答える。

「ムツクル、おなかすいたって……」

「ゲフウゝ」

懸命に答える親<sup>アルルウ</sup>をよそに食べ終えたムツクルは満足とばかりにゲッ  
プまでした。

「……………」

ぷち

い、今の糸が切れた音は…。

ハクオロが恐る恐る（もはや誰の味方だか）エルルウを見る。

「あ、あなたってコは……」

「ヴ？」

震えた声にこめられた怒りに気付かないムツクルは、不思議そうに鼻を鳴らしながら顔をあげる。

「何てことするのッ！」

言葉と共にエルルウは大きく振りかぶり、思いっきり手刀をムツクルの鼻面に叩き付けた。

「キャフーン！」

図体に似合わない情けない声をあげて、そそくさとエルルウの背後に隠れたつもりのムツクル。

ああ…親に頼るといふのは心理的にはわかるよ。わかるけど、体的にはかなり無理があるよ。

「だ…だめ…」

だけどアルルウ自身、親である自覚があるらしくムツクルをかばうようにしてエルルウに向かって首をふる。

「アルルウも！ 食べ物が必要なことくらいよく判ってるでしょ！  
なのにどうしてこんな勝手なことをするの！」

「だ、だって…」

「だってじゃないの！」

「うゝ」

「ヴ、ヴルルル…！？ …キューン…」



叱られるアルルウを守ろうとムツクルも唸り声をあげようとするが、エルルウに睨まれただけでまた情けない声になる。

ふと、ハクオロはかつてテオロに言われた言葉を思い出す。

『どうも辺境の女は、年くう度に肝っ玉が太くならあ』

ああ…エルルウ、君はなんて見事な辺境の女…森の主も眼光で黙らせるとは…。

……すりこみって偉大だねえ。うん。そういうことにしておこう。

「ま、まあまあエルルウ。アルルウだって反省してるんだし、もういいんじゃないかな」

「ハクオロさん…でも、今は食料が豊かにあるわけでもないのに…」  
「勿論そうだけど、と…アルルウ？」

ハクオロが声をかけてエルルウが気をそらした隙に、アルルウが背後にまわってきた。

「ヴッ」

しかもムツクルも、だ。

アルルウはぎゅっとハクオロの服を握る。ムツクルはアルルウごとハクオロを押すように体をすりつけ、エルルウに見つからないようにしている。

いや、だからムツクル…隠れられてないと思うよ。

「アルルウ！ ハクオロさんの後ろに隠れないで出てきない！」

かばうつもりがなかったわけではないが、計らずとも身をていする

形でエルルウとアルルウに挟まれてしまった。

しかしいくら何でもエルルウの迫力に負けてアルルウを差し出すわけにはいかない。

勿論アルルウの行為は褒められたことではないが、自分が甘いものが食べたいとかじゃない。家族であり息子？のようなムツクルのためなのだから、その気持ちを汲んであげたいのもまた兄心なのだ。

「ま…まあ、そのくらいで…いいんじゃないかなあ…とか、思うんですよ？」

「…ハクオロさんは、アルルウを甘やかしすぎです」

せめるように、けどその表情は怒ってると言うよりは寂しそうで

「私だって…好きで怒ってるんじゃないのに…」

そして続けられた独り言のような小さな声に、ハクオロは慌ててどう言えばいいか考えながら口を開ける。

「あー、うん。エルルウは悪くないよー。アルルウがねー、悪いんだけどね？ けどほら、アルルウはお母さんとして頑張っちゃったわけさ、ね？」

後ろ手にアルルウの頭を撫でながら相打ちを求めるとアルルウは嬉しそくに頷く。

「ん。アルルウ、おかーさん」

「アルルウが母としてムツクルにご飯をあげようとしたっていう、その心は受け入れてあげたいなーみたいなあ」

「……」

「勿論勿論、エルルウ様のおっしゃることはわかりますよー？ け

どほら、僕の方もエルルウが怒ってくれるから、僕はアルルウを甘やかしちゃう、っていうか」

「……」

「…まだ怒ってる？」

表情は変わらないものの何も言わないエルルウにハクオロはそつと問いかける。

「……はあ。もういいです。アルルウ、もうムツクルを甘やかしちゃ駄目だからね。おかーさんだって言うなら、駄もするの。わかった？」

「ん。駄する」

許してくれる雰囲気アルルウはごくごく素直に頷く。

「全く…あとハクオロさん」

「はい」

「さっきのは逆に言うと、ハクオロさんが甘やかすから私が甘やかせないんですよ？」

「ん、そう言えば…そうも言えるかな」

「だからね、アルルウ」

エルルウは微笑んでぽんとアルルウの頭に手を乗せ、ゆっくり頭を撫でる。

「お母さんとしてよく頑張ったね。偉いわよ」

「…んふ」

アルルウは本当に嬉しそうに、目を細めてそれを受けた。



僕の友達を紹介します（後書き）

二つあるからタイトルつけるのに迷いました。

あなたの名を、教えていただけますか

「兄者、助力を求めるのは判るが、何も兄者自ら行かなくてもいいだろう」

すでにウマに乗って行程の半ばを越えていると言つのに、オボロは今更なことを言いだした。

「こんなことは俺がオヤジに任せればいい。なんなら各村長に招集をかけたっていいんだ。トウスクール様の後継者である兄者の呼びかけなら無視できないはずだ」

無意識だろうが上からのやつてもらって当たり前な目線に、ハクオロは苦笑する。

まあオボロは前から人の上にたつてたから、それが当たり前なんだろうけど…

「戦乱に巻き込むんだからね。こっちから行くのは礼儀だよ」

「兄者らしいな」

に、と何処か嬉しそうに笑われとりあえずにつこり笑いかえす。

それに、誰だつて来い、なんて命令されて無理矢理戦わせられるなんて、嫌に決まっている。しかし僕が言ったら断れない。ならなおさら、形だけでもお願いしたほうが気分よく動いてくれるだろうという打算がある。

勿論礼儀というのは嘘じゃないけど、まあ…こういう形をしっかりとするのも大事ってことで。

「う……く……」

「何をモゾモゾしてるの？」

「え！？」

エルルウがウマに乗ったままもぞしていたので声をかけたのだが、何やらひどく驚かれた。

「小便か？　なら待ってっからその辺で済ませてきたらどうだ？」  
「ち、違います！」

テオロのあけすけな言葉にエルルウは頬を赤くしながら否定するが、それなら理由はなんだろうかとハクオロは内心首を傾げる。

「ん？　んじゃデカイ方か？」

「もうっ、どうしてそうなるんですか！」

「いや、妙にソワソワしてっから、てつきり……なあ？」

それにしてもそのセリフはギリギリアウトだと思うよ。

言葉には出さずにいるとオボロが軽い調子でテオロの疑問に応える。

「違っつてオヤジさん。きつと長い時間ウマ（ウオプタル）に乗ってたせいで、股や尾の根本が痛くなったんだろっ」

ああ、なるほど。僕も村で初めて乗った時はお尻が痛かったなあ。

オボロの指摘に鈍い男二人は納得する。

喉元すぎれば、というもので平気になってしまえば以前の苦勞は忘れてしまう。

「こいつは慣れてないと結構辛いから。俺もガキの頃には経験した」

「あゝ、なるほどなあ」

「そつ、もう、二人で変なこと言わないでください!」

「別に恥ずかしがることでもないだろ」

「恥ずかしいんですつてば!」

恥ずかしいもののかな? 痛いなら遠慮しなくても、言ってくれば休憩はさむのに。

「痛い?」

「え!? あ…う…だから…や、その…」

ハクオロは心配して純粹に聞いたのだが、それでも恥ずかしいエルルウははいともいいえともつかない声をだす。

女の子だしウマに乗りなれてなくても恥ずかしいことはないのに。とハクオロは少しずれたことを思った。

「まあ確かに、貴重なウマを乗り物として使うのは滅多にねえからな」

「だから…」

「俺も得意とは言えんな。小回りがきかんし、あまり無理すると痔になったりするみたいだしな」

反論を無視して続けられる会話に思わずエルルウはオボロを睨みつける。

「うつ…」



さすがに言わない方がいいと気付いたオボロが口をつぐむ姿にハク  
オロは苦笑しながら

「じゃあ、ちょっと休憩しようか」

と提案した。

「あ、あの違います。ホントに違いますから」

「あのね、僕が疲れちゃったの。エルルウより体力がなくて情けな  
いけど、休ませて欲しいな」

「…はい。わかりました」

慌てて否定するエルルウにつこり笑ってお願いすると、エルルウ  
はやはり少し恥ずかしそうにだが頷いた。

ウマから降りて集まり、それぞれ適当な場所に腰をおろす。

「……」

「な、なあにアルルウ？」

ずっと無言だったアルルウは座らずにエルルウをじっと見つめ

っん

「あぐっ！」

とエルルウのお尻のあたりをつついて逃げた。

「こらあ！ アルルウー！」

叫ぶが痛いのか立ち上がらないエルルウに、アルルウは済ました顔で離れた場所に座りこむ。

「うゝ、もう！」

文句を言いながらお尻をさするエルルウ。

あれ、隠してなかった？ 普通にさするの？  
と思ったが、つつこむのは止めておく。  
誰もむやみに藪から蛇を出したくはない。

「どうぞ若様」

ドリイとグラアがオボロに水筒を渡す。

いつ見ても二人は息がピッタリだ。行動と思考もそっくりなのだと本人が言っていた。

じゃあ例えばじゃんけんしたら、あいこしか出ないのかな。

ハクオロは全く関係ないことを考えながら、オボロが飲んだあとに水筒を受け取り回し飲みをする。

「目的地までは、あとどれくらい？」

「あと少ししたら森をぬける。そこからもうちょい行ったところだ」

水筒を空にしたテオロが答える。

「おにゝちゃん」

アルルウがくい、とハクオロの袖をひいた。

「どうしたの？ 蜂の巣でも見つけた？」

「アレ、なんかヘン」

半分冗談半分本気で振り向くと、アルルウはびしと一点を指差す。

「アレ？ 変って何が…」

見えたものにハクオロは言葉を切る。アルルウが指差す先には、もうもと空へあがっていく煙があった。

「ありやこの先の集落辺りだな…何燃やしてんだ？」

気楽なテオロだが、ハクオロの心中ではテオロとは真逆のことを考えた。

まさか…

「兄者…確かにあれは変だ」

オボロも気がついたようだ。そう、ただの焚火にしては、勢いが強すぎる。

「みんな休憩終わり！ 行くよ！」

言うがはいかハクオロはウマにまたがり駆け出す。

「おい、アンちゃん！？」

テオロたちも不思議そうにしながら慌ててそれに続く。

もしかしたらあの煙の下では最悪の事態が起こっているかも知れない。  
だが……もし本当にハクオロの予想通りの最悪なら、それは有利に働く可能性が高い。

ぎり

思わず最悪すら計算にいった自分に腹がたってハクオロは唇を噛んだ。

まだそうと決まったわけじゃない。ただの焚火かも知れない。ただの考えすぎで杞憂かも知れない。

杞憂であればいいとハクオロは願いながら、ウマを飛ばした。

近づいて村の全貌が見えるにつれ、ハクオロたちは表情を険しくする。

「これは……」

入口にたどり着くころには大きな火は消えていたが、燃やしつくされた村は建物の残骸や肉の燃えた嫌な臭いでこみあっていた。

「うっ、うっ……」

「！ 誰かいるのか！？」

うめき声に近寄ると煙の奥から人影が現れた。

しかしどんなに見ても、人影としか言いようがない。

もはや手遅れなほど焼かれたそれは、男女の区別も難しい。

「……」

まだ力があるのか一歩踏み出し、そのまま人影はかくりと人形が落ちるように倒れた。

息がないのは明らかで、近寄ることさえ躊躇われた。

「酷い……」

エルルウが小さくもらした声は、全員の心内を表していた。

そう、これは、あまりに酷い。

「……、エルルウ、下がって」

「え……あ」

だからハクオ口は、勢いを徐々に無くしていく煙の向こうから現れた軍勢を睨みつけた。

「てめえらっ！ お前らがやったのか！？」

オボ口は現れた軍勢・ウマにのったベナウイたちに睨みつけながら問いかける。

「そうだとしたら、どうだと言うのです？」

「大将：？」

ベナウイの平坦な声音にオボロたちはますます怒気を強くするが、若干慌てたような疑問系の呼びかけに、ハクオロはついと視線を向ける。

筋肉質の大男・クロウはベナウイとは違いありありと感情を浮かべている。それは困惑だ。

「貴様あつ」

「やめろオボロ！」

それを察したハクオロは一瞬疑問が頭をよぎるが、すぐに頭を切り替えて激昂するオボロを制する。

今は、考えごとをしている場合ではない。

ハクオロはじつと、ベナウイを真っ直ぐに見る。

「今一度問います。降伏する気はありませんか？　今なら命だけは私が保証します」

ずいぶんと、甘い言葉だ。もしかすると彼は本気で言っているのかも知れない。

だが仮に言う通りにすれば極刑は免れないだろう。未だ反乱の意を示していないこの村が全滅させられていることから、国の方針は明確だ。

彼一人が何と言おうと変わりはないし、何より・

「悪いけど、それはできない。」

今更だ。今更、武器を下げるなんてできるはずがない。  
後戻りなんて、始めから誰も考えてはいない。

「僕は信じてくれる人にはできるだけ応えてあげる性分なんだ。よ  
つて、君の提案は却下だ」

にやりと不敵に笑うハクオロ。それにベナウイは目を細める。

「でしょうね」

それは静かで沈痛だが、どこか喜色の混じった肯定だった。  
彼の心境はハクオロにはわからない。ただ始まる戦いに、武器を構  
えた。

「ハクオロさん、アルルウが…っ」

今にも互いに飛びかかりそうな間際、小さく囁かれたエルルウの言  
葉にハクオロは視線だけ自陣に走らせる。

アルルウ…ああもうどこ行つたあの不良娘!!

「アルルウは大丈夫。なんたつて主が付いてるんだから。それより  
君は僕から離れないで。いいね？」

「っ…はい」

アルルウは心配だが、ムツクルがいるのだ。最悪逃げるくらいは容  
易い。

エルルウもそれは理解しているのか神妙に頷き、身構える。

「作戦会議は終わりですか？」

「…まあね」

気付かれて待っていたようだ、全く持って、舐められている。

「そうですか。では…参る！」

ベナウイの一声と共に、全員が動き出した。

「お前は俺が倒す！」

「あなた程度の腕ですか？ 甘いですね」

オボロの言葉にもベナウイは冷たく切って捨てる。

「甘いかどうか、試してみろっ」

オボロは怒りを抑え込みながら力をこめて誰よりも早く突撃する。  
しかしベナウイよりも先にオボロの前にクロウが立ち塞がる。

「どけっデクの棒！」

「なんだと鳥ガラがつ！」

軽口を叩きあいながら、オボロは剣を交差させる。

「あなたは、僭越ながら私がお相手しましょう」

「そりゃあ、光栄、だっ」

各々、自らの役割のもと戦いが始まり金属音などが鳴り響く。



かくして始まった戦いは拮抗を余儀なくされていた。

それはある意味当たり前で、むしろ軍属に対し即席反軍にしてはよくやっている方だろう。

しかし、それでは足りない。

その時 -

「グルオーーーーーッ!!」

咆哮が場を支配した。

あまりに巨大で豪快な雄叫びに剣撃が止み、一瞬場が静まった。

そして次の瞬間

ドシャッ -

- イン

「おにーちゃんの敵、やっつける」

崖の上から飛び下りて小さく地鳴りをたてながら、ムツクルにまたがったアルルウがど真ん中に着地した。

「グオーー!!」

アルルウの小さいながらも力のこもった言葉に応えるように、ムツクルは吠えると近くににいる兵に襲いかかる。

濡れないかぎりは無敵とかすムツクルが己より小さなウマに負けるはずもなく、騎兵は数を減らしていく。

さらに相手の殆どが騎兵だったのも幸いした。

ムツクルという森の主の存在に人間は勿論、ウマはより顕著に怯えを露にし、足並みを乱しだしたのだ。

「おいおいそりゃあ、反則だろ」

「くっ…引きます！ 下がりなさい！」

思わぬ大物の登場にクロウが焦りまじりに軽口を口にし、ベナウイは即座に反転の指示をだし、

隊列はやや乱れながらもハクオロ側と距離をとる。

アルルウとムツクルはそれに睨みつけながらハクオロを守るように近くに移動する。

「貴様、逃げる気かつ」

オボロは言葉を投げるが以前のように一人で突っ込みはしない。

「はい。今日のところは失礼します」

ベナウイは静かに、何の躊躇いも未練もなく退却を宣言する。それは引き際を見極めた優秀な大将であることを示している。

しかしそれと同時に、甘いともハクオロは思う。

ハクオロも人のことは言えないが、どうにも違和感がある。

「ですがその前に一つ…いえ二つ、聞かせてください」

引いてくれるのならば、ハクオロとしても異論はない。

十分な距離が空いているのを把握しながら、黙って質問を促した。それにベナウイは頷き、ハクオロに問いかけた。

「あなたは、自分のしていることが正しいと信じていますか？」

「当たり前だつ。義は、俺たちにある！」

正しくないと言う空気を含んだ質問にオボロが反射的に答えるが、ハクオロはそれを手で止める。

「兄者？」

オボロはそれにいぶかしげに呼びかけるが、ハクオロはオボロを放ってベナウイを見返しながら自身の答えを述べた。

「もし地獄ディネボクシリというものがあるなら、僕はそこに堕ちるだろうね」

自虐的とも言える発言にオボロたちは反応したがベナウイはやはり顔色を変えないまま、再び口を開く。

「私は侍大将の一人、ベナウイと申します。あなたの名を、教えてくださいませんか？」

「僕は、ハクオロだ」

「…その名、覚えました」

「ああ…じゃあ」

「ええ、また戦場でお会いしましょう」

そしてベナウイたちは去って行った。

視界から彼らが消え去り、ハクオロは肩の力をぬく。

なんとかなった…か。とは言え、今回は完敗だな。

「あいつらよくも…こんな酷いことができたものだな。兄者、どうしてあんなことを言ったんだ。地獄なら、あいつらこそふさわしい」  
「でも、あいつらがやったにしては様子がおかしいとは思わなかった？」

ハクオロの問いかけにオボロはん？と首を傾げる。

「様子？ 何がだ？」

「ベナウイ、だよ。彼が本気ならあんなものじゃない。てゆーか、僕が彼とマトモに戦って大丈夫なわけないし」

「兄者…そんな堂々と…」

「いやー、あはは。まあ、事実だしね。鍛錬はしてるけど、正直まだだっただけだし。」

「それにどちらにしても、こういうことがないように俺たちは動いてるんだ。なのに何で地獄なんだ」

「あー、まー、ね。それは完全に僕個人の問題と云うか…」

「今回のことで、戦局は大きく変わる。今までは傍観してた人も向こうから合流してくるようになるよ。なんたって、明日は我が身だからね」

言いながらハクオロは苦笑気味に笑う。

「なんて、こんな惨事も駆け引きとしてすぐに計算に組み込む。こんな僕が、正しいと思う？」

そしてハクオ口はみんなを一瞥してから苦笑を自嘲に変える。

「そもそも、僕が戦を始めなければこの人たちは死ななくてすんだ……そんな僕が、義だなんて……笑っちゃうよ」  
「おにーちゃん」

ぐ、とアルルウの小さな手がハクオ口の袖をひいた。  
その、不安そうな顔にハクオ口はぼんと頭を撫でた。

「アルルウ……ごめんごめん、なんか暗くなっちゃったね」

あー、しまったなあ。つい弱音を……。

「兄者……それでも兄者は、毅然としてなきや駄目なんだ」

オボロの言葉にハクオ口は薄く笑いながら顔をあげた。

「そうじゃなきや兄者を信じてついてくるやつらに示しがつかない。たとえ嘘でも……兄者は、兄者はっ」

「わかってるよ、オボロ。わかってる」

苦しげに言うオボロにハクオ口は笑いかける。

「わかってるから大丈夫。愚痴はこれで最後にするよ。僕には、迷ってる暇なんてないからね」

「おにーちゃん、肩車ー」

「はいはい、お…とと」

せがまれるままアルルウをのせる。

「兄者：俺にとっては、正しいかはどうでもいいんだ。俺は兄者についていく。たとえ間違つてるとしても、兄者にずっとついていく」  
「オボロ…」

真剣なオボロの告白じみた言葉に照れながら見回すと、今回着いてきてくれたみんなが、真剣に頷いてくれた。

「ははっ、困つたなあ。僕ってばモテモテだ」

ハクオロは、照れ隠しに笑いながら応えた。

最初から側にいたここににいる人たちにだけは、愚痴を言いたかった。受容されなかった。

それはハクオロの弱さだったが、当然のように受け入れてくれた。それがたまらなく嬉しくて、やっぱり迷つてる場合じゃないなとハクオロは思った。

「さて、帰ろうか。みんな、待つてるよ」

笑つて言うのと口々に返される返事。

それが何となく嬉しくてハクオロはまた笑った。



## 商人がやってきた

「ベナウィはおるにやも」

「は、ここに」

煙を吐きながら気だるげにされた呼びかけにベナウィはすつとインカラ皇の前へと姿を現した。

「おみやあ、叛軍討伐にまあた失敗したそうにやもね」

「我が力及ばず、申し訳ありません」

淡々とされる謝罪に、だが無感情なのは知っているのでそれを氣にした風でもなくインカラ皇はまた煙を吐いた。

「申し訳ないですむ問題じゃないにやもよ。侍大将であるおみやあが尻尾まいて逃げては、朕が愚民どもに舐められるにやもよ」

そう言つてぶは口と煙を吐くインカラ皇は、しかし言葉ほどの不機嫌さはない。

「にやふ、まあいいにやも。いまごろは愚民どもも、朕の偉大さと恐ろしさで恐怖にふるえているにやも」

「やはりあれは…あなたの仕業でしたか。何故あのような、何の關係も罪もない民を殺すような真似を…。国を支えるのは民なのですよ」

「バカを言うでないにやも。国は朕によって成り立つのであつて、愚民どもはおまけにやもよ。あいつらは見せしめにやも。たかが集落一つでガタガタ言うでないにやも」

「しかし…」



「おみやゝが不甲斐ないからにやも。全く、朕の髪にもしものことがあつたらどうするにやもよ」

ふん、と鼻をならすインカラ皇にベナウイは静かにただ沈黙を返す。変わらない表情からは、彼の内心は全く読み取れない。

「おお、又ワング。帰つたにやもか」

ふいにベナウイの背後に視線をやったインカラは目尻をさげて声をかけた。

そこにはインカラがいうようにちょうど又ワングが入ってくところだった。

又ワングはにやにやと笑いながら挨拶をする。

「おう、呼んだか伯父貴」

どうやら又ワングはインカラに呼ばれていたようだ。

「ぷふん、ベナウイ、そんな生意気なことを言つてられるのももう終わりにやもよ。朕はこの又ワングに、おみやゝと同じ侍大將オムツィケルを任せるにやも。この意味がわかるにやもね」

「……………御意」

言外に、無用な意見でインカラを煩わせるならば首にする。代わりはいるのだと告げるインカラに、ベナウイ少しだけ間をあけたがすぐに頭をさげた。

そのさまに又ワングはくっくくつと忍び笑いをした。

「よう、ベナウイさんよ」

退室し廊下を歩いていると声をかけられた。振り向くと予想通りのにやにや笑い顔があつた。

「私に何か？」

「へへっ、なあに。噂によるとずいぶん苦戦しているそうじゃないか。焼きが回ってきたかい？」

にやにやしたまま近寄ってきて馬鹿にしたように、実際格下だと思つてゐるのだろう、又ワングは至極楽しそうに嫌みを言ってきた。ベナウイは涼しい顔で流そうとしたが、彼の隣にいるクロウは我慢が苦手な直情型だ。

ぐっと又ワングの襟首を掴みあげて睨みつける。

「あ？　なんか言つたか？」

「ぐえ、な、なんだこの手はよお。こ、腰巾着が、侍大将に手をあげようつてのか？」

体格のいいクロウに睨まれた又ワングは顔色を変えながらも、精一杯の虚勢をあげる。

虚勢といつても位は本物だ。又ワングはうすら笑いを浮かべる。そんな又ワングにクロウはますます力をこめようとするが

「やめなさい、クロウ」

己の大将の静止に手を離れた。解放された又ワングはげぼげほと咳込みながらクロウを睨み、また脅し文句を言おうと口を開く。

「部下が大変失礼しました」

しかしその前にクロウが淡々と謝罪する。

「どうも私の部下は子供じみた悪戯がすぎるようです。まさか侍大将ともあるう者があの程度の戯事にムキになるとは思いませんが……どうか許してやってください」

悪戯、戯事というには力の入った態度だったが、そう言われては侍大将になった又ワングとしては引き下がるしかない。

何故なら彼は侍大将だから。それが今又ワングの最もたる誇りだから、引き合いにだされては仕方がない。

「ちっ……せいぜい足元すくわれないように気をつけな」

又ワングは忌ま忌ましげに二人を睨みながら捨てゼリフをはいて去っていく。

「ご忠告、感謝します」

ベナウイはその背中に形ばかりだが礼を言うが、又ワングは聞こえなかったかのように無視をした。

又ワングが角を曲がり姿が見えなくなってからクロウは大きく舌打ちをして、ベナウイに話しかける。

「あのチンピラに毛が生えたような男が侍大将なんて…。あれじゃ、足軽頭がいいとこですぜ。なあ大将？」

「さて、どうでしょう」

てつきり同意されると思っていただけにベナウイの曖昧な返事にクロウは驚いて勢いよく尋ねる。

「まさか、やつが侍大将の器とでも？」

「いえ…ですが、チンピラとあなたは言いましたが、そういう人種は追い詰められるとなにをするか判らないものです。あの瞳の奥の影…気になります」

気味が悪いようなニヤケ面しか思い出せないクロウには、ベナウイの言葉はピンとこなかった。それを察したベナウイは付け加える。

「集落をやったのが、彼だとしたら？」

「まさか…？」

さつと神妙な顔になるクロウに、ベナウイはふと息を吐いて空気を変える。

「…憶測にすぎませんが。それより、今は他にやらねばならない事があります。クロウ、戦況の報告を」

「ういっス！」

ベナウイの話題転換にクロウは空気を読んで、あえて元気よく返事をした。

「あいたた。そんなに突っつかないでくださいよう。ちゃんと歩きますから」

エルルウとハクオロが歩いているとそんな聞き覚えのない声が聞こえた。

そちらに向かい顔を出すと、テオロが線と目の細い、荷物を背にし杖をもった旅人らしき男を連れていた。

「どうかしたんですか？」

近づきエルルウが声をかけるとテオロはおう、と応えて男に合図して歩みをとめて言う。

「こいつ、キヨロキヨロと探るようにしてた怪しい男なもんでな。連行するところだよ」

「そんなあ、あつしはただ行商のためにここに寄っただけですよ」

情けない声で男が反論するがテオロはへつと馬鹿にするように笑う。

「だったらどうして忍びこむような真似したんだってんだ」

「ですから、ここにはよくして貰ってたんですよ。今回も行商ついでに宿を借りようとしたんですが、中にいれてもらえないから番が

変わって私のことを知らされていないんだと思っただけです、ハイ。中に入りさえすれば暖かい寝床で寝られると思っただけですが……もしたら、あなたたちに占領されたっていうじゃないですか」

順序だてて若干芝居がかったように説明する男に特に不審なところはない。

「もう勘弁してくださいよう。私はただの商人なんです」

「こう言ってるが……あんちゃんどうする？」

泣きそうな声で許しをこう姿にテオロはやれやれとハクオロに意見を求める。

「そうだなー、じゃあ、どんなものを扱ってるの？」

テオロの様子にハクオロが上の人間であると判断したのかぱっと笑顔になって男は答える。

「お頼みになられば、人身売買以外はなんでも扱いますですハイ。ここでは、これがよく売れてましたです、ハイ」

ハイ、ハイと癖なのか自分で相槌をうちながら男は背負っている荷物から何か、見覚えのないものをとりだした。

荷物からとりだすのには少し警戒したが、武器でもないのでハクオロは首を傾げる。

「これは薬としてつかわれているのですが……」

「マポッテイの……？」

男の説明がされる前に驚いたようなエルルウの声が遮った。

どうも知っているらしいが、薬ならば当然か。

エルルウの博識に男は驚いたのかはわからないが声をかける。

「これはこれは、よくご存知で」

「彼女は薬師だからね」

ハクオロが得意げに答えるが、何故か顔を赤くしているエルルウはそれにツツコまない。

「他には、こんなもありますよ」

「これも何かの薬なの？」

「えっと…その…」

「なんでえ、知らねえのか」

さらに出された商品にハクオロが尋ねても、エルルウは照れているように身を視線を泳がせて曖昧な返事をする。それにじれたテオロが聞くとエルルウはむっと眉をつりあげる。

「知ってます！」

「じゃ、なんでい」

「それは…」

薬師として商人より知識がないと思われるのは嫌なのは強く言ったエルルウだが、再度問われるとやはり口を閉ざした。

なんだろう？ エルルウが知らないとは思えないけどなあ。

ハクオロが首を傾げていると男が説明をした。

「これは海にすむヘラペッタという生き物の……ですな。精力剤と

して効果は抜群です、ハイ」

『……』の部分で急に声を潜めたので聞き取りずらかったが、どうやらオスの性器のようだ。

なるほど、エルルウが口を閉ざしたわけがわかった。薬品として扱うにしても言いづらかったのだろう。

そんな初さが可愛らしくてハクオ口は少しだけ笑った。

「おひとつどうです？」

「ダハハ、今度試してみつか・イデ、イテテ、なにすんだ」

男に勧められにやけるテオ口に気恥ずかしいのか口をへの字にしたエルルウが背中を殴る。

「そちらの旦那も如何です？ そちらのお嬢さんも一晩寝かせなくありますよ」

それを見て男は今度はハクオ口にふってきた。エルルウは真っ赤になりながらハクオ口を睨んで威嚇してくる。

「うーん、魅力的な話だけど、どうやら彼女にはまだ早いみたいだからいいよ」

「そうですね、残念です」

エルルウを見ながら答えると、エルルウはますます顔を赤くして怒っているのか単に照れているだけなのか区別がつかない。

あとで機嫌をうかがっておこうと決めて、ハクオ口は表情を正して男に告げる。

「とにかく、ここはいついくさ場になってもおかしくないんだ。す



ぐに立ち去った方がいいよ」

「そんな旦那、御冗談を。でしたらなんでこの娘や、あの娘のような可愛い女の子がいるんです？」

男の言葉に視線をやると、とことことアルルウが近寄ってきていた。

「おにゅちゃん」

「アルルウか、どうしたの？」

相好を崩して頭を撫でると、その手にすりよるようにごろごろと喉をならしながら抱き着いてきた。

「妹さんですか、可愛いですねえ」

「そうでしょうとも」

兄馬鹿全開で答えるハクオ口をスルーして男はアルルウに話しかける。

「こんにちは、お嬢さん。飴をどうぞ」

笑顔で飴を差し出されたがアルルウは男をじっと見てからハクオ口の後ろに隠れた。

「あら？」

「気にしないで、アルルウは人見知りなんだ」

「そうですか。しかしいくさ場になるといのは本物に冗談ではないのですか？」

「そうだよ、この娘たちは…まあ、色々あるんだよ。とにかく、無関係の人を巻き込むわけにはいかないからね。あなたはすぐに離れた方がいい」

「はあ…」

不承不承頷く男に、確かにこの状態は少しおかしいんだろうなあとはクオ口は思いながら、男のために少量だが水と食料を用意させることにした。

「すみませんねえ」

男は恐縮しながら水と食料を受け取る。

「道中気をつけてね」

「はい、ああ、そうそう」

挨拶をして歩きだした男は、だがすぐに何かを思いだしたように振り向いて2、3歩ハクオ口に近づき、小さめに声をかける。

「お礼に少しばかり忠告を…」

「忠告？」

声が小さいので顔をよせながら尋ねる。男ははい、と答えて動いた。

「これです」

「ッ！？」

「んグッ、なんだ？」

何の前触れもなく男から強い殺気が発せられ、ハクオ口と遅れてテオ口が声をあげる。

なにつ、この背筋に突き刺さるような冷たい悪寒は。空気が凍りついたような感覚…まさか…

突然の殺気に負けないようにぎりど歯をかみしめながら男を睨みつけるが、男は飄々とした態度を崩さない。

「無用心です、ハイ。もし私が刺客でしたら…既にあなたのお命、頂戴しておりますよ」

「お前は…」

「動かないでください。既に間合いですから」

男が手にしていた杖が二つにわかれ、その隙間からは鈍い光が漏れる。

仕込み杖かつ。

旅をするのに杖を持つのは珍しくないのに、気にもとめなかったが、まさかこの男が敵だとは気づかなかった。

ハクオ口は己の油断に舌打ちしそうになるのを抑え、男の一挙手一投足を見逃さないようにしながら尋ねる。

「僕を…斬るのか？」

「いえいえ、先程も申し上げました通り、少しばかりの忠告を…つと」

ふっと殺気は消えて驚いたように男は杖をさげて手をあげた。

「あ、あの、お嬢さん。何もいませんから、後ろのそれを、引っ込めていただけませんか？」

男の視線を追って振り向くと、アルルウを頭にのせたムツクルが牙を向いていた。

「ヴルルルル…」

低く唸り声をあげる姿にひええと男は先程の殺気が嘘のように情けない声をあげた。

「これはいけませんです、ハイ。私はこれで退散させていただきますです、ハイ」

そう言つて男は何か道具を出した。カッと一瞬光に目がくらむ。

「ぐ…」

瞬きして視界が戻るとすでに男は消えていた。

「いない…逃げたか、っと」

ぽふっと腰から足にかけて抱き着いてきたいつもの感触に反射的に頭を撫でる。

アルルウはうっとうと声をあげながらぐりぐりハクオロの体にほお擦りする。

「ごめんね、いつも心配かけて」

しかし、あの男は一体なに者だったのか。わからない。

ハクオロはテオロに頼み、これからも怪しい人間がいたらすぐに捕まえるように全体へ指示を出した。

日が沈んだ夜、ハクオロを悩ませた細い男が闇に身を隠しながら現れた。

それを待っていたベナウイは顔をあげて尋ねる。

「ご苦労です、チキナロ。それで如何でした？」

細い男・チキナロは笑いながら答える。

曰く、面白い、人を惹き付ける魅力をもつ人だ。と。

ベナウイはその報告を無表情のまま聞きながら、頭の中で反復する。

「約束のものです」

「お代は確かに。毎度ありがとうございますです、ハイ。詳しい内容はこちらをご覧ください」

チキナロは報酬と引き換えにベナウイに書簡をひとつ渡し、再び闇へ姿を消した。

ベナウイは一人になり、書簡を開きながら一人ごちた。

「ヒトを惹きつける、ですか…」

言葉は誰の耳にも届かなかったが、ベナウイ自身に重く沈んでいった。

それがどついう影響をもたらすかは、誰も知らない。

## 商人がやってきた（後書き）

久しぶりの更新です。

ほんっともお待たせしてすみません。

ハクオロが絡まないところはあまり変えられないので辛いです。

とにかく次は9月中にまた更新します。ゆっくりですがまた定期更新できるようがんばります。

うまく言えない

ハクオ口を筆頭にこの砦における要となる者たちが頭を付き合わせ、今後のことを話し合っていた。

「ユタフ、エプカラ、サン、ワツカイ…今日だけで4つの集落が集まりましたね」

集まった血判状を見てお茶を配っていたエルルウが感心したように言った。

ハクオ口らの傘下に加わりたいと、指示に従う旨を血判状に誓って屈強な男たちが他の集落から次々に集まってきている。

これはやはり先日、無関係な集落が焼き払われたのが効いているのだろう。

それを思い少しでも雰囲気が暗くなりかけた。

「兄者、いま戻ったぞ」

が、タイミングよくオボロが戻ってきたのでそれは免れた。

オボロが席についたのを見てハクオ口は気合いをいれて声をあげる。

「よし。じゃあみんな聞いてくれ」

現状、悲しんでいる暇はない。

国を相手取るためには圧倒的に人手が足りないのだ。

それが今回のことでハクオ口を中心とした集まりはもはや単なる一揆の群集ではなく革命軍と言えるほど規模になり形になってきた。そこでついにこちらから攻めることになった。



といってもいきなり都に攻め込むわけではもちろんない。さらなる軍強化のため関を落とそうというものだ。

「現在の戦況を表すところなる。これを有利にするのに邪魔な関所がいくつかある」

ハクオ口は大きな地図を広げ、皆に見えるように自国の中をいくつかの駒を並べて示していく。

「特に邪魔なのはここの、タトコリの関だ。これさえなんとかすれば分断されていた集落と連携が可能になる。

通行料を巻き上がるための関だからそう強固ではないけど、増援されると厄介だし手の内が読まれても困る。

だから多方に陽動を仕掛け敵兵力を分散させ、その間に本隊が防壁を破壊するという策でいこうと思う。

何か質問がある人は拳手を」

一通りの説明の後、顔をあげてハクオ口が問い掛けるが誰も手をあげない。

よし、と一つ頷いてハクオ口は皆を見回して口を開く。

「決行は明朝の日の出だ。始めっ」

「応っ」

ハクオ口の掛け声に皆声を揃えて応え、解散となった。

「…ふう」

一人になったハクオ口は地図を片付け、ため息をついた。明朝からなので起床はいつもより早い。早めに体を横にしておいた

方がいだろう。

武具や馬の準備は済んでいるはずだ。いつでも大丈夫なように備えてきた。今の伝令が全員に伝わるのに二刻もあれば十分だろう。頭が冴えているので、軽く見回ってから寝ることにした。

「あ…」

部屋を出ると途中に退室していたエルルウがいた。少し気まずそうだ。ひよっとしてハクオ口を待っていたのだろうか。

「エルルウ…時間ある？ 少し話さない？」

「…はい。大丈夫です」

「よかった。じゃあ、僕の部屋でいい？」

「はい。お茶を持って行くので、先に行ってて下さい」

「うん」

エルルウは少し暗かった。明日の話を聞いて感傷的な気分になっているのだろうか。

なんとなくエルルウの気持ちはわかる気はしたけれど、わからない気もした。はつきりと言葉では言えない。

とりあえず話をしよう。

のんびりと自室に向かうとちょうどエルルウと戸の前で合流したので、戸を開けて促した。

室に入り二人何となく窓際に並んで座った。

「どうぞ。まだ熱いので気をつけて下さいね」

「ありがとう」

湯呑みを受け取りそつと口をつける。熱かったが我慢できないほどではない。飲み込むと胃があたたくなつてほう、と息をついた。

「お疲れですか」

「ん、まあね。でもエルルウもみんな頑張ってるんだから僕だけサボるわけにはいかないしね」

「明日、行くんですよね」

「うん。聞いてた？」

「すみません」

「別に謝ることはないよ。エルルウが聞きたいなら会議に参加したつていい。参加するのは自由だよ」

「いえ、そういうわけにはいきませんよ。私には戦うことはよくわかりませんから」

わかるとか、意見を出せるとか、そういうことは関係ないんじゃないかとハクオ口は思う。

今ここにいる全ての人が話を聞く権利がある。疑問を口にする権利がある。でもその全てに説明し耳を傾けていては時間がかかりすぎる。だから順位をつけてまとめ役をつくり話が効率よく伝わるようになっていく。

でもエルルウが望むなら、ハクオ口はいくらだって話をする。納得するまで話したい。

「言いたいこと、本心とか、いくらだって言っていいいんだよ。僕らは家族なんだから」

エルルウが何かに思い悩んでいることは確かだ。一目でわかる。エルルウも、知られているとわかっているのだろう。観念して口を開

いた。

「……本当のところ、私はハクオ口さんたちに怪我をしてほしくありません。それは、一番思います。今更やめられないのはわかっています。ただ……少し、苦しいです」

「……うん、ごめんね。苦しめて」

「……違います。私が、悪いんです。こんなこと言ってもハクオさんの負担になるだけなのに……。ハクオさんが優しいから、言っちゃいました。気にしないで下さい」

「いや、気にする。僕がエルルウを気にしないわけないっしょ」

顔を伏せて謝罪するエルルウにハクオ口はことさら明るく言って、お茶を飲み干した。

「……」

空の湯呑みをエルルウに向けると、ゆっくりした動作でお茶をいれた。

「僕も、早くこんなことやめたいよ。だから、ちょっとだけ待ってすぐに平和にするから。理不尽のない世界に……するよ、きっと」

「……はい」

エルルウは悲しそうに笑った。

エルルウが望んでる答えはハクオ口にはわからなかった。こんな言葉ではないとは思ったけど、どうすればいいのかわからなかった。

エルルウはハクオ口に傷ついてほしくないと言うが、ハクオ口はエルルウにこそ傷ついてほしくない。

「約束するよ」

「？ 約束、ですか？」  
「うん」

湯呑みを置いて小指だけたててハクオロはエルルウに向けた。

「指切りしよう」  
「……」

黙ったまま戸惑いがちにだされた小指を強引に自分の小指とからめて、顔をあげたエルルウとハクオロは真つすぐに顔を見合わせた。不安そうな、儚げなエルルウの表情に胸が苦しくなる。

エルルウにそんな顔をしてほしくない。笑ってほしい。こんな時に無茶な願いだと思いながらもハクオロは願い、小指に力をこめた。

「僕は絶対に生きて君の隣にいる。ずっと君を守る。約束するよ」  
「……ハクオロさんは、ずるいですよ」  
「そうかな」  
「そうです」

エルルウは少し息を吐いて、苦笑した。さっきの無理のある笑みよりずっとマシだ。満面の笑みには程遠いけれど今はこれでいい。

「ゆーびきーりげーんまーん、うつそーいたーら、お詫びにずっとエルルウの下僕になるよ」

「ふ……なんですかそれ？ どっちもハクオロさんに不利じゃないですか」

「そんなことないよ。どっちもエルルウと一緒にいれるよ」

「…本当、ハクオロさんはずるいですね」

「ずるでもいいよ。エルルウが少しでも笑ってくれるなら。エルルウはいくらわがままを言っても無茶や愚痴や八つ当たりをしてもい

いよ。全部許す。笑ってくれたら、僕は満足だよ」

「……ばかですね。なに、言ってるんですか」

エルルウは複雑な、泣きそうな笑い顔で言った。彼女が今なにを思っているのか知りたいと強く思った。

「そうだね。なに言ってるんだろう。でも本気だから、忘れないでね」

「……ハクオロさん」

「なに？」

「明日、早いんですから今日はもう寝た方がいいですよ」

「え、う、うん。すぐ寝るよ」

「はい、おやすみなさい」

「……おやすみ」

エルルウはさつとハクオロの湯呑みだけ置いたまま部屋をでていった。

ハクオロはそれをぼんやりと見送ってから、湯呑みを口に運んで外を眺めながらエルルウのことを考える。

少しは気が紛れただろうか。あんな約束は気休めにすぎないかも知れないが本気だ。少しでもエルルウが思い煩うことが少しでも軽くなればいいのだけだ。

この戦いが始まってからエルルウは時折陰を見せる。

仕方ないことではある。いつ人が死んでもおかしくない状況で面白おかしく心から楽しんで生活できるわけがない。むしろエルルウは強い方だ。

それでもやっぱり心配だ。

彼女はハクオロにどれだけ心を開いてくれているだろう。きちんと支えになれているんだろうか。

ハクオロではトウスクールと同じほどには到底届かない。彼女は今、誰かに頼れているんだろうか。

ハクオロには大丈夫だよ、一緒にいるよと気休めの願いを口にしてあげることしかできなかった。

もしかしたらもっと傷つけてしまったかも知れない。だから急に立ち去ったのかも知れない。

もっとうまく言えたらエルルウを元気づけられたかも知れないのに。そう思い、失敗したなとハクオロはため息をついた。

## うまく言えない（後書き）

かなりぐだぐだ会話です。

エルルウは自身でもどうにもならないけど現状が不安で暗くなったりして、ハクオロはそれを察しています。なにを言えいいのかはわからないのですが放っておけないのでとにかく話しかける流れです。

原作でのハクオロはうまく言えないことはうまくかわしたりしますが、この話ではど真ん中に突っ込んで行きます。理論整然としない話し方をしたりします。

本当はこの話で関を落としてる予定だったんですが何故かこうなりました。



## 敵の思惑

部隊の半数を引き連れたクロウは先行して敵を追っていたが、森を進むとあちらこちらへ分散し、しかもまた別の敵が出て来るので標的を見失っていらいらとしながらウマを止めて立ち止まった。

「クソ・厄介な所へ逃げ込みやがって。こつ足場が悪くちや、思うように動けやしねえ」

カカンツ・

自分へ向けられた数本の矢を軽く弾き、そちらへ視線をやるがすでに敵は移動している。

こちらへダメージはないが、先程から今の様に互いに決定打もなく手応えのないやりとりにクロウは舌打ちをする。

「チツ。テメエら、玉あぶら下げてんなら、隠れてないでとっと出て来やがれ!!」

木々の向こうに挑発を投げ付けるが返ってきたのは沈黙と弓矢だ。

「かゝゝツ、鬱陶しい!!」

それをたたき落として収まらない苛立ちを声にする。

「落ち着いたらどうです、貴方らしくもない」

追いつき後ろから声をかけてきたベナウィと部下たちに、クロウは振り向きながら逆立てていた眉をおろす。

「大将、そりゃ分かってやすがね。こうもチョコマカされたら苛々もしやすぜ」

「まさかここまでとは…正直、驚いています」

「あ？ あー、確かに奴らがここまで大きくなるとは思いやせんですが」

ベナウイの言葉にクロウは頷いて同意を示す。

敵の腕前自体は大したことはない。一体一なら絶対に傷一つなく勝利できるし、部下も同じだ。

にも関わらず手こずっているのは相手の数だ。連携を組み、あちらこちらからと攻撃を仕掛けてくる。一つ一つがたわいない攻撃とは言え、弓矢を無視してくらうわけにもいかない。そうして気をとられてしまい、今だ敵殲滅は敵わない。

しかもそれはここだけではない。出陣が下った時でさえ複数ヶ所ですべて同時に反乱が行われていた。

おそらく示し合わせて行うことでこちらの兵を分散させているのだろうが、一カ所にこれだけの手数を割けるのならばかなりの勢力だ。もしかすると、人数はもはや軍に匹敵するほどかも知れない。いや、むしろ、それ以上に？ 軍でも皇の横暴さに反感を持っている人間は少なくない。何人か、軍を止めた人間がいることもクロウは知っていた。

「いえ、勢力もそうですが。驚くべきことは、これ程までに統率がとれていることです」

しかしベナウイは軽く、肯定して否定した。

森は静まりかえっていて、まるでベナウイ達しかいないかのようだ。時折やってくる矢のみが敵の存在を表している。

「通常、軍勢の急速な拡大は兵を烏合の衆にしてしまいます。にも

関わらず、彼らの動きは熟練のものを思わせます」

敵はクロウの挑発にも全く反応せず、今もベナウイ達は固まって立ち止まるという絶好の隙を見せているのに襲い掛かってこない。淡々と、相変わらず位置を気取られないようにと四方八方から狙っている。統率のとれた、方向性が一貫した動きだ。

「合戦を知らない民にそんな真似が出来ると思えますか？」

「叛軍の、あの野郎ですかい」

嫌そうな顔をするクロウに、ベナウイはふうと息をついて誰に言うでもなく言葉を続ける。

「ハクオロ…、甘く見るつもりはなかったのですがその考え自体、甘かったようです」

表情の起伏に乏しいベナウイだがクロウにはそこから深刻そうな雰囲気を見て取り、やれやれと大袈裟に肩を竦めながら辺りを見回して話題を変えた。

「にしてもあいつら、チヨコマカ逃げ回ってばかりで、ホントに戦う気があるんスカねえ」

「戦う気が…あるのか？」

クロウが何気なく言った言葉がひっかかり、ベナウイは繰り返す。それにクロウたちが視線を向けるがベナウイは応えず、しばし沈黙してから顔をあげた。

「なるほど。そういうことですか」

「なんスカい、そういうことって」

呟くようなベナウイの言葉に皆、疑問顔になり代表してクロウが尋ねた。ベナウイはふ、と息をついてから視線を厳しくしながら答える。

「囙ですよ、これら全部か」

「囙い！？ まさか、これ全部が…」

「おそらく別の狙いがあるのでしょうか。これはそこから目を逸らす為の陽動です」

ベナウイの何でもないように言った言葉を理解した瞬間、クロウはぐわっと目つきを鋭くして歯を剥き出した。

「糞がつ、騙してくれやがったか！」

「問題は何に對しての囙なのか…。これだけの戦力を囙にするとすると、そんな大規模な行動は…精々、関を落とすくらいしか……しまった！」

クロウの激昂を横目にベナウイは顎に手をあてて考えこみ、すぐに顔をあげた。その顔には珍しく、部下にもわかるくらいに焦りと驚きが込められていた。

「タトコリの関！ つ、だとすれば今なら十分間に合います」

独り言のように言いながらウマを反転させてベナウイは部下に指示を飛ばす。

「敵はタトコリの関を襲撃していると思われます。このまま後方から挟み撃ちにし、一気に殲滅させます」

そして言うが早いかウマを走らせた。

「応っ！」

クロウは大きく声をあげ、笑みを浮かべながら部下を引き連れクロウを追いかける。

走りながらベナウィは距離とウマの速さから時間を計算する。

叛軍の行動はこちらの陽動とは時間をずらして行われるはずだ。今ならまだ、皆が乗っ取られるまでに間に合うはずだ。

皆に常駐する兵の数は少ないが、恐らく敵もそれより少し多い程度だろう。ベナウィ達が加われれば戦況はひっくり返る。

どうします、ハクオロ。

心の中でひっそりとベナウィは届くはずのない言葉をハクオロへ投げかける。

囧と気づかれるのが、少しばかり早かったようですね。このままでは貴方は終わりですよ。

「…これで、終わりなのですか」

ぽつりと誰にも聞こえない声量で言葉が零れた。それには自覚していなかったが残念そうな、悔しそうな成分が含まれていた。

…ここまでするのですか？　これで、終わりなのですか？

ベナウィは胸中で答えのこない質問を繰り返した。

「予定通り、攻撃を開始したそうです」  
「頃合いだね。よし、行こうか」

伝令の言葉を伝えるエルルウに、ハクオロは立ち上がり促す。エルルウはそれに着くが俯き気味に沈黙している。

「エルルウ」  
「はい」

ハクオロが名を呼ぶと少しだけ顔をあげて返事をするエルルウ。だけどやはりその顔は暗い。  
何か、言わないといけないと焦燥感に駆られる。だけど何を言えばいいのか、わからない。

「危ないから、僕から離れるな」  
「…はい」

結局無難な言葉になってしまった。でもエルルウは少しだけ、気を遣ったのだろうけど、微笑んでくれた。  
それにハクオロはにこっと笑って前を向いて気合いをいれた。

「よし、出陣だ！」

そして頭を切り替える。

誘導部隊が全て出たならば時間的にそろそろ、困だと気づくはずだ。いや、あの男ならもう？ どこまで引つ張れたかも問題だ。とにかくタイミングが重要だ。頼むぞつ、テオロ！

ハクオロは皆の先頭を切って、目的の関まで駆け出した。

「ッ、止まりなさい！」

異変にいち早く反応し強く手綱を引きながらベナウイが鋭い指示を出した。

それに素早く部下は従う、が、最も勢いよくベナウイのほぼ横近くを走っていたクロウは一瞬遅れた。

慌て手綱を引こうとしたクロウは、しかし自らもベナウイの判断原因に気づき反対にウマの腹を蹴っ飛ばした。

ドガガッ ガラガラガラ

ベナウイらの頭上、一つ上の崖つぶちから大小様々な岩が落ちてきたのだ。

砂埃をたてて視界を埋めつくすほどの崩落はあまりにタイミングが良く、明らかに人為的なものだ。

「クロウ、クロウはどこです!？」

ベナウイは一瞬だけ頭上に視線をやってから、すぐに砂煙に向かつて声をあげる。

徐々に砂煙が収まると高くまで積みあがった岩石の山が表れ、通行はもちろん様子を伺うこともできない。

「イチチ、大将、ここでさあ!」

向こう側にいるクロウが大きな声で無事を報告する。

「なんとか無事つてとこです。ですが、やられましたね」

クロウの無事に安堵しつつベナウイはこの後について考える。

この道が最短コースであり、関へ向かう為に不可欠な道だ。その道は塞がってしまった。あらかじめわかっていたことなら迂回も可能だったが、今からでは時間がかかりすぎる。

「ええ…これでは私たちが行くには時間がかかってしまいます」

「なあに、すぐそこです。ちよっくら一人で行ってきますよ」

クロウはさらりと、散歩にでも行くような気楽さでそう言ってから、笑みを浮かべた。

「んですが、ここまでコケにされたのは初めてで、ちょいとばかり頭に来てやしてね」



笑ったまま、声を変えた。陽気な軽い声から、重く冷たい声音に。

「本気で殺りやすぜ」

「…いいでしょう」

その滅多に聞けない静かな強い怒りの込められた声に、ベナウイは一人でも決してクロウが死にはしないだろうと判断して許可をした。またクロウなら、どんなに感情に流されているように見えても状況を正確に理解して時には撤退することもする。だからベナウイは安心してクロウに許可が出せた。

「セリヤア！」

クロウはベナウイの許可を聞くや否や返事を返す間も惜しいとばかりに掛け声をあげ、ウマを走らせた。

それを聞き、ベナウイは反転して部下たちに撤退することを告げた。クロウが持ち帰る情報を待つ以外に今は手はない。

もはやベナウイらは間に合わない。

敵はベナウイが囷だと気づいて、この道を通ることも承知していたのだろう。そしてまさしくその通りになった。

「ふふ…お見通しというわけですか」

ベナウイはそっと、部下に気取られないように口角をあげた。

敵の手の平で躍らされるだなんて、なんて滑稽なことだろうか。あわよくばこの落石で兵を負傷、または兵力の分散まで狙っていたのだろう。そしてまんまとクロウは分離させられた。クロウであったのは、むしろ幸いだ。

これほどまでに叛軍に手こずるようになるなんて誰が予想できただろう。

ベナウィは自分でも明確な理由はわからなかったが、おかしくて堪らない気持ちになった。

不敵な笑みを浮かべたベナウィは、付き合いの長いクロウが見ても驚いただろう。それほどに、珍しい表情をしていた。

## 敵の思惑（後書き）

何とか年内にできました。

全然話が進まないのに一話分になってしまった。文章増やしすぎか。  
なんとか今年度中には城を落とさせる予定です。

## タトコリの関にて

夜明けの少し前、暗く静かな山道を遮るように建てられている大きな門を持つタトコリの関。そつと闇夜に紛れてハクオ口達は関所に近づき戦闘準備を整えた。

大きな、といつても越えられない程度のもので関所の規模としてはそれほど大きなさではなく、見張りも二人という少ないものだ。

「　　っ！？」

ハクオ口は小さく合図するのに合わせ弓兵が矢を放ち、その二人を貫いた。

「が　！？　で、敵襲っー！」

腹部を負傷した方は地に膝をついたが、腕に刺さった方はよろめきながらも立ったまま見張りの役目を果たした。

見張りの声に一拍遅れて警報の鐘がなる。

「チッ　行くぞ！　陣形を崩すな！」

「応ッ！！」

敵が出てくる前に号令を出し、一斉に突撃する。オボ口を筆頭にすすめる先頭がいち早く辿りつき、関所の上方の小窓が開き弓が降る前に門に丸太をぶつけてこじ開けた。

先手の成功に雄叫びがあがり、さらに皆が我先にとばかりに門をくぐって関に突入する。

「ぐっ」

「怯むな！ 利はこちらにある！」

それと同時に小窓が開き、弓先が降り幾人かが倒れる。すかさずこちらの弓兵に撃たせ、それに怯んだ隙に兵と共にハクオ口も関所へ走りこんだ。

ムツクルは器用に弓も避けて行くのでアルルウに心配はしないが、自分の後ろのエルルウには別で、ハクオ口は扇を開きながら視線をやる。

「っは、はっ」

緊張が早くも息があがっているエルルウに、ハクオ口は空いてる手で彼女の手をひいた。

「えっ」

「離れるなよっ、エルルウはこれが終わってからが本番だからなっ」  
「は、はいっ」

叫び声や唸り声が上がる喧騒の中でエルルウは気丈に大きな声で返事をした。それに少しだけ、場違いにハクオ口は微笑んだ。

本来なら連れてくるにしても先程の待機場所では幾人か兵をつけて待たせるべきなのだろう。

だがハクオ口は自分がいない時にエルルウの身に何かあったら何で考えたくもない。

何てことはない。ハクオ口はただ、自分の手で彼女を守りたかったのだ。傍にいてくれることを選んだ彼女を、誰より傍に置きたかったのだ。

むろんそれはアルルウに対してもだが、彼女にはすでにハクオロより頼もしい護衛がいる。

「行くぞつ、勝利は目前だ！」

背中を向けて言われたハクオロの言葉に、エルルウは頷きながら手を離し、いつのまにか整っていた息を吐いて動き出した。

かなりの数を他に回したとは言え人員が豊富なのでこの関所を制圧するに十分な数を揃えた。さらに陽動へと応援にでも出ているのか想定より敵は少なかった。

今だ数人の負傷者はでたものの死者のいない。すでに半数を撃沈させ勢いもある。

このまま問題なく制圧は完了する、と思わずハクオロも確信に笑みをつくった瞬間、ハクオロたちが突入したのとは反対側の門に人影が現れた。

「ダアアッ！！」

「ぐあつ！？」

その人影は雄叫びをあげながら近くの兵（ハクオロ側の）に切り掛かった。

その力強い一撃に力尽きた屍は地に伏し、それにやられそうになっていた敵兵はあわやというところで助かり、救助者を見て喜びの声をあげた。

「クロウ殿！ 応援に来てくださったのですね！？」

「おう とは言え、俺一人だがな。それに…」

じろりと周りを鋭い眼光で威嚇して、犬歯を剥き出しにして凄惨な笑みを浮かべるのは巨体な怪力の持ち主でベナウイの部下クロウだ。

やっかいな相手の登場にハクオロのみならず全員が動きを止めて敵と距離をとった。

「ちいとばかり遅かったみてえだな」

少なくなり負傷した味方の姿にクロウは軽い調子で言いながらハクオロに向いた。それに反応してオボロが素早くハクオロとクロウの間へと移動し睨みつける。

それを見てクロウはやれやれとオーバーに肩をすくめた。戦場の空気が少し和らぐ。といっても今にも飛び掛かる状態から己らの指揮官が動くまで警戒体制になったまでだが。

じりじりと、現在自動的に指揮官になったクロウの元へ残った少ない兵が近寄っていく。

「一人で行くなんて大口叩いちまった。大将になんて言い訳すりやいいんだか」

「お前は…」

「おう、俺はクロウだ。覚えててくれや」

「あの男はどこだ!？」

「あの男? ああ、ウチの大将か。なに、わざわざ大将が出るまでもないってことだ。にしても坊主、ずいぶんウチの大将にお熱みてえだが、少しは腕えあげたのか?」

からかう様に笑うクロウにオボロは構えを崩さないまま睨みをさらにキツくする。

「いつまでも、あの時のままだと思っな」

「ほほう? んじゃ、見せてもらおうか。ウチの大将が出るまでもねえ。俺一人で十分でい! 行くぜえ!」

「それはこっちの台詞だっ!」

カツと刃と刃が弾きあう音がして、それを皮切りに再び兵は取っ組み合い戦場の音になる。

弓兵は他の援護に忙しい。ハクオロはエルルウが戦場から少し離れた隅で味方の治療をしているのを確認してからオボロとクロウに近づいた。

「ガルルウッ」

アルルウを乗せたムツクルが加勢とばかりに跳ねるようにこっちに来る。

「おらあっ」

「くっ」

クロウの力任せにも見える攻撃にオボロは流しきれずに思わず距離をとる。

「おらっ、怪我人はとつとと下がれ！！」

しかしその僅かな隙にクロウはウマの機動力を生かして味方に突撃するようにして襲いかかる刃を返り討ちにした。

「うぐっ！？」

「負傷者は下がれ！ 一人でかかるな！ クロウと距離をとれ！ 弓兵！！」

「はっ！」

「あらよっ、と」

肩を切られた味方を下げハクオロが声をあげると待機していたよう



に弓兵の矢が複数クロウへ発射された。しかしクロウは軽く落とすが、そんなことは想定内だ。

ハクオ口は素早くクロウの前方に踊り出る。それに合わせてオボロ、ムツクルもクロウに向かい牙を向ける。

「よう、あんたにはまんまとやられちまったな」

「でも完璧じゃなかった。半分はベナウイの読み勝ちでドロリーかな」

クロウだけが来たと言うことはベナウイが気づくのが少しだけ、一人は通つてしまつくらいに早かったと言うことだ。単にスピードの問題かも知れないが。

とにかく、クロウというパワーファイターを死人なしに倒せるほど余力はない。一番体力のあるムツクルならあるいはわからないが、アルルウを乗せているのに無理はさせられない。

「？ はっ… やっぱあんたは危険だよ。ウチの大将と同じくらいになっ！」

クロウは一瞬不思議そうな顔をしたがすぐに不敵な笑みを浮かべ、得物を振り上げた。

「おらおらおら！ 死にたい奴からかかってきやがれ！！」

「ハアッ」

「っと。イチチ、少しは腕をあげたかい」

オボロの攻撃に腕をかすらせ、クロウは終始絶えない軽口を叩きながら数歩ウマを下がらせた。

彼の妨害により残って敵のさらに半分ほどはすでに逃げてしまった。ハクオロ達はどうしても脅威であるクロウを無視して動けないので半ば仕方のないことではあるが、それでもたった一人に手をとられてしまうことはとても容認できることではない。

「今日は分が悪い。この辺で引き揚げるとするかね」

「待てっ、逃げられるとも思っているのか！」

「そらよっ」と

「ッ」

背を向けるクロウにオボロは飛び掛かるが軽い掛け声と共に繰り出される強力な斬撃にオボロは思わず飛びずさる。

「んじやな」

「アイツッ！」

素早く戦線離脱して門をくぐって遠く背中にオボロは眉を逆立てて歯を食いしばったが、すぐにやめてハクオロを振り向いた。

撤退するクロウの姿にオボロ以外は勝利の雄叫びをあげ、武器を放って歓喜した。

ハクオロは苦笑しながらオボロに近寄り、お疲れ様と労った。

「兄者……」

「やられたね。まんまと時間稼ぎに付き合わされたわけだ。勝つには勝ったけど、素直には喜んでられないね」

まあ、死人がなしというのは個人的に大収穫だ。それに当初の目的は達成した。

「ま、とにかく勝ったんだ。これで戦況は大きく変わる。僕は手当てを手伝ってくるからオボロはテキトーな人に門の損傷具合とか、中とか、あと……えーつと」

「安心しろ、兄者。ちゃんと言われた通りに書いて残してある」

「ありがと。じゃあ諸々、手筈通りよろしく」

「おう。兄者は体力がないからな。休んでくれ」

「冗談でしょ。女の子だけ働かせるなんてごめんだ」

懐から木簡を取り出したオボロと別れ、ハクオロは隅で怪我人を診ているエルルウの元に向かう。

気が抜けて急に疲れがきた。

「おに口ちゃん」

「おす、アルルウ。お疲れ様。よく頑張ったね。偉いよ。ありがとう」

お疲れ様、というとアルルウはムツクルに乗ったまま伏せの姿勢をとったので褒めながら頭を撫でてあげた。

「んふ口」

嬉しそうだ。とても可愛い。ただ、伏せなくてもアルルウの頭は撫でられたことは主張しておいた。

確かに乗ってるアルルウとはそんなに頭の位置変わらないけども。そこまで小さくないよ、わかる？

「んー、ん」

聞いているのかいないのか生返事だったがアルルウはいい子なので聞いていると思いたい。

物欲しげな顔をしていたのでムツクルの頭も撫でると嬉しそうに鼻をならした。大きくなってもこうして見るとムツクルは可愛い。

猫科でよかった。僕猫好きだし。

「さて、アルルウ。エルルウの手伝いに行こうか」  
「ん」

頷くとアルルウはぴょんつとムツクルから飛び降りて、たたとエルルウに向かって駆け出した。

身軽なのは知ってるけど、元気だなあ。

「ムツクルは隅で休んでな」  
「ガオ」

ムツクルを行かせて、ハクオロはそつとエルルウに近づいた。

「エルルウ、何か手伝うことある？」  
「あ、ハクオロさん。じゃあ、水を汲んで来てもらえますか？」  
「了解」

返事を一つしてハクオロは頷いた。



## タトコリの関にて（後書き）

このペースだといつ完結するのかわからんね。  
遅くてすみません。

戦闘シーンは苦手です。

エルルウの立ち位置悩む。ゲームだと回復要因で一緒にいるけど、  
実際は衛生兵は後ろの方で手当して、戦場のど真ん中で薬ぬらない  
だろ。よく知らないけど。

あと有り得ないかも知れないけど今回では死人はいない設定です。  
ていうか、死人出てたらその知り合いは勝っても手放しに喜べない  
気がするんだがアニメとか皆喜んでるし。どのくらい死んでるんだ  
ろ。

## ヌワンギ、進軍

「ベナウイはおるにやも！」

「お呼びでしようか」

インカラ皇の怒鳴り声による呼びかけに普段と代わらぬ平坦な声で返事をしながら、ベナウイは皇の前へと進み出て膝をついた。

「よくもしゃあしやあと朕に顔を見せられたものにやも！ おみやあ、また尻尾を巻いて逃げ帰ってきたそうにやもな」

インカラはぶはあとキセルの煙をベナウイに向けて吐き出してから吐き捨てるように言った。

「我が力、及ばず」

「その間にもヌワンギはチェンマを制圧したにやもに！ おみやあのそのザマはなんにやも」

「チェンマ？ あそこは、反乱に加わっていない集落ではありませんせんか！」

得意げに、比べてベナウイを嘲笑うように言ったインカラの言葉に、ベナウイは思わず顔を上げていた。

その反応すら楽しむようにインカラはぶふうと煙をはきながら笑う。

「ぶぶん、厄の芽は小さい内に摘むに限るにやも。見せしめに皆殺しにさせたにやもよ」

「……」

唇をきゅう、と一文字に引き締めてベナウイは鼻から息を吐いた。

空気を震わせることで怒鳴りそうになるのを堪えた。

「何をしたか…理解しておいでか？」

それでも、尋ねる声が僅かに震えるのは止められなかった。

「にやも？」

「御自身が何をしたか、理解しておいでか！」

不思議そうに首を傾げるインカラに、ついにベナウイは声量をあげるのを止められなかった。眉を潜めてベナウイは辛そうに、感情を抑えるため目を閉じた。

しかしインカラはそんなベナウイの態度に笑いを漏らす。何もわかっていない。皇が全てだ。国の全ては皇の物だ。

「朕が何をしようと、朕の勝手にやもよ」

「否！！」

インカラのその考えに、ベナウイは強く否と言った。間違っていると、はつきり言う。

「國の基盤は民。民無くして國は成り立ちません。民を蔑ろにする國に明日はないでしょう」

勢いを沈め、ベナウイはいつものように平坦な声でそう続けた。

インカラはその迫力と言葉に、息を飲む。しかしそれと同時に腹の底から怒りが沸いて来た。

「お、おみやあ…朕に明日がないといいたいにやもか」

「御身がそうお思いになるのでしたら…そうなのでしょう」



「つ、つけあがるにやも！」

怒りのせいで言葉を吃らせながら、インカラは立ち上がった。

「今までおみやあの武勲に免じて言わしておったが、この恥知らずの恩知らずめ！ 今度という今度はもう我慢ならんにやも！！」

鼻息荒くそう言うと、近くにいる兵士を呼び寄せる。

「誰ぞ、誰ぞあるにやも」

「はッ、ここに」

「この狼藉者を牢へ引っ立てるにやも！」

ベナウイは侍大将だ。部下も多く、若い兵の殆どは憧れ、尊敬する。何より誰もが、インカラの行動を正しいとは思っていない。それ故インカラの命令を受けた兵士も戸惑った。

「し、しかし……」

「ええい、おみやあも朕に逆らうにやもか！？」

しかしインカラの命令が正しいか正しくないか、ここにおいては関係がない。インカラは皇であり、その命令は絶対だ。

「いえ、そんな……」

「どうした伯父貴」

「おお、又ワング」

そこへ表れた又ワングに、インカラは嬉しそうに声を上げた。そして落ち着いたのかまた腰をおろして煙を吸い、吐いた。

「ぶはあ。このベナウイが、恩知らずにも朕に明日がないなどと吐かしおったわ」

それにヌワンギはにやにやと、笑みを抑えられないとばかりに唇を吊り上げながらインカラに近づいた。

「ハッ、そいつは許せねえな。いくら侍大将といえど皇である伯父貴へのその言葉、許せるモンじゃねえなあ。おいテメエ等、さつさとその下衆をふん縛れ。それとも、テメエ等も一緒に首をくくるか、ああ？」「ハハッ！」

追い立てるようなヌワンギに戸惑っていた兵士は慌てて返事をした。こつするしかないのだ。皇に逆らうことなど、許されないのだ。

「こちらへ……」

促す兵士にベナウイは黙って従う。こうなることはベナウイにもわかっていたのだ。覚悟をしていた。抵抗し、困らせるつもりはない。

「伯父貴。後はオレに任せて、偉大な伯父貴は安心してくつろいでくれ」

「にやも。後のことはヌワンギに任せるにやもよ」

自分に従順な甥の言葉にインカラは機嫌よく頷いた。

「……」

ベナウィは薄暗い、格子の向こうにある松明のみが光源の牢の中で静かに腰を落ち着けていた。

まるで外と代わらぬ、いつも通りの態度だった。

「…クツククク」

しかしそんな普段通りのベナウィも、格子越しに上から見下ろす又ワングにとってとはとてもなくおかしい、優越感をそそられる姿だった。

「ざまアねえなあ。これがあのベナウィ様のなれの果てか」

「……」

「ヘッ、フヌケて言い返すことも出来ねえか。テメエはもう終わりだ」

くつくつと笑いながら、又ワングは背を向けた。

「後はオレ様に任せて、ここで干物にでもなつてな」

「……」

ベナウィは何も言わない。立ち去る又ワングに視線を向けることすらなかった。

「くくく…」

一人、廊下を歩きながら又ワングは声をもらした。愉快でおかしくて堪らない気分だ。

何もかもがうまく言っている。全て順調に思えた。

又ワングは明るい未来がすぐそこまで来ているのだと確信できた。

もうすぐだ。もうすぐオレが皇になる。誰も刃向かえない絶対者になる。そうなれば、エルルウもオレを認めるようになる。

エルルウ、もうすぐお前がオレのものになる。

オレにはもう、オマエだけだ。

オマエを手にいれる為なら、何でもしてやる。何だってな…。

「クク…ククククク」

笑いはしばらく、止まりそうにない。

カンカンカンと鋭い鐘の音が敷地内に響き渡る。ハクオロたちは顔をあげた。

鐘に数瞬遅れて襖が開き、ドリイとグラアが表れた。

「報告します。敵の進軍を確認。その数、凡そ千二百！」

声を揃えてもたらされた情報に、部屋の空気が固くなる。

「千二百…」

その数に、集まっていた各纏め役である者たちがざわつく。オボロは眉をしかめて舌打ちをする。

「全軍で俺たちを一気に叩き潰す気か」

「しかし…一気に全軍とは…思いきったね。ベナウイはもっと慎重なやつかと思ってたけど」

「いえ、敵将は又ワングです」

会議中で固くしていた口調が乱れたハクオロの独り言に、ドリイがさらに情報を付け加えた。

「!？」

部屋にいてお茶汲みをしていたエルルウが耳を立てて反応する。それを感じながらハクオロは一度口を閉じてから、開く。

「そうか…」

大軍で一気にというのは単純だが、悪くない手だ。数の差が歴然であるほど効果が期待できる。ただ、少しばかり遅い。こちらも人員を増やしていて、逆に向こうは減らしている。

それに、ベナウイならば気づいただろうが、使い所を間違えている。単純で誰でも思い付くからこそ、陣地であるここの対策はすでに済ませている。千二百は多いが、慌てずに対処すればイレギュラーでもない限り乗り越えられる。

「静まれっ。指示を出す」

ハクオ口は立ち上がるとざわつく衆に向かって声をあげる。途端静かになる人々な、ハクオ口は矢継ぎ早に指示を出す。

「第一から第六群、西門より迂回して奴らの背後を叩く。弓衆は左右より援護。敵を挟むまでの間は本隊が城門を死守する」

そこまで一気に言ってから視線で確認する。もはや人々の目に戸惑いはない。

「出陣る（でる）ぞ」

ハクオ口の静かな始まりの合図に、咆哮が応えた。

「エルルウ」

「っ」

お茶をさげているエルルウに声をかけるとびくりと尻尾を震わせた。そのわかりやすい反応にハクオ口は少しだけ頬を緩めた。

「な、何ですか？」

「大したことじゃないよ。エルルウはいつも通り、僕の側にいてね

ってだけ」

「あ…はい、わかってます」

「ああ、それと…又ワングのこと、どう思っ？」

「っ…どう、とは？」

あえて二つ目に本題を持ってきたけど、あんまり効果はなかったらしい。エルルウは目に見えてびくりと反応した。

「質問を変えようか。僕らは勝つよ。彼をどうしたい？」

「……わ、わかり、ません。だいたい…私の意見なんて、どうだっ  
ていいじゃないですか。大將はハクオロさんで…私はただの雑用で  
す」

「そうかな、僕はそう思わないよ。薬師ほど大事な役職もそうない  
よね」

「……」

俯いてしまったエルルウにハクオロは近寄り、言葉を続ける。

「残酷なことかも知れないけど、僕はエルルウに決めてほしい。又  
ワングのことだけはエルルウに従うよ」

「ど…どうして？」

「又ワングは、君の大切な人だったんでしょ？ だからだよ」

「……」

「僕が決めてもエルルウはそれに従うだろうけど、僕は君に一片も  
後悔をして欲しくないんだ。だから決めてほしい」

生かすにしろ殺すにしろ、他人が決めたならいつか後悔する。何せ  
彼は目に見えて存在するトウスクルの仇だ。

だけどハクオロが一存で殺したなら、他の誰が納得してもエルルウ  
だけは後悔するかも知れない。しかしハクオロが生かしたなら、周

りの反発は大きいだろう。

トウスクルの死はもはやキツカケでしかないが、それでも彼女を慕う者は多くいる。しかしエルルウなら、誰よりトウスクールと又ワングに近いエルルウなら、どちらを選んでも受け入れられる。

ハクオロがエルルウに選択を委ねるのは、ようは彼女に嫌われたくないからだ。とてもずるい、卑怯なことだと思う。だけど多分、エルルウは彼の生を望む。だからこそ、エルルウにはつきりそう決めてもらわなければならない。

ハクオロはトウスクルの仇討ちに武器をとったのだ。付いてきてくれたエルルウとは違う。ハクオロでは又ワングを生かそうと言うことはできない。

「…なんで…そこまで、してくれるんですか？」

「その質問は…今更だね。なんでだと思う？」

「……」

彼女に苦痛を伴う選択を強いるのだって、自分だけじゃなく彼女のためでもある。

彼女の意志を尊重したいと。彼女の気持ちを知りたいと、そう思うからこそこんな卑怯なことをしなければならぬ。

その理由は、今、こんな慌ただしい状況下では言えないけれど。でもいつか、伝えたい。

けてエルルウたちが命の恩人だからでも、トウスクルの孫だからでもない。もしそう思われてるなら、心外だ。ハクオロはそれほど、お人よしではない。

「時間がない。今の質問はまた改めて聞くから、とにかく又ワングをどうするか考えておいて。さ、行こう」

「…はい」



エルルウは小さく頷いた。その瞳は迷いに揺れていたが、それでもハクオロから離れないよう、ハクオロの後に続いた。

## ヌワング、進軍（後書き）

ギリギリセーフ。何とか二ヶ月キープです。

最初は「出陣るぞ」までだったんですが物足りないのでエルルウとの会話追加。ていうかゲームでもエルルウに選択を委ねるなら予め一言くらい言っただけで済むべきだと思うんですよね。

## ヌワングの最期

「来たな……」

砦の前でヌワングの軍が近づいてくるのを確認したハクオロは振り向いた。

「僕らは橋周辺で敵を食い止める。出すぎるなよ」

あくまで目的は包囲をするための時間稼ぎだ。防衛のための本隊は数は多くないが戦力の要を揃えている。相手の数が多いにも多いのも幸いだ。一列にこちらへ向かってきているのでまず先頭と戦うところにはまだ兵の数も少ない。

ハクオロの合図で本隊が橋を渡り、半分はその前で敵を待ち受け、半分は積極的に敵への突撃する。

個別班の編成らしく、兵種ごとに別れてはおらず、弓兵と歩兵がまず到着し先陣を切ってこちらへ牙を向いてきた。

「食らえっ」

「ぎゃああー！」

弓を避け素早い身のこなしでオボロが兵を倒す。味方の悲鳴に気をとられた瞬間に弓兵にはこちらも弓を放ち、武器を落としたのを見てすぐに兵が突撃する。

全体の数でいくら負けていても、一度に向かってくるわけではない。余り統率がとれていないらしくバラバラに攻撃をしかける各兵に向かって複数で攻撃を加えることは、本隊の実力者にとっては容易で

すらあつた。

「クツケツケ、案外しぶといじゃねえか。だがそれも、もうすぐ…」

先頭を走る味方が負傷しても笑みを絶やさないヌワンギは、数故に勝利を確信しているのだろう。

「あん？」

しかし視界の端を霞めた敵兵の姿に眉を寄せた。ただ前にいるとばかり思っていた敵なのに、いつ、横から現れた？

「ハクオロさん、あれ！」

ヌワンギにとつては敵だがハクオロたちにとつてはもちろん味方だ。その姿にエルルウは喜びの声をあげてハクオロに伝えた。

「間に合ったか！」

目論み通り、味方が配置についた。時間稼ぎは成功だ。こちらに有利な陣さえひいてしまえば、少数で負けようが地の利があり統制のとれたこちらが有利だ。

ハクオロはにやりと笑った。

「何だあこいつら!？」

それに気づかないヌワンギは、今更になって辺りを見回しながら四方から現れた敵兵を睨んだ。

「大変です。我々は包囲されております」

「見りゃ判るんだよ、この糞が！」

又ワングの問いかけに慌てながら一人の兵が答えたが、又ワングは苛立ちと共に罵倒し、殴りつけた。

「で、ですが…」

「うるせえ！」

さらに殴りつけ、返事を封じる。

何故もつと早く気づかないのか、のろま、クズが、と罵倒が浮かんだが今は叱責している場合ではない。

「チツ・こうなったら一旦後退して態勢の立て直しだ」

又ワングは舌打ちしながら、殴った相手、伝令役に指示を出す。

「ど、どこに逃げるんですか？」

「逃げるんじゃない！ 態勢を立て直すために後ろを一気に突破するんだよ！」

「今そんなことをすれば被害が…」

問いに、負けず嫌いな又ワングは反射的に言い返しながら再度後退を指示するが、伝令役は戸惑いながらも現状を伝える。

四方を囲まれているのだ。元来た道である後ろさえ、敵がいる。それを無理に突破しようとするれば多くの死傷者が出てしまう。

しかしそれを又ワングはイライラしながら問題外だと怒鳴りつける。

「ここにいたら余計に被害がでるじゃねえか！」

囲まれたままでは最悪全滅してしまう。それだけは避けなければな

らない。

「行きやがれ！ 後ろを一気に突き崩せ！！」

少しでも負傷者を少なく態勢を立て直すため、早く早くと又ワングは伝令役を通すのももどかしく大きな声で指示を出した。

それが聞こえた兵たちが反転するが、それを待つほどハクオロは愚かではない。

「鋼の陣！」

ハクオロが声を張り上げ合図を出した。規則正しく並んだ歩兵が剣を振り上げ進軍する。

それを見た又ワングが率いる兵はその隊列に恐れをなしたか、かうじて保たれていた並びを崩しててんでばらばらに逃げ出した。

「ぬな…っ」

自分の命令に絶対だと信じていた兵の我が身しか考えない脱却に又ワングが驚きの声をあげる。

「槍の陣！」

構わずさらにあげたハクオロの声に槍の歩兵と騎乗兵が構え、又ワングらに向かう。

「ま…て、てめえら何処行きやがる！」

怒鳴りつけるも、先程まで隣にいた兵さえ又ワングに構わず逃げ出した。

命令に従っていても確実に交戦しなければならない。それより自分のことだけなら武器も捨てて走れば逃げ切る可能性がある。

又ワングを信頼し、命令をきき、守ろうとする兵は、誰もいなかった。

「ま、待て…」

小さくなった又ワングの命令は、ただでさえ自分の命を優先する兵たちの耳には、届くことすらなかった。

「……」

又ワングの小さくなった姿を、エルルウは見つめたまま口を結んだ。何も、かけるべき言葉はなかった。先程ハクオロにされた問いの答えは、もうでている。

「え、エルルウ…」

エルルウの視線に気づき、又ワングは無意識にその名前を口にしながら、見つめた。

その表情は固く、かつて己に向けられた柔らかい、又ワングが好きだった笑顔とは似ても似つかない。

「ッ！ てめえが…てめえがいたせいで…っ」

エルルウにそんな顔を向けられた事実は辛く悲しく、又ワングはエルルウの隣に立つハクオロを睨みつけた。

ハクオロさえいなければ、エルルウがいるのは自分の隣だったのに。

又ワングにはハクオロが全ての現況に見えた。ハクオロさえいなければ全てがうまくいったはずだと、憎々しげにハクオロを睨む。

「殺してやるぞ！ てめえだけは何があっても殺してやる！」

あまりにも大きな声だからか、それとも別の理由でか、僅かに震える声で又ワングはハクオロに怒鳴り、味方もなしにハクオロに向かって走り出した。

「ハアッ」

「がつ」

しかし、いち早く反応したオボロの手によりたやすく又ワングは地に膝をつけさせられ、剣は地面に落ちた。

「くそつ、こんな筈が……！」

悔しげにうめき声をあげる又ワングだが、それに応える者はいない。

「敵、撤退してゆきます」

ドリイとグラアが声をそろえて報告するように、又ワングの味方であるはずの兵たちはすでに半ばが撤退している。

「逃げる者は追うな。もう勝敗はついた」

ハクオロの命令はすぐに全兵へと伝令される。

幸か不幸か、又ワングの配下にあった者の殆どが大きな傷もなく帰還していった。

国にとって又ワングを含めた数えるほどの兵は大きくない損失だろ



う。しかし、ハクオロたちにとっても死傷者なく軍を退けたというのは大きい。  
数で負けているハクオロたちには、深追いしてまで兵力を減らすことはできないのだ。

「お…オレ様の…オレ様の軍が…オレの…」

散り散りに逃げて行く兵に、又ワングは絶望に声をあげ、脱力する。味方は一人もおらず、敵に囲まれ、もはや反撃はもちろん、逃げることもさえ叶わない。又ワングはもはや抵抗を諦めた。

「最後は見捨てられちゃったかい。こうなると哀れなもんだな」

テオロはその姿に、怒りと同情が混ざったかのような複雑な表情を浮かべながら固い声で遠回しに又ワングを責めた。

「へ…へへ…へへへへ…様あねえなあ、まったくよう…」

又ワングは気が触れたかのように唇を吊り上げ、笑い声をあげて自嘲し、しかし今だ敵意の消えないギラギラした瞳で周りの人間を睨みつける。

「殺れよ…さあ、殺れってんだよ！」

「覚悟は出来てるようだな」

「待て」

自棄になったかのように叫ぶヌワンギにオボロが剣を取り出しだが、ハクオロはそれを止めた。

攻めてきた敵の大將だ。オボロの判断は正しい。だけど、エルルウの意見を仰ぐというのがハクオロにとっては一番正しく感じるのだ。

「兄者、何故止める」

「エルルウ、どうしたいか、決めた？」

「……」

睨んでくるオボロを無視し、ハクオロはエルルウに尋ねた。

エルルウは黙ったまま、後ろから前方へ、ヌワンギの目の前へと、姿を表した。

無表情なエルルウにヌワンギは一瞬顔を引き攣らせたが、すぐに自虐的な笑みになって声をあげた。

「どうした、笑いたきゃ笑えよ。婆があんな事になってオレを恨んでんだろ。惨めな姿を見て、さぞ気分がいいだろうな！」

「！」

パン、と音がした。ヌワンギは何が起こったのかわからないのか、瞬きを繰り返した。

「…あ？」

エルルウが又ワングの言葉に怒りで眉を逆立てて、又ワングの頬をひっぱたいたのだ。

又ワングと見つめあつて数秒、エルルウは我慢の限界がきたかのようにな表情から一転、くしゃりと顔を歪ませた。

「バカ…どうして、どうして判ってくれないの。私、何もいらなかったのに」

場は静まり返り、皆が二人を注視していた。エルルウを止める人間は誰一人いない。

エルルウは震える声で、又ワングへずっと伝えたかったことを吐き出した。

「綺麗な服も、高価な飾りものも…贅沢な暮らしなんか出来なくなつていい、貧しくつたつていいのただみんなと一緒に暮らして、少しか幸せがあれば…それだけでよかったのに…」

「な…」

又ワングは驚愕に目を見開きながら、エルルウの言葉を聞いていた。

「又ワングだつて、昔はそう言つてたの…忘れたの？ そんな不器用だけど、純朴で優しい又ワングが…好きだつた」

言われて、又ワングはを昔のこと思い出す。昔、エルルウと歩いていたころ、彼女は確かに俺の言葉や行動に笑いかけてくれていた。

エルルウは堪えきれなくなつたのか瞳を閉じた。涙が一筋こぼれ落ちた。

「どうして…又ワングの、馬鹿あ…」

「お、オレは…オレはただ、お前と一緒に……お前を、幸せに…」  
「そんなの…幸せなんかじゃない。全然…幸せじゃないよ…」

又ワングはエルルウを幸せにできるのは権力を得た自分だけで、お金があれば幸せにしてあげられるのだと信じていた。なのに、エルルウはそれを真っ向から否定した。

「……。じゃあ、オレは何を…何やってたんだ」

信じていたことを否定され、まるで又ワングは地面が崩れていくかのように思った。何がどうすればよかったのか。今更後悔しても遅いのはわかっていたが、後悔せずにはいられなかった。

「……」

うちひしがれる又ワングの縄を、エルルウは黙って解いた。又ワングははっと顔をあげた。

「え、エルルウ…？」

「恨んでなんか…ないよ。恨めるわけじゃない」

ついにエルルウは嗚咽をもらし、涙も隠さず、泣きながら、又ワングを見つめた。

「あの時、おばあちゃんのこと、『バアちゃん』って、言ってくれたのに…恨めるわけない…」

「……」

「さよなら…又ワング」

永遠に、さよならだ。恨めないけれど、また一瞬にいるなんてできない。誰も認めないし、エルルウ自身、何のわだかまりもなくすな

んでできない。起こったことはなくならない。失われた命はもどらない。

又ワングも、それがわかった。エルルウと生きることとはできない。彼女にかける言葉ももはやない。

又ワングは黙って立ち上がった。

ハクオロたちは誰も又ワングを止めない。誰も、エルルウの行為を咎めない。

ハクオロは用意しておいた、少量だが食料などが入った包みを又ワングに渡した。

「又ワング、達者で」

「…ああ。…俺がこんなこと言うのは、筋違いだろうが…エルルウを泣かしたら、許さねえからな」

「ああ、任された」

又ワングはハクオロの言葉に小さく笑うと、砦を後にする。とても敵とは思えないほど、静かに又ワングは見送られた。

夜、荒野にて又ワングは腰を下ろしていた。

「エルルウ……」

名前を呼ぶと胸が熱くなった。

そういえば、最近はずっといらいらするばかりで、純粹にエルルウのことを思っではいなかった。

忘れていた。エルルウのことを考えると又ワングはいつだって温かくなれた。エルルウのためなら強くなれた。

そんなこと昔は当たり前だったのに、忘れていた。

「オレは……この戦をやめるよう、頼んで……いや！ 何としてでもやめさせてみせるっ」

小さく誓いをたてる。

今日はここで野宿をして、数日かかるが都に戻れば、何とかなる。

相手は叔父とは言え、父親と同じく俺を使い捨てにしか思っていないだろう。だけど血縁なのは本当だ。最悪、あいつを殺してしまえばどうにでもなるはずだ。

「それがお前への、せめてもの……」

穏やかな顔で又ワングは夜空を見上げた。その瞬間、弓がしなる、するどい音がした。

「……へ？」

何かがぶつかったような衝撃に上体が揺れた。視線を下げる。

「何……だ？ 何か……刺さってやがる……」

胸から弓がのびている。理解ができない。

「なん…で？」

視界がゆがむ。又ワングは体の制御ができないことに気づいたが、なすすべはなく、地に伏した。

複数の足音がして、目は見えなくなったが囲まれたことを知る。

「見ろよ、こいつはかなりの上玉だぜ」

「…悪く思うな。俺達はただ、お前たちにとられたものを返してもらってるだけなんだからな」

又ワングの格好から、国軍であるとわかって襲ったらしい。おそろく襲撃した集落の生き残りだろう。

又ワングが殺したのはトウスクールだけではない。数えきれないだけ殺した。だから数えきれないだけ、恨みに思う人間がいる。

「無駄口叩いてねえで、とつと身ぐるみ剥がすの手伝え。分け前減らすぞ」

「おい、まだこいつ生きてるぜ」

「ほつとけ、どうせもう助からねえよ」

「おい、確かこいつ、侍大将じゃねえか？」

「ホントかよ！？ だとしたらツイてるぜ。コイツの首を叛軍に持つてけば、褒美ががっぼりだ」

「そしたら、こんな生活とはおさらばだ」

まだだ。まだ死ぬわけにはいかない。自分のせいで戦が始まり、人が死んでいるのだ。自分が、戦をとめなければ。それが又ワングに

できる精一杯の償いだ。償いきれるとは思わないが、やらねばならない。

「エ……ルル……」

手を伸ばす。だけど、もう遅い。ヌワンギはどこにも行けない。

空を切る音がして、ヌワンギの意識は途切れた。



## ヌワングの最期（後書き）

タイトルがネタバレですが、これくらいならありますよね。  
今回も何とか間に合いました。

## 皇都侵攻

ヌワンギが率いた先の戦いにより、敵軍は統制を失い、波にのつたハクオロ軍は破竹の勢いで勢力を広げて行つた。

国の三分の二を制したところにはもはや優劣は明らかであり、各集落だけでなく藩主や豪族までもが様々な思惑のもと、傘下に加わつていた。

そしてハクオロたちはついに皇都へと侵攻を開始した。

その時、ベナウイはいまだ皇居の地下、薄暗い石造りの牢屋の一室で静かに目を閉じていた。

そこに一人の足音が近づく。

「むかえに参りやしたぜ、大将」

「……」

目の前に来て声をかけてきた部下、クロウの言葉にベナウイは目を開いた。

クロウがここまで来る許可がおりるはずもなく、彼がここにいるだけで、すでに平常時ではないことが伺えた。

「戦況はどうなってますか？」

「あいつの指揮する第二軍は敗退。ほぼ壊滅状態となりやした。あいつ自身は戦死か、それとも……何れにせよ消息は不明」

ヌワンギがどのようなやり方をしたのかはベナウイにはわからないが、指揮力は短期間でつくものではない。彼が負けたこと自体は驚くこともない。

「叛軍は現在、ここに向かって集結しつつありやす。早ければあと数刻で戦になりやすぜ」

「聖上はどうなさってますか？」

「……髪の手入れの真つ最中」

ベナウイの問いにクロウは少し嫌そうな顔をしてから、ふざけるような軽い調子で答えた。

「最近抜け毛が激しいもんで、念入りにやってやす。誰も邪魔するなと言ってやしたぜ」

「そうですか……」

「いつそのこと、このまま永遠に……と、こりゃ失礼」

ベナウイの視線は特に咎めるものでもなかったが、彼の主義を知るクロウは失言と思い途中で止め、牢屋の鍵を開けた。

「全軍、出陣します」

「大将、本当にいいんですかい？」

出るなり言われた言葉に、予想はしていたが尋ねずにはいられなかった。

「気付いてるハズですぜ。この國にはもう、護るべき価値は何もないって」

「そうですね。もはやこの國の崩壊は必然でしょう」

「だったらどうして。大将なら、どの國だって高く受け入れてくれやす。いや、大将さえその気なら……」

「クロウ、そこまでです」

「……出過ぎた真似を」

わかつていてなお見捨てない。クロウはそれを理解はしても共感  
はできなかった。だが他人の主義を否定することは傲慢であるとは  
知っていた。彼が最後までこの國に仕える武人であることを選ぶな  
ら、それを否定することはできない。

「あなたの心遣いは感謝します。ですが、それでも私はこの國の侍  
大將なんです。私には、この國と運命を共にする義務があるので  
す」

「ですがね……」

「全兵に伝えておいてください。『劣勢となった場合、すぐに投降  
せよ』と」

「大將、まさか……」

「行きましょう。これが最後の戦いとなります」

「……」

歩きだしたベナウイに一瞬、なんと言おうかと苦悩した。だが彼  
の颯爽とした背中に無粋なことを言うのは躊躇われた。

「ういっす。一丁、ハデにやりやすい」

なのでここは一つ自分らしく、何も考えずに笑うことにした。

なに、難しいことではない。ようは最後まで大將についていけば  
いい。最後まで彼の右腕でいる。それだけだ。

城へ門を突破し、門外からも別部隊が侵攻し敵兵力を分散させ、ハクオ口たちは中央を真つすぐに本丸へ向かっていた。

しかしその途中、道の真ん中を遮る巨体に足を止めた。

「やっと来たかい。待ちくたびれたぜ」

悠々とそう言つて寧猛に笑うクロウ。ベナウイの姿はいないが、恐らく他の兵はいるだろう。武器を構えて警戒する。

そんなハクオ口たちにクロウは距離があるとは言え、武器を下ろしたまま話し掛ける。まるで友人のように親しげに。

「この前は悪かったな。途中で抜け出しちまつて。まあ、お詫びと言つちやなんだが、今日は最後まで相手するから、それで勘弁してくれや」

「僕らとしては、出来れば相手をしてほしくないんだけどね」

恐らく勝てるだろう。しかし余分に時間を使つし、無駄に消耗してしまう。最近は姿を見なかったが、やはり避けられないか。

ハクオ口の本音まじりの軽口にクロウははつと笑う。

「馬鹿言つちや、いけやせんぜ。それじゃ失礼つてモンだし、第一…つまらんだろ?」

ニカツと、無邪気といえるほど豪快な笑みを浮かべてクロウは大きな刀を掲げた。それを合図に、兵が出現する。数はそう多くなく一個隊ほどだがそれはこちらと同じだ。

「さあ、始めようかい。どちらかの息の根が止まるまでなあ――！」

クロウの叫びに似た始まりの合図に、一斉に走り出す。飛び交う弓矢をかい潜り一番乗りに敵兵にたどり着いたのはオボロだ。

しかし一人目をぶった切ったところで、クロウがオボロの斬撃を受け止めた。

「ここを通すわけにはいかねえな」

「なんとしてでも通る！　そして奴を――倒す！」

余裕ぶったクロウの態度にオボロは眉を吊り上げ、ギリギリと刀に力を込めた。

クロウはそれをかわして、巨体から想像つかない素早い身のこなしでオボロより一足遅れていたハクオロに向かった。

「ここであんたさえ討ち取れば、この國は助かる――！」

「――本当にそう思っているのか？」

「冗談でさ――だが、それでもやんなきゃならねえんδει――！」

その気迫に思わず尋ねるとクロウは戦いの最中だが僅かに口角をあげ、そう答えながら剣を振り上げた。ハクオロはそれを転がるように避けた。

単体の兵力ではこちらが上だ。今もドリイグラアの弓矢が、テオロの斧が、ムツクルの牙が敵の数を減らしていく。

途中から気付いているが、敵はある程度の怪我をすれば降伏をしていく。もちろん手加減できるものでもないので一撃で致命傷となる場合もあるが、多くが生きたまま降伏している。殺すより手間がかからず精神的疲弊も少ない。クロウさえ何とかすれば、疲労も少なく突破できる。

「オボロッ」

「応っ」

「ふうーやれやれ、負けちまったか…」

クロウの得物は手から落ち、オボロとハクオロ、そしてドリイに弓先を向けられてようやくクロウは動きを止めた。

まだその気になれば命と引き換えに相手の大将に傷をおわすくらいならできるだろう。しかしそこまでして忠誠を表したい皇ではないし、この戦は負けが決まっている。ならばいずれこの大将が皇になろう。ぶざまにあがいてまで一矢報いたい相手ではない。

それに敬愛するベナウイが認めた相手なら負けても恥ではない。なのでクロウは潔く負けを認めた。

利き腕を深く切られていたが、それでもクロウは痛みなどないように苦笑し、その場に座りこみ、あぐらをかいた。

「ホレ、持ってたきな」

そして手刀でトントンと首を叩く。降伏すれば助かるだろうが、例え負けが決定しようが自ら命乞いをする気はクロウにはなかった。

し、それが兵を率いた責任だとも思っていた。  
しかしハクオロは武器を下げた。

「いないよ、そんなもの」

「おいおい、そんなモノはないだろ。相手の首を掲げるのが武人としての礼儀だろうに」

「生憎、こっちは武人じゃない。そんな礼儀に付き合う必要はないよ」

そう言つて悠々とクロウの横を通りすぎるハクオロにクロウは頭だけ振り向いて問いかける。

「生かしておいて、後で背後から斬りかかれたらどうするんで？」

「つまらないことを言うね。そんな男が、武人の礼儀なんて持ち出すか？」

「……」

「みんな行くぞ」

負けを認めた。認めた以上、これ以上どうこうする気はない。しかし、拘束すらないというのか？

「そんなに死にたければ、自害でもするんだな」

驚くクロウに通りすぎざまにオボロが吐き捨てるように言った。

あれだけ殺すと息巻いていたのに、あっさりとクロウを放置した後を続くように他の男たちもクロウを置いて行く。

「……」

そこに、エルルウが近づいた。当たり前だが暗い顔をしている。



恨み言でもあるのだろうか。

「なんスかい？」

「…動かないで下さい。傷の手当をしますから」

「お、おいおい。信じられんことしなさんなつて。このまま嬢ちゃんを人質にするなり、首をへし折るくらいは簡単に出来るんですぜ」

エルルウは答えながらクロウの傍に屈み、薬箱を開けた。淡々と準備を始めたエルルウにクロウは仰天しながら注意をする。拘束しないだけでも驚きなのに、まだ戦をしてる最中だというのに敵兵の手当てをするなんて常識外れも甚だしい。

けれどエルルウはクロウに構わず手当を開始した。クロウは困惑しつつもそれを受け入れたが、顔にはありありと不可思議だと書いてあった。

「もう…人が死ぬのは見たくないの……」

クロウに答えたのか、それとも自分に言い聞かせているのか、エルルウは独り言のように小さくそう言った。

「……」

クロウは口をつぐんだ。何も言えなくなった。クロウは闘うことは好きだが、何も人殺しを好んでいるわけではない。死ぬことを覚悟したが、死にたいわけではない。それでも敵の命をそんな風には思えないし、思われるとは予想していなかった。

「終わりました」

「こりゃ…どうも」

ずいぶん手慣れているようで、素早く丁寧な手当だった。出血も止まり、動かしても平気だ。

なんならもう一度戦闘に参加できる程度には、手厚く手当をされてしまった。

「旅だった後は残される人がいること、忘れないで下さい」

エルルウは立ち上がり、それだけ言うと頭を下げてから立ち去った。また他の怪我人でも探しに行ったのだろうか。

「お……」

その背中に思わず声をかけようとして、ただ言葉は形にならなくてクロウは頭を掻いて天を仰いだ。

「大将… ホントに、負けちまいしたよ…」

単なる戦った勝敗だけではない。気持ちすら負けてしまった。だけど何故か、悪くない気分だった。

「……」

ふと、何気なく視線を戻し、振り向いた。

「であ…!?!」

白と黒の猛獣がいた。思わずのけ反った。

「……」

森の主ムツクルとそれに跨がる少女アルルウがじっとクロウを見ていた。

感情の読めない無表情な少女と獣の瞳に、まさか食われはしないと思いつつ逃げ腰になる。そもそも森の主が何でこんなところで少女の乗り物をやっているんだ。

「な、なんですかい、小さな嬢ちゃん」

「傷は舐めると治る」

「はあ!？」

「舐めてあげる」

つまり姉と同じくクロウの手当をしようと申し出てくれているらしいが、舐めるとはまた動物的な。少女に舐めさせるくらいなら自分でやるし、だいたいすでに治療済みだ。

「い、いや、そいつぁ嬉しいが…」

「ムツクル」

「ヴオ」

「あ？」

少女の呼びかけに従順に反応した森の主がクロウに顔を寄せ、舐めた。

「ぐがつ!？」

ざりざりとした鑢のような舌が、かすり傷の上をなぞりあげる。

「デ、デデ、こ、コイツかつ、コイツなのか!」

少女に舐められても反応に困るが、痛い。これは普通に痛い。し

かも無理矢理止めようとしても力で敵わない相手に、下手に手を出したら思わず腕を噛みちぎりかねない。

べたべたとよだれにまみれて、痛いのもあるが何だか情けない気分になってくる。

「舌が痛エ、生臭エ、おいかじってる、かじってるって！」

## 皇都侵攻（後書き）

間を空けすぎてるせいかなどんな文章だったか忘れてきました。話に違和感とかあったらご指摘お願いします。

読んでくださりありがとうございました。

何故かクロウ視点みたいになりましたが、別にクロウ好きじゃありません。一番好きなのはカルラです。

メインヒロインはエルルウですが…。

なんつか、原作沿いすぎてつまらないですね。日常なら主人公の個性だせますが、シリアスシーンは変えられないから仕方ないんですが。

とりあえず城とつたら第一部完ってことで一回完結にします。しばらく凍結ってことで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5027c/>

---

おさなくあるもの

2011年9月14日12時31分発行